司馬遼太郎

# 功名が辻（一）



文春文庫

**著者紹介**

**司馬遼太郎**（しば・りょうたろう）

大正12(1923)年、大阪市に生れる。大阪外国語学校蒙古語科卒業。昭和35年、「梟の城」で第42回直木賞受賞。41年、「竜馬がゆく」「国盗り物語」で菊池寛賞受賞。47年、「世に棲む日日」を中心にした作家活動で吉川英治文学賞受賞。51年、日本芸術院恩賜賞受賞。56年、日本芸術院会員。57年、「ひとびとの跫音」で読売文学賞受賞。58年、「歴史小説の革新」についての功績で朝日賞受賞。59年、「街道をゆく〝南蛮のみちⅠ〟」で日本文学大賞受賞。62年、「ロシアについて」で読売文学賞受賞。63年、「韃靼疾風録」で大佛次郎賞受賞。平成3年、文化功労者。平成5年、文化勲章受章。著書に「司馬遼太郎全集」（文藝春秋）ほか多数がある。平成8(1996)年没。

文春文庫

# 司馬遼太郎
# 功名が辻 (一)



文春文庫

功名が辻 (一)　司馬遼太郎

し 1 17

文春文庫

476＋税

9784167105174

1920193004762

ISBN4-16-710517-9

C0193 ¥476E

定価(本体476円＋税)

天下にむかってはなばなしく起ち上った織田信長の家中に、ぼろぼろ伊右衛門とよばれる、うだつの上らない武士がいた。その彼に、賢くて美しい嫁がくるという……伊右衛門は妻千代の励ましを受けて、功名をめざして駈けてゆく。戦国時代、夫婦が手をとりあってついには土佐一国の大名の地位をえた山内一豊の痛快物語。全四冊

し 1 17

文春文庫

## 文春文庫　司馬遼太郎作品リスト

- 最後の将軍 —徳川慶喜— 新装版
- 十一番目の志士 (上)(下)
- 世に棲む日日 (一)〜(四)
- 酔って候
- 竜馬がゆく (一)〜(八) 新装版
- 功名が辻 (一)〜(四)
- 故郷忘じがたく候
- 歴史を紀行する
- 幕末
- 夏草の賦 (上)(下)
- 義経 (上)(下)
- 坂の上の雲 (一)〜(八) 新装版
- 日本人を考える 対談集
- 殉死
- 余話として
- 翔ぶが如く (一)〜(十)
- 木曜島の夜会
- 歴史を考える 対談集
- 対談 中国を考える
- 菜の花の沖 (一)〜(六) 新装版
- ロシアについて 北方の原形
- 手掘り日本史
- この国のかたち (一)〜(六)
- 八人との対話 対談集
- 対談 西域をゆく
- 歴史と風土
- 司馬遼太郎の世界 (文藝春秋編)

カバー・村上 豊

文春文庫

# 功名が辻

(一)

司馬遼太郎

文藝春秋

功名が辻(一)

司馬遼太郎

文春文庫

## 「明治」を描く大叙事詩

日清戦争勃発——秋山兄弟の活躍が始まり
子規は近代短歌・俳句を高らかに提唱する

**新装版全八巻**

し 1 77

文春文庫

552
＋税



坂の上の雲　二

文春文庫

# 功名が辻

(一)

司馬遼太郎

文藝春秋

目次

功名が辻
(一)

# 嫁の小袖

織田信長が、尾張清洲城から岐阜に本拠をうつしたのは、永禄十年九月十八日のことである。
清洲から岐阜まで八里。
織田家の将士三万のほかに、信長の内室濃姫、その侍女の群れ、さらに将士の家族まで行列にくわわり、ちょっとした、
「民族移動」
の光景であった。
むろん、独身の武士も多い。山内伊右衛門もそのうちのひとりであった。
馬廻役、というから近衛士官である。
五十石。
知行はすくない。
伊右衛門は、トッパイの兜に、粗末な桶皮胴の具足をつけ、剝げ槍をかかえ、馬は脚がみじか

く、ひどく老いぼれていた。

「ひどいなりの侍じゃな」

と、口にこそ出さなかったが、沿道の村々の百姓、女房、こどもまでも、この「三ツ葉柏」紋の指物を背負った若侍に、ひそかな嘲笑を送った。

めだつのである。

尾張の織田家といえば、軍容のさかんなことで天下に有名で、侍の具足、槍、太刀などはみなきらびやかなものであった。

その織田の家中のなかで、

「ぼろぼろ伊右衛門」

という異名をもっているのが、この若者である。ぼろぼろというのは後世の虚無僧のことで、まず、ていのいい乞食というものであろう。

家中のうわさでは、極貧にそだち、一時はそういう社会にもいた。

が、容貌からは想像できない。

丸顔、色白で、貴人の子のおもかげがあり、頬の赤さに幼さを残していた。

かれの亡父のこと、少年時代の流浪、その苦難、それら過去のことは、筆者がかれにかわって、おいおい物語るであろう。

ここでちょっと将来のことを匂わせておくと、この家中で数にもならぬ貧乏くさい若者が、さまざまな運命の段階をへて、のちに土佐一国の太守になるという、数奇な人生を送る。



しかし、いまは、過去はどうでもいい。将来もいい。

ただ、若者にとって、

「現在」

が、ときめくような期待でふくれていた。

(千代殿とは、どういう娘か)

それをおもうと、御しているやせ馬の脚まではずむような思いがするのだ。

(美濃では評判の美人であるという)

縁談がきまっただけで、まだこの眼でその美貌の女人を見たことはない。

若宮千代。

というのが、その娘の名前であった。織田家の岐阜移転をしおに、伊右衛門一豊は、この娘と結婚することになる。

岐阜の新城下のはずれに、彼女を迎えるべき新居もできていた。

(おれにも、嫁が来る)

美濃の空は、真蒼に晴れている。

伊右衛門は馬上で、深く息をすいこんだ。

嫁、嫁、嫁、と、伊右衛門の駒が、かるいほこりをあげてゆく。

伊右衛門が岐阜城下の新居の門前にさしかかると、亡父以来の郎党が二人、路上に水を打ち、

掃き清めて待っていた。

「おお、きれいになったな」

武家屋敷というのは名ばかりの小屋だが、それでも、貧弱ながら長屋門はある。この二人の郎党を住まわせるためのものである。

「五十石の小身には、すこしぜいたくすぎたか」

伊右衛門は、屋敷に入った。

拝領の敷地は、百坪。

そのなかに、台所、寝所だけの小さなかやぶきの母屋と、納屋を建てた。

それだけでは殺風景すぎるので、二人の郎党が、金華山（稲葉山）から、松、カエデ、ムクの木などを根びきしてきて、あちこちに植えている。

「これが、おれの屋敷か」

伊右衛門は、日あたりのいいぬれ縁にすわって、「邸内」を見まわした。

「しかし、いくらみても、おれの分際では大きすぎるなあ」

伊右衛門、気の小さいところがある。

「御小心な」

郎党の一人、祖父江新右衛門が、しかりつけた。

「そのうち、御出世あそばします。これしきのお屋敷、来年にはせまくなるかもしれませぬぞ」

といったのは、いまひとりの郎党五藤吉兵衛。



どちらも伊右衛門より十歳上の三十三で、亡父の代から仕えているから、家来というより、叔父さんのような存在である。

なにしろ、十四歳で父をうしなって放浪した伊右衛門を、この二人が、親つばめが子つばめに哺ませるようにしてこんにちまで育ててきたのである。

五藤家

祖父江家

この二人の家系は、のちに土佐二十四万石の家老、準家老になり、明治までつづく。伊右衛門一豊とともに興り、ともに栄える運命となるのだが、このときの二人は、粗末な茶染めの麻服、足には、このあたりの小作人が用いる、

「げげ」

というゾウリをはき、どこからみても、乞食と紙一重のふうていである。なにしろ、五十石の身分で、二人の家来をもつというのが、だいたい無理なのである。

だが、戦功は、

「家来」

によって樹てるものだ。伊右衛門一豊は、自分は米のめしを常食せずに、アワ、ヒエを食い、二人とその家族を養っている。

二人もまた、一豊の俸禄にたよろうとせず、合戦のないときには、付近の大百姓に傭われて、食い代をたすけていた。

「ご婚礼は、明夜でございますな」
「そう」
伊右衛門一豊の胸がときめいてきた。
「ご家中第一のお美しい嫁御料人であられまする」
五藤は、自分がもらうような笑顔で、うれしそうにいった。

あすは婚礼という夜。
岐阜から七里はなれた美濃不破地方の実家で、さすがに千代はねむれなかった。
「おかあさま、一豊（伊右衛門）様とは、どのようなかたでございます」
「またですか」
母親の法秀尼は微笑した。
このあいだから何度、千代はこのおなじ質問を、母親にしてきたかわからない。
「いいひとですよ」
それだけを法秀尼は答える。この利口な婦人は、余計な批評がましいことをいって、娘に無用の先入主を入れるのをさけているのである。
千代はあかるい娘であった。のちに、
「山内一豊の妻」
という名で、後世にまで日本史の代表的賢夫人といわれるようになった千代も、まだ無邪気な



小娘にすぎなかった。
千代の絵像がいまに残っている。
おもながで、眼の切れが異様にながく、唇がまるくて、ちょっとめずらしいほどの美人である。
千代は、利口さを、
「無邪気」
で擬装していた。利口者が、利口を顔に出すほどいや味なものはないということを、この娘は、小娘のころから知っている。
だから、たれからも愛された。
伊右衛門一豊は、父が戦死し主家が没落して流浪の少年期をおくったが、千代のばあいも似ていた。
こんどの縁談がととのったときも、
「お父さまがいらっしゃれば、どれほどおよろこびだったでしょう」
と母親の法秀尼はいったが、千代は父の顔をおぼえていない。
亡父、若宮喜助は、北近江に強勢を張っていた戦国大名浅井氏の家来で、ひとり娘の千代が四歳のときに戦死した。
千代がもしそれ相当の年ごろなら、養子をむかえて、父の家禄をつぐことができたであろう。が、幼すぎた。
やむなく母法秀尼は千代をつれて近江を去り、美濃にきて、親戚の不破家に身を寄せたのであ

る。
　不破家は、美濃三人衆の一軒にかぞえられるほどの大郷士で、当主市之丞の妻は、法秀尼の姉にあたる。
　千代は、母娘食客の身ながらも、不破家は彼女を裕福な環境でそだててくれた。
「先方は、貧乏だぞ。千代に辛抱ができるかどうか」
　縁談があったとき、義兄の不破市之丞は心配そうにいったが、法秀尼は、
「貧家のほうが、すえに楽しみがあるというものです」
　と、一豊の人物だけを見込んで、この縁談を受けたのである。

　千代にとっては、血のつながらぬ伯父にあたる不破市之丞は、血がつながらぬだけにむしろ、父親のような感情をもっていた。
　だから、いよいよ嫁にやるときまったときなど、
「とうとう、千代はいくのか」
　と、この不破地方の小領主は、ぶざまなほどに狼狽した。なにしろ、四つのときから、不破家の家族とともに屋敷でそだった娘である。
「娘をもつものではないな」
　と、愚痴をこぼした。
「可愛くなった盛りにやらねばならぬわ」



　実母の法秀尼のほうがむしろ落ちついていて、そういう義兄のあわてかたを、おかしそうにわらった。
　愚痴のたびに、
「くすっ」
　と忍び笑うと、
「なにがおかしい」
　と、むきになって怒るから、よけいにおかしいのである。
「おんな親というのは淋しくないのか」
「いいえ、さびしうございますよ」
　当然のことだ。とくに法秀尼のばあい、女手ひとつで育ててきた娘である。
　その娘を掌中から奪われるという心境は、他人に話してもわからないであろう。
　法秀尼は、夫の討死ののち尼になったのだが、こんど娘が嫁ってしまえば、不破屋敷の一隅に庵寺をたててもらい、事実上の出家をしようとおもっている。
　美濃では、いやこれは昭和初年代までそうだが、――一人出家すれば九族天に生ず、という思想があり、相当豪家では、一族のひとりは出家させる慣習があったから、この出家は異様なことではない。
「娘は一豊どのにとつぎ、わたくしは阿弥陀如来にとつぎます」
　と、法秀尼は、静かに微笑していた。

「さて、婚礼のことだが」
と、これもすこし以前のこと。不破市之丞は、不破家から嫁を出す以上、相当なことをしてやりたい、と力説したが、法秀尼はそれに対しても、
「いいえ、先方様は、お父様の代には栄えたとはいえ、いまは織田様でわずか五十石のご身分でございます。ふだん着ひととおりと、つかい古しの身のまわりの品々をもたせてやるつもりでおりまする」
と、がんこにことわった。新夫の一豊にひけめを感じさせまい、という温かな心くばりである。
「そうか。おぬしがそういうならやむをえぬが、これだけは通してくれ」
と、不破市之丞は、一案を出した。金子をもたせてやることである。それも、目録には含めず、千代の隠し金にすることにした。
額は、金十枚。
当時としては途方もない大金で、法秀尼はそれを千代のもってゆく鏡箱におさめさせ、
「この金子は、夫の一大事のときに取りだしますように」
と、千代にいいふくめた。鏡は円鏡で、いまは高知市追手筋の藤並神社におさめられている。
鏡の裏の文字は、
「毎傍玉台疑桂月　未開宝箱似蔵雲」。
当日、夕刻から、伊右衛門一豊は、肩衣をつけて、式場となる新居の居間にきちんとすわって



いた。
五藤、祖父江のふたりの郎党は、朝から支度にかけまわっている。
「旦那様、嫁御料人のお輿が、中宿までおつきあそばしましたぞ」
と、五藤吉兵衛が駈けこんだときは、陽も沈んで、あたりが薄暗くなっていた。
「左様か」
（落ちつけ）
と自分をしかりつけるのだが、膝においている両コブシがつい小きざみにふるえてくるのは、どうしようもない。
「旦那様」
と、祖父江新右衛門が、見かねていった。
「すこし横になられませぬか。左様に硬くなられては体に毒じゃ。御婚儀のはじまるまでまだ一刻（二時間）ほどござりまするぞ」
「左様か」
笑ってみせたつもりだが、笑いが白っぽくひきつった。
（ざまはないな）
自分で、自分を軽蔑したくなる。
当時の婚礼は、夜である。
その式模様も、伊右衛門一豊程度のぶんざいでは、簡素なものだ。

おなじ織田家の家臣で木下藤吉郎秀吉が浅野家の寧々をもらったとき、「かやぶきの長屋で、ゆかにすがきわらを敷き、さらにウスベリを敷いて、祝言をした」と、寧々が北政所になってから侍女たちに笑って話した。

一豊のばあいも似たようなものだ。

こういう下級武士の婚儀の儀式も一定していなかったころだから、式次第など、べつにこみ入ったものではない。

定刻になった。

中宿から、父親がわりの不破市之丞がまずやってきて、一豊にあいさつした。

門にすでに、あかあかとかがり火が焚かれ、玄関から居室までのあいだ、幾本もの燭台がかがやいている。

「お着きーっ」

と、門前で不破家の小者が、ひと声、犬の遠吠えのような声をあげた。

やがて、千代が、不破家の老女に手をひかれて、しずしずと入ってくる。

衣裳は、白い練絹のウチカケ、白の小袖といっただけのもので、足もとは素足にわらぞうり。頭にはものをかぶらない。

やがて、一豊の横に着座。

伊右衛門一豊は、真っ正面をむいたままだから、花嫁の顔がわからない。

やがて、盃ごとがある。



そのあと、上役、友人に酒食のふるまいがあり、一段さがって、両家の郎党、さらに土間では、小者などが、立食をする。

その間、花嫁は、酒器をもって酒をついでまわるのだが、伊右衛門の網膜には、なにやら白いものがひらひら動いているだけで、瞳をこらして顔を見るなどというゆとりはまったくなかった。

ひとびとが引きあげたあとに、一穂の燭台と、伊右衛門、千代だけが残された。

「旦那様、ふつつか者でございますが、二世の末までよろしうおねがい申しあげまする」

「私こそ」

不器用に答えながら伊右衛門一豊は、あらためて千代の顔をみた。

（なるほど、評判の美人ではある。すこし大柄なのが気になるが）

性質も可愛い女らしい。この可愛い性質の女に、伊右衛門は生涯ひきずりまわされようとはおもわなかったであろう。

千代は千代で、伊右衛門を観察していた。

（ちょっと不満だな）

と千代がおもったのは、伊右衛門がふっくらとした童顔で、武士らしい野太さが欠けているような感じがしたことだった。

それに、背丈は中背。

（これで戦場の槍働きはできるだろうか）

もっとも、伊右衛門がなかなかの武勇の士であるということは、すでに「蔭聞き」で十分に知りつくしている。

だから千代は、ひげのそりあとの濃い顔の、四肢などは駿馬のような男を想像していたのである。

（眼が、いいな）

とおもった。考えぶかそうな眼で、しかも機敏そうであった。こういう眼をもつ男なら単に格闘上手の槍仕よりも、一軍を駈け引きさせる武将にむくかもしれない。

千代の値ぶみがつづく。

（なによりなことは、気品があることです）

十四歳で流浪して、ちかごろやっと織田家に拾われた身だが、さすがに血は争えない。

山内伊右衛門一豊の生家は、むろん取りたてた家柄ではないが、まずまず尾張の田舎では、はずかしい出身ではない。

尾張織田家、というものから説かねばならない。

もともと足利の職制による尾張の守護職は斯波氏であり、織田家はその守護代にすぎなかった。

いわゆる足利末期の下剋上で織田家が主家をしのいで強勢になり、事実上の尾張の国主になった。

織田は、二軒にわかれて、尾張を半国ずつ支配した。

岩倉織田氏と、清洲織田氏である。



いまときめいている織田信長の家系はこのどちらでもなく、父信秀の代まで清洲織田家の一奉行にすぎなかったが、信秀は同族、主家の城地を攻めとって次第にのしあがり、信長の代にいたってついに一国を平定した。

この信長に亡ぼされた岩倉織田氏の家老が伊右衛門一豊の父但馬守盛遠である。岩倉落城とともに父は死んだ。

「山内但馬守盛遠の子」

という家系は、尾張ではわりあい通りのいい家系である。

が、織田家には新参で、まだ五十石。

「一豊さま」

と、千代はそういう呼びかたをした。のちのちまで、手紙をかくときも、これである。

「申しあげたい儀がございます」

（ふむ？）

と、伊右衛門一豊は、今夜から自分の妻になる女性をみた。

「なんなりとも、申してみますように」

「はい」

千代は、小首をかしげた。

かしげたが、声にはならない。

「どうしなされた」

「あの、やはり、はずかしうございます」

夫とはいえ、まだ実感のともなわぬ相手に千代は長い言葉を話しかける勇気はなかった。

「いずれ……」

「話すおつもりでありますな」

と、伊右衛門はやさしくうなずいた。

（……）

やはり千代にとって多感な夜なのだ。一豊のその言葉だけで涙ぐんでいる。

ふと、伊右衛門は、

（例のことを怖れているのだな）

とおもった。

ふたりは、臥床（ふしど）に入った。

案のじょう、臥床のなかで、千代はからだじゅう蒼ざめたかと思うほど慄（ふる）えていた。

（じつをいうと、おれも知らぬ）

初夜の心得は、郎党の祖父江新右衛門が、手みじかに話してはくれた。ほぼ見当はつくのだが、現実の女性がそこにいるとなると、伊右衛門は、どうすることもできない。

伊右衛門、二十二歳。

この時代としては立派な大人だが、なにしろ亡父の代からの五藤、祖父江といった二人の郎党



が、真綿にくるむようにして育ててくれたために、女というものに接したことがないのである。

一ッ臥床の中で、伊右衛門は眼を闇の天井に見ひらき、体をかたくし、千代の肌にもふれずに懸命に自分の激情とたたかっていた。

が、それも限度にきた。

「ち、千代殿」

「はい」

千代も、絶え入るように心細い声である。

「わ、わしは、夫になるぞ」

と、抱きよせた。

（まあ、乱暴）

と、こうなれば、千代のほうが、まだしも落ちついている。

怖い、とおもったが、母の法秀尼に教えられたとおり、ただひたすらに殿御にまかせるつもりであった。

が、その殿御がたよりない。

無性やたらに、熱いからだを寄せてきているだけで、どうともしないのである。

（このひと、戦場ではどうなのかしら）

まるで別のことを、思った。

その夜は、ついに何事もなかった。

信じられないほどばかげたはなしだが、この夫婦が、ちゃんと夫婦になったのは、初夜から十五日目のことである。

このときは、千代も伊右衛門も、さすがに大事業をやっと果たしたような昂奮で、体をはなしてからも、容易に寝つけなかった。

「今夜は、終夜、物語をしましょう」

と、千代が、恥ずかしそうにいった。

「千代」

と、伊右衛門はよびすてた。

その語韻が、やはりさきほどまでのそれとはちがった温かみがあった。

「なんでも、話してごらん」

夫婦とはいいものだ、という実感が、潮の満ちてくるように伊右衛門の胸をひたしている。

「はい」

千代は、臥床の中で温もっている伊右衛門の右手をにぎり、それをそろそろと自分の唇に近づけて、

「痛いっ」

と伊右衛門がとびあがるほど、小指を嚙んだ。



「あっ、堪忍してくださいまし」

千代のほうがあわてた。無意識に口に入れて嚙んでしまったのである。

(可愛い女だ。こんな妻をもらえたとは、自分はなんと、よい星の下にうまれたことか)

「あの、一豊様」

と、千代は生涯そう呼んだよび方で、伊右衛門によびかけた。

「男として、ご自分のご生涯を、どのようになればよいと望んでいらっしゃいます？」

「そうだな」

正直なところ、新参早々でもあり、それに年若くもあって、一日も早く織田家の家風になじみたいことと、戦場での武功ばたらきのほかは考えたことはない。

「お考えでございましょう」

「そう」

考えたことはない。

が、新妻にそう問われれば、伊右衛門にも見栄はある。

「武士とうまれた以上は、葉武者にはなりたくはない。一国一城の主と仰がれる身分になってみたいものだ」

「一豊様は、なれます」

と、千代は巫女のように断定した。

（えっ）

「なれるかね、私が」

おどろいたのは、自分でそんな大それたことを思ったこともない若者だったからである。

「お顔を見、お心をみて、きっと一国一城のあるじにおなり遊ばすお方だと思いました」

「千代が？」

つい数日前まで娘っ子だったくせに何をいう、と伊右衛門にはそんな肚がある。

「千代だけではございませぬ。伯父の不破市之丞もそう申しておりましたし、母の法秀尼もそのようなことを申してわたくしに聞かせました」

と、千代はうまい。要するに、伊右衛門に自信をもたせることである。自惚れという肥料だけが、才器ある男をのばす道だ。それが武将であれ、禅僧であれ、絵師であれ。

かしこい千代は、その機微を知っている。

「私がなれるかね」

「なれますとも。およばずながら、山内伊右衛門一豊様が、一国一城のあるじになられますまで、千代が懸命にお助けいたします。その誓いを、この夜、たてたかったのでございます」

月の光が、枕頭にさしこんできた。

伊右衛門は千代のあごに指をあて、そっと面をあげさせてみた。可愛い唇である。

この唇が、たったいまほどの大事をぬけぬけといったとは、到底おもわれない。

その後、一年。



この期間は信長の勃興期で、といえばスラリときこえるが、天下の諸大名にとってはそれどころのさわぎではない。

「織田」

という一頭の巨獣が、尾張で目が醒め、隣国の美濃で天下にむかって咆哮し、にわかに物狂いが憑いたように荒れくるいはじめたのである。

新興の出来星大名のくせに外交がうまく、天下最強国である甲州の武田氏（信玄）とは婚姻政策で手をにぎって東方からの脅威をおさえ、西方に力をのばし、永禄十一年二月には伊勢に進攻し、九月には近江に乱入し、諸城をつぎつぎと落して京へせまり、その年のうちに畿内を平定して、ついに京に旗をたてるという神速果敢ぶりであった。

いや、それだけに、織田家は天下を敵にまわさざるをえなくなり、織田軍は四方に派遣され、合戦、合戦、合戦の連続で、シナ花火に火をつけたような状態になった。

伊右衛門も、せっかくの新婚を楽しむどころのさわぎではなく、

（こう戦さにばかり出ていては、嫁どのの顔もわすれるわい）

と、各地の戦場を駈けずりまわりながら、ちらちらとそんなことをおもうのである。

このところ、伊右衛門は、信長の馬廻役（近衛士官）からはずされ、

「与力」

として実戦部隊に入っていた。与力、というのは、江戸時代の町奉行所の「与力」とは意味がちがい、「信長の直臣ながらも諸部将の部下として出向している者」というほどの意味である。

そのほうが、戦さの場数をかせぐことができるし、功名の機会も多いのである。

はじめ、丹羽長秀の指揮下に入って働いていたが、その後、織田家の膨脹とともに、あたらしい部将が何人か任命され、それにともない、新編成の部隊がいくつかできた。

そのなかで家中のもっとも話題になったのは、

「木下藤吉郎秀吉」

という貧相な男である。べつに戦場の槍働きがうまい男ではないが、なにをやらせても智恵のよくまわる男で、しかもむきになって仕事をする。

しかもユーモアもあり、人のつかい方もうまく、なによりも戦場の駈けひきが天才的なほどの巧者であった。

信長の草履とりからのしあがったことは、家中のたれでも知っている。

家中でも門閥をほこる男が、

(なにを猿めが)

と、ひどく軽侮しており、信長の近衛部隊の侍たちも、このあたらしい部将の下で働くのをみないやがった。

そういうなかで、千代がある日、

「一豊様、木下様とおっしゃる方はおもしろいおひとでございますね」

と、なにげなくいった。

千代は、その前日、路上で秀吉に出あったのである。



千代がその日、ひとりで岐阜城下の町を歩いていると、むこうから立派な騎乗の武士がきた。

前後に数人の供をつれている。

それが、こんど、一手の将に抜擢されたばかりの木下藤吉郎秀吉であった。

(あれが、評判の木下殿じゃな)

ということは、その武士の奇相で千代にもわかった。

千代が、道を軒下によけ、辞儀をして通りすぎようとすると、

「やあ、山内伊右衛門どの御内儀でござるか」

と、藤吉郎はいきなり馬からおりたものである。

馬からおりただけでも千代はおどろいたが、藤吉郎ほどの者がわずか五十石取りの、

「山内伊右衛門」

という名を知っているだけでもおどろきであったし、しかも、かれは伊右衛門の内儀の自分をさえ見覚えてくれている。

織田家の家中は、数万。

これは驚き、というよりも、それを通りこして、身のふるえるような感激であった。

じつのところ、千代も、多くの織田家の家中の者と同様、

(成りあがり者め)

と、藤吉郎のうわさをきいてはそう思っていた。

その感情が、一変してしまった。

「伊右衛門どのの近江でのお働き、遠目で拝見しておりましたが、みごとなものでござった。よしなにお伝えくだされ」

それだけをいうと藤吉郎は馬上の人になり、戛々と蹄を鳴らして過ぎ去った。

「ほほう」

伊右衛門は、眼をかがやかせた。

男の世界は、虚栄の市である。

知られたい、という望みは、胸中に、絶えることなく燃えている。

「わしは木下殿とつねに別手に属しているのであるが、そのわが姿を、そこまであのかたはご覧じあったか」

いや、戦場だけではあるまい。

千代の顔をちゃんと覚えているというほどだから、つねひごろ、伊右衛門という人物を藤吉郎は遠目ながら注意していたのであろう。

「おどろいたな」

「ほんとに」

千代は、微笑んでいる。

もうそれ以上は、千代はだまってほほえんでいるつもりであった。夫はかならず、藤吉郎の隊の「与力」を志願するであろう。



千代は、この路上の事件で、木下藤吉郎秀吉こそ、

「織田第一の出頭人」

になる人物だと見ぬいた。二流の人物も一流の人物を見込んで仕えれば、それだけ才幹もみがかれ、励みも鍛えもちがうし、幸運が落ちている機会が多いというものである。

「ぜひ、木下藤吉郎様に」

とは千代はいわなかった。いえば口さがない女ととられるし、第一、夫の「自発的」という名誉を奪うことになろう。

ある日、伊右衛門は下城してきて、

「千代、よろこべ」

とすわった。

にこにこしている。

その表情で、利口な千代は、なにもかもわかった。

わるくいえば、千代の思う壺に伊右衛門ははまった。千代の暗示のとおり、かれは木下藤吉郎秀吉の「与力」にくわわることを組頭にのぞみ、それがゆるされたのである。

「よろしうございましたねえ」

「よかった」

「でも、木下藤吉郎様は、多少かるがるしいところもあり、わたくしの大事な旦那さまを託せる

おかたでございましょうかしら」

と、千代は、心とは逆のことをいった。

伊右衛門は、子供のようにむきになり、

「だから、女はだめだというのだ。名もなき平士の妻に路上で出あいわざわざ下馬して立ちばなしするなど、常人の出来ることではない。そなたからその話をきいたとき、家中人あれども、わが身上（しんじょう）を頼むはこのひとをおいてないとわしはおもうた」

と、得意然といった。

「それはよろしうございましたこと。一豊様の御眼識ならば、おたしかなことでございます」

と、子供をあやすようにいった。

千代は、さとい。

千代が母親の法秀尼から教えられた智恵は、「男というものはいくつになっても子供で、生涯、子供をそだてるようなつもりで夫を育ててゆけばよい」ということであった。

その翌日、千代は、郎党の祖父江、五藤のふたりを縁側までよび、

「あるじが、こんど木下藤吉郎殿の手につかれたこと、二人はどう思います」

ときいた。

「さあ」

二人は、どう答えてよいかわからない。

常識的にいえば、藤吉郎のような先ものよりも筆頭家老の柴田勝家か、それに次ぐ丹羽長秀の



手について働くというのが穏当である。寄らば大樹の蔭というではないか。

「やつがれどもには、わかりませぬ」

「では」

と、千代はいった。

「せっかく、あるじが木下様の手、ときめられたのですから、あなたたちからも、木下様こそ頼むべき大将じゃとかねがね思うておりました、よろしうございましたな、と申してあげなさい。夫の御奉公の気持がいちだんと勇みたつことでしょう」

「かしこまりました」

その日、戻ってから伊右衛門は、

「千代」

といった。

「衆目の見るところは一つじゃ。祖父江、五藤でさえ、かくかくでわしの選んだ目をほめておった」

「よろしうございましたこと」

ほどなく陣触（じんぶ）れがあり、伊右衛門は千代を残して岐阜城下を発（た）った。

# 戦場

織田軍団が、北国平定のため、なだれをうって若狭に攻めこんだのは、元亀元年四月二十五日である。
火の出るようなはげしさで、若狭の諸城を攻め、二十五日には、手筒山城（敦賀）落城。
翌二十六日には、おなじく敦賀の金ケ崎城落城。
敦賀の金ケ崎城は越前の雄朝倉氏の越前西部および若狭における根拠地である。伊右衛門は、祖父江、五藤のふたりの郎党とともに、この攻略戦に参加していた。
「旦那様、このたびの戦さこそ、ご開運の手はじめのようにおもえまする」
と五藤吉兵衛はいった。
「そうおもうか」
伊右衛門は、やせ馬、ぼろ具足、ただ容貌だけがかがやくように若い。
「手柄をたてたいものだ」



ため息をつくようにいった。
妻をむかえて、いつまでも五十石の身上では、どうにもならないのである。
祖父江、五藤のふたりは、カブトはかぶらず、胴丸をつけ、柄の塗りのはげた二間半やりをかついでいる。
どちらも戦さ働きには齢をとりすぎていたが、山内家譜代の者だけに主人を世に出すというひたむきな目標があり、戦場に出れば見ちがえるほどいきいきとした。
しかし、味方の織田軍は三万余、せまい敦賀平野が、味方の人馬でみちみちるほどの多数だから、容易に功名の機会がない。
二十五日の手筒山城攻めには、三人は城の石垣にとりついてのぼったが、途中、城壁の上から、敵が岩石、材木を雨のようにおとしてきたため、のぼりもくだりもできず、そのうちの一石が、伊右衛門の右腕にあたった。
「わあっ」
とさけんだのは、祖父江新右衛門である。
主人が落ちてゆくのだ。
「おい、吉兵衛っ」
と、頭上の吉兵衛にむかってさけんだ。
「旦那さまは、落ちられたぞ」
「ええっ」

なるほど、横にいない。

「主人が落ちては、われらも生きる甲斐がない」

といったのは、単なる忠義ではない。かれらは伊右衛門の家来で織田家の家来ではないから、戦場にいる資格をうしなうことになるし、渡世(とせい)の道もたえるのである。

「われらも落ちよう」

と吉兵衛は手をはなした。

これには祖父江新右衛門もおどろいた。

が、落ちるのも一理なのだ。そろそろと石垣づたいにおりて行っては、主人の身が手おくれになるかもしれない。

祖父江も手をはなした。

頭をかかえて、二人はまりのように落ちて行った。

どすっ

落ちたが、さいわい地面は、泥と草におおわれた空濠(からぼり)の底で、身に怪我はない。

先着の伊右衛門も、起きあがっている。

まあそんなことで、手筒山城攻めでは味方の武者ばらに先(せん)を越されたから、翌日の金ケ崎城攻めでは、

「この一戦こそ、運さだめ」



と、主従三人は手につばきをして、寄せにくわわった。

金ケ崎城というのは、いまでいうと敦賀市内にあり、その東郊。

湾にのぞんでいる。

ナマコ形の丘陵が、半分は海につき出てミサキとなり、その根っ子が野に盛りあがって屈強の平山城(ひらやまじろ)になっている。

その根っ子が大手門で、織田方は鉄砲をさんざんに撃ちかけて寄せにとりかかった。

朝倉方の城兵は、三千。

城将は、越前朝倉氏の支族朝倉景恒(かげつね)というお坊っちゃんそだちの大将である。

すぐ、降伏開城を決意した。

むりもなかった。なにしろ、金ケ崎城と連城をなしている手筒山城が落ちたために防禦力が半減しているうえに、城兵の数もすくない。

さらに本国の越前からの援兵が、今日くるあす来るといいながら、いっこうに来るけはいがないのだ。

「開城」

はやむをえぬ処置だろう。

織田方に使者をやり、

「城は、あける。しかし条件として主将以下城兵が越前へ去ることをゆるしてくれ」

と口上させた。

「よかろう」

と総大将の信長が即座に承知し、柴田勝家をして城をうけとらせしめた。それが、二十六日の夜である。

が、城兵の撤退は、一夜あけた二十七日から開始することになった。

その夜、伊右衛門らは、城外で野営した。

「旦那様」

と、祖父江新右衛門はいった。

「城の授受というものは、古来、おだやかにすんだためしはございませぬ。あすは戦さになりましょう」

「ふむ？」

和睦しているではないか。

「いやいや、ここは戦場でござります。城兵が立ちのくといっても、敵味方とも気が立っているさなかゆえ、もし双方、一発でも銃声をひびかせる者があれば、それがきっかけで大戦さになりましょう」

「そんなものか」

「されば、万が一のときに、遅れをとらぬよう、われらは城兵の退き口にもっとも近いあたりまで接近しておきましょう」

「よく気づいた」



主従三人は、木下藤吉郎隊の夜営からぬけ出し、あす早暁、城兵が当然通る山道のそばまで行ってその樹木のなかで夜をあかすことにした。

いよいよ、早暁。

城中から鉦の音がわくようにひびきわたると、朝倉勢三千は城を出、朝もやのなかを粛々と越前にむかって行軍しはじめた。

もやが晴れはじめたが、何ごともおこらない。

「新右衛門、何事もなく敵はひきあげてゆくぞ」

と伊右衛門は、樹の間から坂道をのぞみながら、いった。

「左様でございますな」

とこの郎党もじりじりしている。なんの功名もなくこの戦さもおわるのかとおもえば、武運のなさがうらめしい。

退却軍は、道路がほそいため、三千人の一列縦隊で、先頭がはるか越坂の峠にさしかかっているというのに、後尾はまだ城を出ていない。

その退却軍のシンガリの大将というのは、朝倉でもきっての豪傑といわれた三須崎勘右衛門という男である。

頭形のカブトに金の薄尾の前立をなびかせ、黒具足、黒駒に乗り、兵を叱咤しつつ、しりぞいてゆく。

「あれが、三須崎勘右衛門か」
と、山内伊右衛門は、眼をみはるようなおもいで、ながめた。
大男のうえに、右腕が、遠くからみても二寸は長い。
弓を背負っている。
この飛道具は、鉄砲の出現とともに騎馬武者の表道具にはならなくなったが、勘右衛門は北国きっての精兵（弓のじょうず）といわれた男だから、ことさらに背負っているのであろう。
「あれが討てれば」
伊右衛門は、おもわず武者ぶるいした。
（三須崎勘右衛門ほどの大将を討ちとれば、わが名も家中にあがるのだが）
が、相手は停戦下に退却中の男だ。いどみかかるわけにはいかない。
ところが、祖父江新右衛門が予言したとおり、意外な事態が突発したのである。
織田方の足軽組のなかから、
「だあん」
と一発、銃声が噴きあがったのだ。
当然おこるべき現象だったのかもしれない。見まもる織田方の士卒の心理としては、敵方のあまりしずしずとした撤退ぶりが、小づらにくくなり、
「からかってやれ」
というところだったのであろう。



ところが、撤退軍は、鉄砲に火縄をつけて万が一にそなえ、緊張しきっている真っ最中なのだ。
たれが撃つともなく、
だあん
だあん
と応じかえした。
織田方からも撃つ。
退却軍も、中軍まで足をとめて撃つ。
果然、戦さになった。
「旦那様、いまじゃ」
と、祖父江が駈けだした。
「おおっ」
伊右衛門は、槍をとりなおして坂道を駈けはじめた。
（まっしぐらに三須崎勘右衛門を討つぞ）
むろん死を決している。緊張で、眼のさきが真っ暗になった。伊右衛門は、南無、南無、南無、南無、と千切れ念仏をとなえながら、坂を駈けのぼってゆく。
太陽が舞いあがって、坂を這いのぼる織田方の軍兵は、汗みどろになった。
坂の名は、

「首坂」
という。
停戦協定下で、思わぬ戦闘になったが、三須崎勘右衛門はさすがに、数ある朝倉方の物頭(ものがしら)のなかから退却援護の大将にえらばれただけあって、この突発事態におどろきもせず、
「者ども、かかれ、かかれ」
と坂の上に鉄砲足軽をならべ、どっとうちかかる一方、槍組を指揮して駈けおりてきた。
すさまじい戦闘になった。
さし昇ってゆく陽に、三須崎勘右衛門の金の薄尾の前立が
きらっ
きらっ
とかがやき、きらめくたびに、織田方の武者、雑兵(ぞうひょう)がその槍の餌食(えじき)になった。みごとな大将ぶりである。
(あの三須崎を討ちたや)
山内伊右衛門は、坂下から槍の穂をきらめかせて近づこうとするが、敵の雑兵にさまたげられて、どうにもならない。
そのひとりを突き伏せてから、
「新右衛門、吉兵衛っ」
と、二人の郎党にどなった。



「なにをしている」
どころではない。
ふたりの郎党も、それぞれ敵の雑兵と組みうちをしたり、槍でわたりあったりして、生き死にのいそがしさだ。
が、伊右衛門は、さらにどなった。
「わしのそばへきて、この雑兵どもを追っぱらえ」
横から槍の柄でなぐってきたやつを、伊右衛門は身をしずめてすねをかっぱらった。
さらに、坂の上から突っかかってきたやつを、草ズリの下へ突き入れて串ざしにし、
「新右衛門、吉兵衛」
とまたどなった。
「この戦さが正念場(しょうねんば)ぞ。なにをしている」
声がかれている。
伊右衛門は、なおも進んだ。
そのうち、一度は鉄砲で崩れた味方が勢いをもりかえしてきて、どっと突きかかってきた。
(これァ、おくれをとるぞ)
千代の顔をふとおもった。あのさとい眼をもった女房に、軽蔑されたくない。
伊右衛門は、死体をとびこえとびこえ突進し、ときにはつまずいてころんだ。
すぐはねおきた。

（おお、一番駈けだ）

敵は、ずーっとひきさがってしまって、もう左右にはたれもいない。

むっと草いきれが鼻についた。

右手は山肌。

左手は、谷である。

伊右衛門は、ふとカブトの目（ま）びさしをあげて坂の上をみたとき、血が凍るほどにおどろいた。

坂の上に、敵将三須崎勘右衛門が、馬をそばの松につなぎ、自身は赤土の地面に折り敷いて、弓を満月のようにひきしぼっている。

ねらいは、伊右衛門ではないか。

まったく、すごい形相（ぎょうそう）だ。

坂の上に鬼がいっぴき、うずくまっているような思いが、伊右衛門にはした。

なにしろ三須崎勘右衛門は、「越前王」朝倉家きっての猛将である。

しかも、弓の名手。

矢には、ノミほどの大きさのヤジリがついており、尖端がふたまたにわかれ、ちょうど刃が三日月のようになっている。

「猿の首おとし」

といわれる大ヤジリである。猿の首どころか、すねにでもあたれば、びしりと吹っ切ってしま



うであろう。

「きゃあっ」

と、伊右衛門は、恐怖というか、えたいの知れぬ感情がつきあげてきて、眼の前がまっくらになった。

真っくらなまま、槍をとりなおし、カブトを伏せ、地獄へつきすすむつもりで駈けだした。

いや、合戦というものはおそろしい。

古来、勇将豪傑の代表的人物のようにいわれる加藤清正でさえ、その初陣の賤（しず）ヶ岳（たけ）の合戦のときには、眼のさきが真っ暗になり、なにがなにやらわからず、ただひたすらに、

南無阿弥陀仏

なむあみだぶつ

と念仏をとなえてつきすすんだ、ということを後年、家臣に述懐している。

まして伊右衛門。

清正のように大兵（だいひょう）の士でもなく、力もまずは普通である。槍がとくに上手というわけでもなく、まったく普通の人物だ。

それが、坂の上の鬼にむかいはじめたのである。

（千代、まもってくれ）

胸中、それのみを念じつつ。

事実、ふしぎなことがある。
その時刻、岐阜城下の留守宅で千代が仏壇を清めていると、念持仏の楊柳観音が、ふわりと倒れかかってきて、あやうく千代はてのひらで受けとめた。下段の鉦にあたればあるいは首が落ちたかもしれない。

当の坂の上の勘右衛門、夢中でのぼってくる織田方のぼろ武者を、
笑止なり
とおもったのだろう。
「葉武者は相手にせぬぞ。命大事と思わばわきへひかえおれ」
どなった。が、伊右衛門の耳にはきこえない。
「おろかなやつ」
と、勘右衛門は弓をしぼりなおして、
ぶおっ
と射放った。
わずか、五、六間の間隔である。
射放ったときには、もう伊右衛門がえたいの知れぬ悲鳴をあげてころがっていた。
ヤジリが、カブトのマビサシにがちっとあたり、片刃が折れ、のこる片刃がざくりと伊右衛門の左眼の下の肉を裂き、さらに口中に食いこんで右の奥歯に植えついて、とまった。



顔に、矢がはえたようになった。

人間、必死の境地とはおそろしい。
伊右衛門、顔に矢をつきたてながら、それとも気づかずに走った。
ただ、口がふさがらない。口中に矢が、ナナメに突きささっているからである。
(………?)
と思いながら、泣き叫ぶような声をあげて三須崎勘右衛門に接近した。
勘右衛門、
(なんの葉武者)
とあなどって二ノ矢をつがえようとしたとき、すでに伊右衛門の槍がせまっていた。
勘右衛門、弓をすてた。
捨てた手で槍をとりなおそうとしたが、時すでに伊右衛門の槍の穂さきが、胸もとにまでおよんでいる。
「コシャクなり」
と体をひらいて伊右衛門の槍をつかみ、ぐっとひきよせた。
「わっ」
と、伊右衛門は槍ごとひきよせられ、勘右衛門の大きな両腕のなかにころがりこんだ。
「死ににきたか」

　勘右衛門は大口をあけて笑ったが、その笑いが、すぐやんだ。夢中で抱きついてきた伊右衛門が、異様な馬鹿力だと知ったのである。
（こいつ。——）
　あろうことか、勘右衛門はガケぎわへ押し倒された。伊右衛門、火事場の馬鹿力というものであろう。
　が、戦法は心得ている。
　三須崎勘右衛門のような男と、平で組み打てば負けるにきまっている。
（運を天にまかせて崖から落ちることだ）
　絡まって落ちれば、途中、どういう物理的偶然で伊右衛門のかちになるか、こいつはわからない。
「むっ」
と力を入れた。
　幸い、ずるりと勘右衛門の体がガケぎわに押し出され、
「むっ」
とさらに力を入れると、天が一回転して二人は組みあったまま谷にむかってころがりはじめた。
　伊右衛門、必死に三須崎勘右衛門の胴っ腹にしがみついている。
「こ、こいつ」
と勘右衛門ははなそうとするが、すっぽんが嚙みついたように放れない。



　そのうち、勘右衛門のカブトがぬげた。ぬげた拍子に、
　ぐわん
と、岩石に頭をうちつけたらしい。
（………？）
　急に相手の力がぬけたことに伊右衛門はふしぎだったが、すかさず鎧通しをぬいて、勘右衛門の具足の草ズリの下へさし入れ、力まかせに突いた。
「ぐわっ」
と勘右衛門、このとき失神からよみがえったらしい。
　鬼神のような力で伊右衛門のくびをしめあげはじめた。
　伊右衛門、締められて何度か気をうしないそうになりながらも、右手の鎧通しを動かして、何度か刺した。
　そのとき、三須崎勘右衛門の実弟で市兵衛というのが駈けてきて、
「こいつ」
と、兄にしがみついている伊右衛門を大太刀で叩いた。
　一撃は、カブトのシコロにあたって無事だったが、二撃目が、首筋を斬った。
　血まみれになりながら伊右衛門、
（はなすまいぞ）

と、三須崎勘右衛門にしがみついて鎧通しをつかった。功名への執着、伊右衛門の場合は生死を越えるほどの力をもっているらしい。相手が動かなくなったところで、やっとむこう側へころび逃げた。

市兵衛の太刀はなおも追ってくる。

六撃まで受けてから立ちあがり、大剣をぬいて渡りあった。

伊右衛門は、余力をここでつかいはたすつもりで、滅多やたらと剣をふりまわした。

そこへガケ上からすべり落ちてきたのはおなじ味方の大塩金右衛門正貞という武者で、

「この敵、拙者に賜え」

と、ひと槍で市兵衛を突き刺した。

市兵衛がころぶよりも、伊右衛門が力尽きてあおむけざまに倒れるほうが早かった。

「あっ、旦那様」

と、ガケの上で、郎党の祖父江新右衛門、五藤吉兵衛が、やっとみつけた。

二人は砂塵をまいて落ちてきて伊右衛門のそばに駈けよると、伊右衛門、仕止めた敵を指さし、

「首、首」

と、わめいた。首を打てというのである。

「かしこまって候」

と五藤吉兵衛が、大いそぎで首をあげた。

しかし、ぶっ倒れている主人の伊右衛門がはたして命がもつかと危ぶまれた。



矢の柄は、格闘のときにちぎれ、三寸ほどが残っているだけだ。

郎党、おろおろしていると、伊右衛門は、

「抜け」

とどなった。

「抜いてよろしうござるか」

「抜かねば死ぬわい」

このあたり、伊右衛門はただの白面の才子ではなさそうである。

「抜きまするぞ」

と、五藤吉兵衛が矢の柄に手をかけたが、口中の骨につきささっているらしく、容易にぬけない。

「どうした」

伊右衛門も、激痛で失神しそうである。

「ぬ、ぬけませぬ」

「おれの顔を足で踏まえてぬけ」

「かしこまった」

五藤吉兵衛は伊右衛門の顔を武者ワラジでふみつけ、力まかせに抜いた。

ぱっと血が飛んだ。

血の中で伊右衛門は笑い、やがて気をうしなった。

信長の北国経営は年来あたためつづけてきた野望であったが、この元亀元年四月の越前敦賀攻撃は、戦術的に成功し、戦略的には大失敗を演じている。

信長は、北近江三十九万石浅井氏との姻戚関係を重く計算しすぎたのだ。

浅井の若殿長政に、信長の妹お市御料人がとつぎ、四人の子までなしている。

当然、浅井氏だけは裏切らぬとみた。

見たからこそ、浅井氏の領地を通って、越前敦賀に攻めこんだのである。

ところが浅井氏は、にわかに寝返り、信長の退路を断ったのである。

正面の敵は越前八十七万石の朝倉氏、背面から上方随一の強兵浅井の部隊におそいかかられては、信長はせまい敦賀平野でふくろのねずみになる。

「してやられたり」

とみた瞬間、信長は京にむかって一騎駈けで脱出し、旗本がこれにつづき、諸将があわてて退却しはじめた。

徳川家康のごときは、最前線に布陣していたため信長の退却を知らず、やっと知ったのは翌朝であった。

このため徳川部隊はほとんど孤軍の運命におち、追いすがる朝倉勢を撃ちのけはらいのけ、家康みずから何度か鉄砲をもって戦い、かろうじて戦線を離脱した。

信長の敦賀進攻が四月二十五日、退却は二十八日。



ただ、その前、信長は前線近くまで床几をすすめ、首実検をしている。

信長の横には、敵の朝倉家の人物群をよく知っている宮部肥前守が「奏者」としてひかえ、首をのぞきこんでは信長になにがしが討ちとったなにがしの首、と言上し、あわせてその評価をしていたが、三須崎勘右衛門の首が来るにおよんで、声をはなった。

「この者、越前朝倉第一の精兵にして、しかも朝倉の一門でござりまする」

床几に腰をおろした信長が、山内伊右衛門一豊を、しげしげとみた。

人間の顔ではない。

脹れあがって、ほおにえぐったような大穴があいている。あぶら薬はぬってあるのだが、御前を遠慮して布をとってきたのであろう。顔中に血がこびりついていた。

「山内伊右衛門一豊というか」

ややカン高いが、すずしい声である。

「へへっ」

「働き、けなげであった。陣屋へもどって養生せよ」

首実検のときに大将から言葉をかけられるというのはよほどのことである。

よろこんで、退出した。

が、信長の陣屋のそとへ出たとき、傷の痛みと疲労と空腹が一時にやってきて、歩けなくなった。

祖父江、五藤の二人の郎党が両わきをかかえ、かろうじて陣屋へもどった。

その翌夜が、信長の退却である。

ところが、退却戦には、殿軍（しんがり）というものが必要である。踏みとどまって敵の追撃をささえ、本隊を逃がしたあとで血路をひらいて逃げる犠牲部隊である。

この殿軍の指揮官に、木下藤吉郎秀吉が志願した。

伊右衛門は、その夜、陣屋で死んだようになって寝た。

傷から出る高熱と、口腔（こうこう）の重傷のためにものがのどを通らず、ただ心臓だけが動いているといった状態である。

二人の郎党は、不眠で看病した。

翌二十八日の夜、

「吉兵衛、わしは寝ワラをとってくる」

と、祖父江新右衛門は、主人のために乾いた寝ワラをさがしに行った帰路、木下藤吉郎の陣屋のそばで意外な情報をきいた。

駈けもどった。

「吉兵衛、大変じゃ」

と、あらましを物語った。

織田の全軍、にわかにこの敦賀の陣をひきはらい、略取した城をすて、京へ退却するというのである。

「しかも御大将（信長）は少数の御旗本とともにもう引きあげられたというわ」



「えっ」

五藤吉兵衛は、あきれた。

「勝って、逃げるのか」

「近江の浅井が、にわかに退路を断ち、われらの背後から襲いかかるという。ところで、わしがおどろいたのは、これではない」

「まだ驚くことがあるのか」

「あるとも」

その会話を、山内伊右衛門は、高熱のなかで、うっすらと聞いている。

「わが手の大将木下藤吉郎どののことじゃ。このひと、みずから死を買って出られた」

「死を？」

「殿軍の大将を志願されたという」

「ほう」

と、声をあげたのは、伊右衛門である。

木下藤吉郎といえば、小才がきくことで取りたてられた、と家中でも悪口をいう者が多いが、殿軍の指揮官を志願したとは、なんと大ばくちをやったものだ。

十中八九、生きてもどれぬではないか。

（なるほど、そういうところもある男か）

伊右衛門も、見なおす思いがした。

見なおしたのは、伊右衛門だけではない。

織田方の諸将はみな見なおした。

秀吉の武将としての名が、大きくあらわれてくるのは、この退却戦からである。

「木下殿、拙者の手の者を残します」

と、諸将は感動のあまり、自分の家来のなかから勇猛の士をえらんで、十騎、二十騎と選りぬいて木下隊につけた。こういう例もあまりない。よほど秀吉の「壮挙」が同僚の諸将を感動させたのであろう。

藤吉郎秀吉はすぐ金ケ崎城に入って、文字どおり、雲霞のような追撃勢を一手にささえようというのである。

（やはり、千代が見ぬいただけの人物であるらしい。この人を大将に頂くかぎり、まちがいあるまい）

「おい、おれも木下殿についてゆく」

これには、二人の郎党も驚いた。怪我人は荷駄とともに後送されることになっているのだ。

「戸板をはずして来い。金ケ崎に入城するんだ」

伊右衛門はもはや合戦は念頭にない。藤吉郎を錐のサキにして自分の運命をきりひらこうとしていた。

「槍をかせ、槍を」



伊右衛門は寝ワラをはねのけ、空を泳ぐようにして立ちあがった。

「槍を、槍を」

と、剝げ柄の槍を五藤吉兵衛の手からひったくると、それを漕ぐようにして土間を歩きだした。

「だ、だんなさまっ」

祖父江新右衛門がすがりついた。

「このお体で御出陣なされては、せっかく首坂でお拾いあそばしたお命を落しておしまいになりまするぞ」

「うぬら」

眼をすえた。幽鬼のようである。

「わからぬか。木下殿は命を捨ててかかっている。その隊におれは加わる。命をすてる覚悟で運を拾わねば、運などは拾えるものではない」

「御運は、さきざき、いつでも拾えるものでござるわ」

「そのときも拾う。いまは、山内伊右衛門一豊という者の男を見せるときじゃ。こういう好機は、一生に何度もない」

「しかし、お、お命が」

「無くなるかもしれぬ。無くなれば無くなったで、それは伊右衛門が生得、武運がなかったまでのこと。この体で城に入って、命がもつかどうか、これは伊右衛門の一生の賭けじゃと思え」

すさまじい功名心である。

二人の郎党は、さすがに沈黙した。
「されば、戸板で参られますように」
と、二人はそのあたりの雨戸を一枚はずしてきて、具足姿の伊右衛門をのせた。
持ちあげようとした。
重い。
「吉兵衛、よいか」
「よいとも」
ぐっ、と持ちあげた。
「それ行け」
と、主従三人は、一つかたまりになって街道を走りだした。もう新右衛門も吉兵衛もやけくそのようなものである。
「わっしょい、わっしょい」
かけ声をかけてゆく。
街道は、ぞくぞくと西へ退却してゆく諸隊の人馬でひしめいている。
その中を、戸板だけは逆に走ってゆくのである。みな、眼をみはった。
わっしょい。
わっしょい。
やがて、木下藤吉郎秀吉の守城ときまった金ケ崎城の大手門へ駈けこんだ。



大手門の内側で、藤吉郎は床几をすえさせ、他隊から個々に参加してくれる決死の連中にいちいち言葉をかけては礼をいっていたが、この戸板の伊右衛門には驚いた。
最初は、とめた。
が、伊右衛門は、きかない。
藤吉郎も、ついにうなずいた。この重傷者が参加することによって、城兵に必死の気魄がわくことを期待したのである。
「木下殿、拙者はこの城で死にます」
「よう申された。おのおの、山内伊右衛門殿を見よ」

山内一豊とその二人の主従は、敦賀金ケ崎城に入ったが、ここで、余談をかきたい。
この五藤吉兵衛、祖父江新右衛門という二人の郎党についてである。
話はとぶが、幕末の武鑑の山内家土佐一国二十四万二千石の項に、家老として「五藤主計（かずえ）」という名が載っている。
これが、吉兵衛の子孫である。
首坂で、五藤吉兵衛が山内伊右衛門一豊の顔にささった矢を抜いたとき、土足で一豊の顔を踏みつけて、やっとぬいた。
主人の顔を踏みつけた、というので、そのワラジを保存し、ながく五藤家の家宝にした。
抜いたヤジリも五藤家に伝わっている。

吉兵衛というのは、郎党ながら並はずれた武勇のもちぬしで、しかも機転がきく。

戦さとなれば、戦場をわが家のように駈けまわった。

例の首坂のときも、伊右衛門が三須崎勘右衛門を討ったあと、重傷と疲労で気をうしないかけた。

吉兵衛はそれを背負い、坂をくだってくると、某殿（名不詳）という織田方の上士の郎党善兵衛が、月毛の馬をひいてくる。

「おお、これは善兵衛、いたわしや、おぬしのご主人はたったいま討死なされたぞ」

とあざむき、その馬をうばって伊右衛門をのせて戦場を離脱した。

あてずっぽうながらも某殿は戦死していたからよかったものの、生きておれば、戦場で味方の馬を奪った、というので問題になったにちがいない。

祖父江新右衛門の家系も、幕末まで土佐藩の重臣として残っている。

「土佐軍記」という本に、新右衛門が、朋輩の五藤吉兵衛について語っている項がある。

「自分と吉兵衛とのむつまじさは、親族以上である。かれの人柄は、まず怒らない。それに淡泊で隠しだてをしない。非常な武辺で、たがいに一つ戦場にのぞんで励んできたが、自分はつねに吉兵衛に劣った」

劣った、などと言えるのは、祖父江新右衛門も長者の風格があったからであろう。

この物語のこの頃よりもやや後年、伊勢の亀山城攻撃に参加したとき、二人は陣中夜もすがら雑談をしている。



「そのとき、いままでの武功談になった。そこで初陣以来、たがいに首をとった数をかぞえはじめた」

と祖父江新右衛門は語る。

「五藤吉兵衛は二十六、自分は二十四、ふたつ負けている」

さらに、

「生捕りの数をかぞえると、吉兵衛はなんと十五人、自分は十一人、やはりかれのほうが多い」

「されば城乗りはいかに」

と数えてみた。するとこれは同数の六度。

組み打ちはどうか、と指折ると、吉兵衛が七度で祖父江新右衛門が九度。「これだけ はやっと吉兵衛より多い」と語っている。

どちらも酒が好きで、しかも飲むときはきまって二人で飲んだ。酒をのみ、やがて酔うと、きまり文句のように、

「主人伊右衛門様を世に出さねば」

というところに話が落ちた。伊右衛門は、得がたい郎党にめぐまれていたというべきであろう。

籠城（ろうじょう）の金ケ崎では、

「伊右衛門がいる」

というだけで、全軍の士気はふるった。

身動きもできぬ重傷の身で敵の包囲する城内に進んで入り、二人の郎党をして防戦にはたらかしめたのである。

当時、いわゆる戦国武士の慣習では、こういう「男」の見せかたというのは類がなかった。大将木下藤吉郎の吹聴もきいた。

自分の手飼いの家来というのをあまりもたぬ藤吉郎は、信長から付けられている与力衆や諸将の貸与してくれた武士たちを一手に統御することに、大いに腐心した。それには、信長の与力衆の一人である伊右衛門のこの「壮挙」は、城中の団結に大いにあずかって力があった。

「伊右衛門は、殿軍の軍神ぞ」

とまで藤吉郎はいった。

「みな、死ねや」

と一同をはげまし、城壁からさんざんに敵を射すくめ、時には城門から打って出、大はたらきにはたらいたのち、

（もう本隊は、のこらず戦場を離脱したであろう）

とおもうころを見はからって、全軍、かたまりになって城門から突出した。

決死の脱出がはじまるのである。

伊右衛門は、軍の中軍にあり、藤吉郎の手の足軽八人が板輿にのせて出た。

朝倉勢もそれに追尾して火の出るように攻めかかる。

それを撃ち退けては木下隊は西にむかって退却をつづけた。



むろん、鉋でけずられるようにして兵数は減ってゆく。

伊右衛門は輿の上。

かついでいる足軽の二人までが、退却第一日に敵弾にうばわれた。

吉兵衛と新右衛門が、かわってかついだ。

「旦那様、旦那様」

とかつぎながら、二人は何度も手をのばして、伊右衛門の手をにぎった。死んではいまいかと怖れたのである。

死にはしなかったが、輿の揺れで傷がはげしく痛み、伊右衛門は何度か気を失った。

そのつど、千代の顔が脳裏にあらわれて、

「これが世に出る関門です。耐えられぬということがありますか」

とはげました。

さんたんたる退却戦ののち、木下藤吉郎隊七百人が京にもどったのは、五月のはじめである。

妙覚寺の本陣で藤吉郎の帰着を迎えた信長は、このときほど、この草履取りあがりの部将の姿がけなげに見えたことはなかった。

「藤吉郎、このたびの働き、生涯忘れぬぞ」

と信長はいった。

同時に信長は、数ある将士のなかからたった一人、山内伊右衛門一豊の名を口にした。

「伊右衛門も無事だったか」

無事でした、と藤吉郎が答えると、信長は手ずから藤吉郎に薬を渡し、
「伊右衛門に養生させよ」
といった。信長の平素からみれば、異例といっていいほどの部下へのいたわりである。
伊右衛門、この合戦で一躍二百石に加増され、そのまま木下藤吉郎につけられた。
織田軍は、京でしばらく滞陣した。



# 空也堂

京の蛸薬師の通りに、空也堂という大きな建造物がある。当時流行の「鉢たたき」の道場である。鉄鉢をたたいて念仏してまわり、市民に念仏往生をすすめる陽気な宗教団体で、空也念仏ともいわれていた。
京のひとから、
「櫛笥の道場」
ともいわれている。
ここが、京都における織田三万の臨時兵舎の一つになっており、一豊はその境内に三間の小屋をたて、傷養生をしていた。
ある夜、二人の郎党を藤吉郎の陣屋へ使いに出したあと、ほたほたと戸をたたく者があった。
枕の上で耳をすますと、音がやむ。
（はて、気のせいだったか）

外は雨がふっている。

妙にむし暑い。

また、ホタホタと叩く音がきこえた。音はかぼそいばかりの小ささである。

「たれかね」

と伊右衛門は刀を杖に立ちあがった。背や手足の傷はほぼかたまっていたが、頬のほうの矢傷だけはまだ肉が十分盛りあがっていない。

「旅の者でございます」

なんと、若い女の声である。

伊右衛門は、戸をあけてやった。急に雨の音が、はげしくなった。

「こちらは櫛笥の道場でございますか」

「左様」

「ではあの、お上人様でいらっしゃいますか」

と女が思ったのもむりはなかった。空也念仏にあっては、有髪(うはつ)のままの僧が多いのである。

「いや、ちがうが」

伊右衛門は説明してやった。いま織田軍が境内を借りている。念仏道場の連中は、堀川三条のほうに引っ越している、といった。

「あ、それでは、あなた様は、織田様のお侍様でございまするな」

女は、怖ろしげに伊右衛門を見、あわてて笠のひもを解こうとした。



「いや、おそろしがることはない。顔に怪我はしているが、そうでなければ私は大店(おおだな)の手代などによく間違えられる」

「大店の手代に？」

「そう」

伊右衛門はおだやかに微笑した。

女は、安堵したらしい。

このとき伊右衛門は、女が髪も小袖も、雨に濡らせて立っていることに気づいた。

「まず、入られよ」

女は、土間に入った。

小柄で、丸すぎるほどの顔だちである。ぽかんとひらいた唇に、真白なねずみみっ歯が、ちまちまとならんでいる。

「おまえは、どこからきた」

「大和の石上(いそのかみ)から」

小鳥のようにふるえている。

「それはどうしたわけだ」

両親が死んだという。叔父がこの空也堂にいるときき、さがしにきたという。

京に入ってから夜になり、雨になった。夢中でたどりついたらしい。どうやら、夕食もとっていない様子である。

伊右衛門は、めしびつと茶碗を出し、女の前にならべてやった。
「名は？」
「小りんと申しまする」
と、女はひつの中の菜めしを食べおわってやっと人心地がついたのか、頬に赤味をさしのぼらせている。
伊右衛門は、
（こまったな）
とおもった。自分にこまった。長い陣屋ぐらしで、女がすべて美しくみえる。勇を鼓して、
「ここは男ばかりの武者小屋だ」
といった。
「腹がくちくなれば、出てゆくがよい」
（まあ。……）
この雨の中を。
女は眼を一ぱいに見ひらいて伊右衛門を見ていたが、すぐふりかえって窓のほうを見た。雨が吹きこんで、黒木格子がびっしょり濡れている。女はひどく悲しそうな表情をして、
「堀川三条に移った空也堂とは、ここから遠うございますか」
と、聞きとれぬほどの声できいた。



「さあ、わしも京には不案内だが、十丁ほどもあろうか」
「あの殿様」
と、小りんは懐ろから布ぶくろに入れた貝をとりだし、
「金創の薬でございます。よくきくと村では申します。これを差しあげますから、わたくしを今夜は泊めて頂けませぬか」
と泣くようにいった。
「……」
そこへ、五藤吉兵衛、祖父江新右衛門がもどってきた。
小りんをみて驚き、伊右衛門から事情をきいた。聞けば、どちらも田舎者のことだから過度なほどに同情をしてしまった。
「泊めてやりなされ。いまから空也堂に行っても、門はしまっておりましょう」
（いや、千代にわるい）
と、伊右衛門は無言である。泊めればどうなるかわからない自分を、伊右衛門は感じている。
ところが二人の郎党はそうときめてしまって、女の世話を焼きだした。
吉兵衛は、女に顔や手足を洗わせるために、湯をわかした。
新右衛門は、男もののかたびらをとりだしてきて、
「その小袖はぬれている。着更えなさい」
と、いった。

女は、世話を焼かれるままに、身づくろいをした。さすがに小袖をぬぐときだけは、
「あの、屏風（びょうぶ）はございませんでしょうか」
と、かぼそくいった。
「あっははは、こいつは難題だな。見てのとおりの寝小屋だ。そんな気のきいたものはないよ」
祖父江新右衛門はポンポンと尾張弁でいって、
「殿もこちらをむきなされ。吉兵衛も土間のほうをむいて、ぴくりとも首を動かしちゃならねえ。どうだ、小りんさん、これでいいだろう」
と三人、そろって小りんのほうに尻をむけてすわった。
板ぶきの屋根を打つ雨の音がはげしくなっている。

戦場から帰ってくると、人によってはひどく人間好きになるものだ。
二人の郎党がそうである。小りんに対して、自分の妹でもやってきたように、
「では寝床をつくってさしあげよう」
と、きりきり舞ではたらきだした。吉兵衛などは、鼻さきに唄を湧（わ）かせている。
「もうしわけございませぬ」
小りんと名乗る女は、消えるようにいった。
「なんの、造作（ぞうさ）はないわさ」
「あの、わたくしが床をとります」



「そなたは客じゃ。そこに居やれ」
祖父江新右衛門は雨の中を出て行って、やがてどこかから三曲の屏風を一つ都合してきた。
寝床ができた。
伊右衛門は、
「なんだ、これは」
と新右衛門らにいった。小りんの寝床は、仲よく伊右衛門の横に布いてあるのだ。
「そっちへ移せ」
「じょ、冗談ではありませぬ。われわれの間に敷きならべれば、吉兵衛、新右衛門、どちらも凡夫でございますから、どうなることかわかりませぬ。小りんどのは、殿の横に寝てもらうことにしました」
「おれも凡夫だ」
「いやいや、存じておりまするよ」
吉兵衛は、忍び笑った。
新婚の新枕（にいまくら）のときでさえ、伊右衛門は不器用にも情を遂げなかったということだ。
その物堅さは、すでに織田家の家中でも伝説化している。
「よせよせ、山内伊右衛門とて凡夫だ」
「殿は、出来のちがったお方でござります」
と、二人はすっかりそうきめこんで、疑わない。

「なあ、小りんどの」
と吉兵衛はいった。
「われらが殿は、奥方をお迎えなさる前も、おなごには一指もお触れあそばさず、わらべのときのままのお体で奥方にお触れなされたおひとじゃ。安心しておそばでやすませて頂くがいい」
「ばかな」
伊右衛門はにがりきっている。郎党にまでからかわれる堅物とは、われながらなさけないことだ。
「あの、安心しておりまする」
と、小りんが、うつむいて手の甲で唇をおさえながら、いった。娘らしく、おかしみをかみころしているのであろう。
その夜、伊右衛門は寝た。
足もとに屏風があって、二人の郎党の寝姿はみえない。ただ、いびきがきこえた。吉兵衛は高く、新右衛門は低い。どちらも健康そのもののいびきである。
(こまったなあ)
頭に血がのぼり、眼がさえてねむれないのだ。じつのところ、伊右衛門は、自分はよほど好色なのではないか、とかねて思っている。
(吉兵衛や新右衛門のほうが、はるかに自制のきく健康な男だ。わしの性欲は、陰にこもったものかもしれない。とすれば武士として恥ずべきことだ)



小りんの寝床が、かすかに動いた。伊右衛門は、息をころした。われながら情けないとおもった。
せまい壁と壁のあいだである。小りんが寝返りをうつだけで、寝息までかかりそうなそばに、彼女は寝ている。
部屋は、真っ暗である。
あいかわらず雨脚はしぶとくて、板屋根をたたく音がやかましい。
ばたん
と、小りんのかいなが、伊右衛門の枕もとに落ちてきた。
はっ、と伊右衛門は首をもたげた。
(寝相のわるい娘だ)
ところが、小りんの脇からなまあたたかい娘の体臭がつたわってきて、伊右衛門の嗅覚を刺すのである。
いよいよ、頭が冴えた。
(なんとわしは好色。——)
と自分を叱るのだが、この小りんの息吹きからのがれるすべがない。
(かいなが、枕もとにあるから悪いのだ)
伊右衛門は、そっと小りんの左腕の手くびをつまみ、それを掻巻の下に差し入れてやろうとし

た。

いや、たしかに掻巻の下へおさめる作業はおわった。

ところが、伊右衛門の手が、小りんの豊かな胸に触れたのである。

びくっ

と、小りんの体が動いた。

寝息がとまった。

（あっ）

と伊右衛門は狼狽した。

が、すぐ、小りんは眠り入ったらしく、すこやかそうな息をたてはじめた。

（ねむったか）

ほっとしたが、ところがどうしたことであろう、小りんの胸の上においてある伊右衛門の右掌（みぎて）が、伊右衛門の意思とはべつに離れようとしないのである。

（こまったのう）

まったく、迷惑なことであった。

伊右衛門の右掌が、そのまま小りんの体のふくらみに沿ってすべり、腹部へ至ろうとするのを、別の伊右衛門は、ぼう然とながめているかたちである。

（おれはこんな男だったのか）

あらためて、自分のなかに、制御しがたい「男」が誕生しはじめていることに気づかされた。



（千代にわるい）

と思いながらも、右掌はある目的にむかって進んでいる。

が、その右掌の進行をとめたのは、小りんの変化であった。

目ざめたわけではない。

寝息をたてたまま、伊右衛門のほうへ寝返りをうったのである。

あつい、生命の熱気のようなものが、闇の中で伊右衛門をつつんだ。

はっと気づいたときは、堅物で通った山内伊右衛門は小りんの体を横ざまに抱いていた。

ところが、小りんはなおも目をさまさず、寝息をたてたままである。

（本当にねむっているのか？）

思いきって、その細い腰を力まかせに掻いよせてみた。

小りんはなおねむっている。

（千代。――）

と心中つぶやいたのは、岐阜に残してきた千代の肉体への思慕である。

が、伊右衛門と肌をあわせているからだは千代とはまるでちがったものだった。小柄、骨ぼそ。

その小りんは、なおねむっている。

（どうしよう）

伊右衛門は、あとから思えばまったく錯覚していた。頭が熱い。その熱っぽい血のなかで、千

代を想い、千代に詫び、しかも自問をかさねつつ、手のほうはとっくに小りんのもものあいだに触れていた。

その部分が、異様にあつい。

(――それでも)

小りんは、可愛い寝息をたてているのである。伊右衛門は、この一見可憐な娘の正体がわからない。本当にねむっているのか、どうか。

伊右衛門自身、はっとわれにかえったときは、自分の眼の下に小りんの唇がある。

(こまったことだ)

後悔してもはじまらない。すでに行為がはじまってしまっている。

真っ暗ななかで、伊右衛門は、尽せるだけの愛撫を、小りんにくわえた。

小りんはそれを受けた。

そのくせ、小りんは、相変らず寝息をたて安らかにねむっているのである。

愛撫が、済んだ。

(済んだ。……)

と思ったとき、伊右衛門の背に、あたらしい汗が噴きだした。汗がつめたい。

小りんの体からひそかに離れながら、伊右衛門ははげしく後悔した。

(おれは好色漢だ)

好色漢を自称している郎党の吉兵衛と新右衛門は、屏風のむこうで、陽気ないびきをたてながら、睡眠をつづけている。



(あいつらは、健康だな)

自分は、そうではない。若い伊右衛門は、自分のなかに容易ならぬ性格がひそんでいることに気づいた。陰湿な好色、人目のとどかぬところでは何をやるかわからぬ小悪魔。偽善者。

(千代との誓いをうらぎった)

こんなにも容易に。

(こまったなあ)

と、頭をかかえたくなった。

――ところが、その翌朝。

伊右衛門は、陽ざしがまぶたに当たってからやっと目をさました。

台所では、笑い声がきこえる。吉兵衛、新右衛門、そのふたりにすっかり親しんでしまった小りんの笑い声である。

じつに明るい声だ。笑い声を立てなければ会話が運ばないたちの娘らしい。

伊右衛門は、土間におりた。

「おはようございます。めずらしくごゆっくりでございましたな」

と二人の郎党が、かげのない声で、朝のあいさつをした。

そのかげで、娘も頭をさげた。

「やあ」

伊右衛門は、逃げるように井戸端へ行き、跳ねつるべの麻緒をつかんだ。
娘が、チラリと上眼で伊右衛門をみた意味ありげな表情が、瞼から消えない。
朝餉の支度ができた。
伊右衛門は小身とはいえ、二人の郎党にとって殿様である。
いつも上座で、ひとり膳にむかう。
ところが今朝は、吉兵衛にでもいわれたのであろう、小りんが指を突き、
「お給仕をさせていただきます」
とふかぶかと頭をさげた。
「そうか」
伊右衛門は、うわのそらで、椀をとりあげた。
ずるっ
と、椀の中のとろろ汁をのみこんだ。珍味なのだが、味がよくわからない。
小りんは、礼儀として、目を伏せている。
伊右衛門も、目をそらしている。
(この女は、昨夜のことを知っているのだろうか)
知らぬはずはない、とも思えるし、案外、正直にねむりこけていたのかもしれない、ともおもうのである。



「つけてもらおう」
と、伊右衛門は、からになった食器をさしだした。はい、――と小りんはにじり寄って、お盆の上にそれをのせた。
そのとき、チラリと伊右衛門を見た。
視線が合った。
くすっ
と微笑するような眼の色を、小りんはしてみせた。意味はない。
が、においはある。つながりの出来た男女だけにわかる会話である。
(ああ、この女は知っている)
伊右衛門は、ふたたび箸をとった。箸がひどく重かった。
思いきって、訊いてみた。
「ゆうべは、よくねむれたか」
「……………」
と、女はおどろいて視線をあげた。まじまじと伊右衛門を見た。眼の下が、羞恥心で染まっている。
その羞じらいが、なによりも雄弁に、伊右衛門の知りたいことを返答していた。
「は、はい。……よくねむれました」
と、娘はうそをついた。

若いむすめのちょっとしたうそというのは、可愛いものだ。

が、この娘のばあい、

（食えぬ。……）

とおもった。

伊右衛門は、だんだんこの娘に興味をもちはじめ、つい、さぐりを入れた。

「なにか、夢でも見なかったか」

と問い、かたずをのんで、娘の答えを待った。

「はい、見たようでございます」

「どんな？」

「あの、殿様と」

「えっ？」

「添いました夢を。――」

真っ赤になるはずの娘が、なんと、鋭すぎるほどの眼差しで、伊右衛門の視線をとらえている。

「こ、これ。声が大きい」

「夢だ、とおもっておりましたのに、朝になると、おどろいたことに体が濡れておりました。殿様、お慕わしうございます」

と、これは小声。

愛情の告白というものではあるまい。娘はあきらかに伊右衛門を脅迫している。



朝餉のあと、伊右衛門は、肩衣をつけると、吉兵衛に馬の口をとらせ、逃げだすようにして空也堂の境内を出た。

木下藤吉郎の陣屋へ詰めるためである。

「可愛い娘でございますな」

と、吉兵衛が、馬の鼻の下からいった。

「ふむ」

伊右衛門は浮かぬ顔である。

「新右衛門も、殺風景な武者小屋に花が咲いたようだ、と大そうなよろこびようです」

「そうだな」

「いっそ、京都滞陣中はずっと住んでもらいましょうか」

「空也僧になった叔父をさがしている、というのだろう。そういう話はよせ」

「なぜでございます」

吉兵衛はのんきそうに、たずねた。

「なぜもこうもない。女はこまる」

「ははは、殿様は相もかわらぬ堅物であられます。そこへゆくと新右衛門や拙者は、やはりおなごがそばにいて、はじめて気がなごみます」

「おれは堅物ではない」

馬上の伊右衛門はにがりきっている。

「ほう、なかなか、おっしゃるようでございますな。しかし、あのようによい奥方様をおもちなされては、よそのおなごに眼は移りますまい」

（そうはいかぬ）

西洞院（にしのとういん）へ出た。

「吉兵衛、この馬は」

と、話題をいそいでかえた。

「だんだん痩せてくるようだな」

「左様」

吉兵衛は、ちらりとふりかえった。

馬の尻骨が、いたいたしいほどに突き出ている。織田家でこんな痩せ馬をもっている武士はまずすくなかろう。

「なにぶん、老いすぎております。もはや厩（うまや）で、余生を送るべき齢でございましょう」

「戦場の働きは馬だ」

馬のよしあしで、その騎馬武者の格闘力はずいぶんちがってくる。

「いい馬を買いたいものだ」

「こんどの御加増のぶんで金をお借りになれば、そこそこの馬が買えるではござりませぬか」

「むりだ」



加増されればそれだけの人数を召しかかえねば、これまた働きにかかわる。

「貧とはつらいものよ」

と伊右衛門はいった。

伊右衛門が、郷士あがりか、それとも織田家の譜代ならば多少の蓄財はあるはずだが、なにぶん牢人（ろうにん）の境涯からやっと這いあがって、一家をなしたばかりである。

貯（たくわ）えというものがなかった。

「まあ、よい」

その日は木下陣屋で二刻ほどすごし、用もないままに空也堂の武者小屋へ帰った。

なんと、小りんがまだいる。

「叔父をさがしに行ったのではないのか」

「はい、堀川のあたらしい道場に行ったのでございますけど、なにしろ諸国の空也僧の出入りがはげしくて、どのお上人にききましても、わからぬ、存ぜぬ、とかで、とうとう徒労におわりました。今夜ひと晩だけ、泊めていただけませぬか」

諾（うん）、と伊右衛門は、すぐれぬ顔色でうなずいた。うなずくほか、仕方がない。

伊右衛門は、夜が来るのがこわかった。

が、夜は来た。

寝（やす）まざるをえない。

昨夜とおなじように、臥床が二つ敷きならべられ、足もとに屏風がめぐらされた。

伊右衛門は、床に入った。

やがて小りんが燭を吹き消し、なんと伊右衛門のふしどに入ってきた。

（あっ）

と驚いたが、そのときは伊右衛門の腕は馬鹿力で小りんを抱きしめ、小りんのあつい熱が、伊右衛門の胸もとをくすぐっている。

「こ、こまるではないか」

と、伊右衛門は、小声でいった。

こまったことだ、とおもいながら、山内伊右衛門一豊は、小りんのももをひらかせてしまっている。

そのくせ、心中、

（こまる、こまる）

とつぶやいているのだ。

だらしのない男だ、と自分を軽蔑した。一生、ただ自分の情欲に押しながされつつ、こまるこまるでおわるのではあるまいか。

（これは、多少とも志をもつ人間のあるべき姿ではない）

自分で反省はしている。

だから、伊右衛門の顔は、じつに仏頂面のままだ。



仏頂面が、小りんを抱いている。人間、情欲だけはどうするすべもない。

ただ、意外なことがおこった。伊右衛門は心の臓がとまるほど驚いた。

小りんが、閨声をあげはじめたのである。

「あっ」

と小りんの口をおさえたが、噴きあがるように出てくる声はどうしようもない。

（こ、こまった）

次の間の二人の郎党は、それまで小声で雑談をしていたのだが、ぷつっと話をとぎらせた。

静まった。

顔を見あわせているのにちがいない。

やがて、伊右衛門がやりきれなくなったことは、郎党が、申しあわせたようにいびきをかきはじめたことである。

吉兵衛、新右衛門にすれば、主人に余計な気をつかわせまいとする配慮なのだろうが、その配慮がありありと見えすぎていた。

伊右衛門は、閉口した。

その夜半。——

遠くで、法螺貝が三声鳴った。

伊右衛門はとびおきた。

「吉兵衛、新右衛門、陣触れ（動員）じゃ」

「はっ」

と二人がとびおきるけはいがし、ひうち石が鳴って、やがて次の間に灯がともった。

そのときは伊右衛門は、床の間に走って、具足びつのふたをはねあけている。

「いよいよ、浅井、朝倉攻めじゃ」

伊右衛門は、くるくると五体を動かして具足下着をつけ、刺足袋（さしたび）をはき、武者わらじをかぶせ、ひもをしめ、脛当（すねあて）をつけ、下から順次、道具をつけて行った。

兜だけはのこし、最後に打刀、脇差を腰に帯びたとき、ふとみると、小りんがいない。

「……？」

伊右衛門は妙な顔をした。数日来から、軍中に触れが出ていることを思いだしたのである。

軍中に触れが出ている。というのは、朝倉、浅井の諜者（ちょうじゃ）が京に多数入りこんでいる。それに用心せよ、ということだ。

(小りんは、それではないか)

織田の陣触れ、ときくと、姿を消した。

「吉兵衛、あの娘はどうした」

と、土間へ声をかけた。

「ただいま、ちょっと、干し物をとり入れると申して戸外へ出ましたが」

「つれもどせ」



伊右衛門は、うまれつき、笑っているような顔で、しかも心中の動揺を表に出さぬ工夫だけはしている。

自然、笑ったままの顔で、

「つれもどせ」

といったことになる。

時が時だけに、吉兵衛にはひどく不謹慎にみえた。

「殿、陣触れと申すのに、おなごを追えとはなにごとでござるか」

祖父江新右衛門もだまっていない。

「殿は見かけによらず、痴（し）れたおひとでござるのう」

さも軽蔑したようにいった。

この父の代からの郎党は、事と場合によっては伊右衛門を親戚の小うるさい叔父かなんぞのようにどなりつけることがあるのだ。

「ゆうべのことは、知っておりまするぞ」

と、吉兵衛は、腹当のひもを結びながらいった。

「後朝（きぬぎぬ）の別れと申すのでござろうが、時と場合がある」

「われらは、そういう殿にお育て致さなんだはずでござるわ」

家来とはいえ、三人で戦場を往来してきた男同士だ。ゆうべの伊右衛門のぬけ駈けが、たがいに女に飢えているときだけに、二人とも鬱憤をここで晴らそうというのだろう。

「ち、ちがう」

伊右衛門は、土間へとびおり、自分で戸外の闇へ突進した。

念仏道場、阿弥陀堂、開山堂、さらに他の武者小屋などのまわりを駈けまわって見てみたが、それらしい影がない。

そのうち、同じような武者小屋から、二騎、三騎と、タイマツをかかげて山門を駈け出してゆく。

伊右衛門は駈けもどった。

もどると、いきなり、

「馬鹿者」

とさけんだ。

「あれは、諜者じゃ」

「えっ」

と吉兵衛らは、信じない。織田家の下級将校に諜者が寄りつくはずがないではないか。

が、伊右衛門は、木下陣屋できいている。

多数入りこんでいる朝倉、浅井の諜者たちは、歩き巫女、辻君、御師、放下僧などに化けて、織田家のあらゆる階層に接近しているらしい。

諜報の焦点は、織田の軍勢が、いつどこへ発するか、ということだ。

「両人」

伊右衛門は、いった。



「構えてこのこと、他言すまいぞ。洩れれば腹を切っても追っつかぬ」

二人の郎党は、力なくうなずいた。

小りんは、闇の町を東へ走った。

京極の、とある寺の破れ築地までできて、左右を見まわし、小門をくぐった。境内に入るとすぐ、

「小りんです」

と、闇のむこうへ、小さくいった。

「庫裡へ通られよ」

闇のむこうで、返事がした。

庫裡の土間で草履をぬぎすて、小袖のすそをからげて、足をぬぐった。

やがて手燭がちかづいてきて、

「ごくろうだった」

と、手燭のぬしがいった。

僧形の大男である。越前なまりがある。越前出身の僧が、郷里の守護朝倉氏の用をつとめている、ということは容易に知れた。

やがて、一室で対座した。

「陣触れのことじゃろう」

すでに、多くの諜者からしきりと連絡があるらしい。

「やはりおぬしの報らせも、信長が岐阜へもどる、ということか」

「朝倉、浅井を討つ、ということでございました」

「おなじことだ」

岐阜へ帰るには、近江の浅井氏の領地を通過する。当然、浅井は防ぐ。越前からは朝倉の応援が南下する。近江で、信長討滅の大合戦がおこなわれるであろう。

「みなの報告が一致している。すでに越前へ使いを出して報らせておいた。あとはその人数、軍容、士気を報らさねばならぬ。町へ行って見物してくるように」

「はい」

立ちあがりかけると、僧形の男は、

「そちの話のもとは、織田家直参で木下藤吉郎与力山内伊右衛門と申したな」

「そうです」

「どういう男だ」

「さあ」

どう、とひとことでいえる特徴はない。

抱かれたぐあいからみても、膂力がとくにすぐれているという印象はなく、ひどく才走っているというぐあいでもない。

ただ、人柄に気品がある。それに郎党がいい、と小りんが答えると、

「そういう男が、立身をするものだ」



と、僧形の者はいった。

小りんは松明を持って表へ出た。

四条の板橋を渡り、祇園林を横切り、粟田口へ出ると、ぞくぞくと織田方の人馬が京を出てゆく。

小りんは路傍を走り、十禅寺の辻まで行って、百姓家の軒下にすわった。軍勢を見送るためである。

やがて東山が藍色に染まり、元亀元年五月九日の天が、しらじらと明けてきた。

織田勢は、松明を消した。

やがて、朽葉色十本ノボリの大旗がやってきたかと思うと、弓隊、鉄砲隊、そろいの具足をつけた馬廻組五百騎、そのあとに、紺地の金ランの包み具足に、白星の三枚兜をまぶかにかぶり、金作りの太刀、利刀黒の肥馬にまたがった信長が通ってゆく。

小りんは、あと一時間待った。

木下隊がきた。

その武者の群れのなかに、ふきだしたくなるような痩せ馬に乗り、雨露にさらされて糸の色もさだかでない武者が一騎、まじっていた。

伊右衛門一豊である。

松も、その影を落している水も、朝焼けでそまっている。

伊右衛門は、馬上でゆられながら、すぎてゆく粟田口の景色をぼんやりながめていた。

十禅寺の辻まできたとき、

「殿」

と不意に、馬の口をとっていた五藤吉兵衛が、小さく叫んだ。

「右手を見なされ」

という。

十禅寺の辻は、老若とりまぜた赤松の林にかこまれており、どの樹の根にも、掌の肉ほどの厚さの苔が盛りあがっている。

「なんだ」

と、伊右衛門はききかえした。

「あれに、小りんがおりまする」

（えっ）

老いた百年松がある。その苔の上に小りんが膝をつき地に左掌だけを突いて、こちらをじっとみていた。

伊右衛門の視線と合うと、小りんは唇を小さくひらいた。

驚くほど可愛い顔をしてみせた。そのあとすぐ、片眼をつぶってみせた。

あいさつである。

（あなたの体を知っている、わたくしは）



そんな片言でも叫びかねまじい表情であった。

が、すぐ松林がさえぎった。

おどろいたことに、小りんは行列にそって林のなかを駈けだした。

その気配で、織田方の軍勢が、いっせいに小りんを見た。

すぐ、視線を伊右衛門に集めた。

伊右衛門は、閉口した。そ知らぬ顔を天にむけてみたが、首筋は赤く染まっている。

「殿、知らぬ顔でいなされよ」

と、吉兵衛が、案じ顔でいった。知らぬ顔でいたい。織田方の士格ある者が、朝倉の諜者らしい女と契ったとあれば、なんとも弁解のしようがない。

やがて、小りんの姿が消えた。

ほっとした。

（おなごとは、こわいものだ）

伊右衛門は、その点、この時代の男としては、めずらしく小心なところがあった。

千代を愛しているせいか、どうか。

そんなことは、伊右衛門にもわからない。うまれついた性格なのであろう。

織田勢は、逢坂の赤土みちをくだって、湖の岸へ出た。大津の関址のある土地である。

そこで、休止した。

馬に水を飼い、将士は兵糧をつかった。

「殿、殿、何を考えておられる」
と、吉兵衛はこわい眼でいった。
伊右衛門は、草の上にすわって、琵琶湖に立つもやを、ぼんやりながめていた。
「いや、なに。なにも考えておりはせぬ」
「うそをつかれい。過ぎたことをうじうじ思うのは殿のわるい癖じゃ。それを直さねばいっぱしの大将にはなれませぬぞ」
「……」
「前だけを見なされ。今日の夕暮れには生きて夕餉(ゆうげ)が食えぬかもしれぬのがわれら武者というものでござるぞ。合戦は、夜か、おそくともあす昧爽(まいそう)か。そのときいかに功名をたてるか、それだけを考えなされればよい」



## 姉川

織田軍は大挙近江へ押し入ったが、信長にすればまだ浅井、朝倉と決戦するつもりはなかった。
岐阜へ帰国したかったのである。
途中、南近江では、浅井の煽動する一揆(いっき)を野洲川(やすがわ)の河原で撃破し、さらに岐阜にむかって戦闘行軍をつづけた。
岐阜へ
岐阜へ
織田軍は、強行軍をつづけた。
歩卒はほとんど、小走りの行軍である。
「殿、大きな合戦はなさそうでござるな」
と、吉兵衛がいった。

「そのようだ」

伊右衛門もほっとしている。不覚にも小りんという朝倉か浅井の諜者らしい女に接近して、

——こんどの陣触れは朝倉、浅井攻めだ。

とつい洩らしたことが苦になっていた。

しかし、信長の神算鬼謀は、伊右衛門などのうかがえるところではない。

近江攻略とみせて、素通りしてしまった。

浅井方は肩すかしを食ったかたちだが、織田方の将士でさえ、

——なんじゃ、戦さではなかったのか。

と、意外におもった。

信長には、準備が必要であった。

かれは弱年のころ、小部隊をもって桶狭間の今川義元の陣営を奇襲し、文字どおりの奇勝をあげたことは有名だが、それ以後のかれの合戦の仕方は慎重そのものであった。

戦いの前に十分な外交をおこない、偵察をし、謀略を用い、しかもいざ合戦となれば敵を圧倒するだけの兵力を集結し、待ちに待って、はじめて火のように攻撃をしかけるのである。だから、戦えばかならず勝つ。

そういう男であった。

いま信長は、岐阜へ帰ろうとしている。

大戦さの準備をするためであった。



途中、事故があった。

信長が千草越を越えるときである。

南近江の旧勢力六角承禎にたのまれた杉谷善住房という鉄砲の名手が、鉄砲に二ツ玉をこめて林間にひそみ、信長の来るのを待った。

距離は、わずかに十二、三間である。

いよいよ信長の旗が通過し、旗本の騎馬隊が通過し、ついに信長その人が銃口のむこうにあらわれたとき、念なく引金をひいた。

轟然と弾が二つ、飛びわたった。

みごと、命中した。

信長の浴衣のタモトへ、である。ころりと弾が落ちた。

旗本が騒ぎ、山中を捜索したが、

「いそぐ。捨てておけ」

と、信長は馬足をもゆるめなかった。

ついに岐阜へついた。

伊右衛門は、その夜、数カ月ぶりで千代の待つ屋敷へ帰った。

門が八字にひらかれており、門わきにはカガリ火が燃えている。

「帰った」

と、伊右衛門が玄関でいった。

千代が式台で、指をついている。その肩をいきなり抱きすくめたくなる衝動に、伊右衛門はかろうじて堪えていた。

その夜、夜食のときの夜語りほど、この夫婦の歴史にとって楽しかった思い出はない。

まず千代は、伊右衛門の頰の傷あとの大きさにあらためておどろいてみせた。

「大きうございますこと」

下から見あげるようにしていった。

「城下のうわさで聞いておりましたが、ほんのかすり傷と承っておりましたのに」

「この傷には、ひと夜かたりあかしても尽きぬ物語があるぞ」

なまなかな傷ではない。一躍二百石に加増された傷である。

「ノミのようなヤジリが、頰をつらぬき、口を突き通って、こちら側の」

と伊右衛門は指で口をひろげ、

「奥歯をくだき、歯の根にささって、吉兵衛めがおれの顔を踏んでやっとひきぬいたほどの傷じゃ」

(よくまあお命が)

と千代は胸が痛くなったが、顔には出さず小首をかしげてじっと微笑した。

「なんじゃ」

伊右衛門は、千代の顔をのぞきこんだ。



「いいえ」

「なぜそのように見つめている」

「あの」

千代はのど奥で笑って、

「そのお傷で、男ぶりがいちだんとあがられたと思いましただけ」

といった。伊右衛門もわるい気はしない。

「それほどか」

「なんなら、鏡を」

と伊右衛門の顔を映してみせた。

たしかに武者ぶりがあがっている。もとの顔だちはどちらかといえば能役者にふさわしいほどにやさしかったが、この向う傷のおかげで、十騎ならんでもめだつほどのいい武者面（むしゃづら）になっている。

「きっと御開運のお傷でございましょう」

と、千代はおだてた。

「でも、もうお傷はなさいませんように。千代は毎日、伊奈波（いなば）の宮にお詣（まい）りしておりました」

「そのおかげで、この傷程度で命をとりとめたのかもしれない」

「とにかく、旦那様」

「なんだ」

「御加増おめでとうございます」
「いやいや、千里を征(ゆ)くものは、これしきの小成によろこんではならぬ」
「よいお言葉」
千代は、惚れぼれと伊右衛門をみた。その気持、わすれるな、といいたいところだろうが、言葉に出してはいわない。
母親の法秀尼の教えには、男へは訓戒めいたことをいっては、かえってツムジをまげて逆効果になるという。
千代は、聡(さと)い。
ほのかに、おだてている。
おだてられれば、七の能力の者もおのれに自信を得て十ほどの力をだすこともあるものだ。
その夜、早目に臥床に入った。
「千代、よい子を産め」
祈るようにいいながら、伊右衛門は夜のふけるまで、千代をはなさなかった。
こども、といえば、千代はいまだにそのしるしがない。
不安であった。
自分は、あるいは石女(うまずめ)ではあるまいか。
(このおたね、かならず千代のなかでやどりますように)
千代も祈るようにして、戦場帰りの夫のはげしい愛撫をうけている。



翌朝、伊右衛門は屋敷で終日、戦塵の疲れをいやそうとして、朝も、陽がのぼってから起きた。
「千代、耳だらいに湯を。——」
と命じ、縁側に出た。ひげをそり、鼻毛でも削(そ)ぐつもりである。
せまい庭に、六月の陽が照っている。
(よく命があったものだ)
あらためて、それを思った。おもいだすとぞっとするようなことが、何度かあった。
ひげをそった。傷に触れないようにそるのは、なかなか工夫の要る仕事だった。
つぎに、鼻毛を削いだ。指を鼻の穴につっこんで毛をひきだし、それをカミソリで、
サク
と切るのである。これも芸の要ることでなかなかむずかしい。
そこへ千代がやってきて、
「おぐしをお梳(す)きいたします」
と、手ぎわよく梳き、あたらしい元結(もとゆい)にかえてくれた。
そのあと、伊右衛門は、ニキビをつぶしはじめた。伊右衛門はおくてで、女房をもらったいまごろでも、こういうものが出るのである。
「一豊様」
と、千代は部屋のすみで袴(はかま)に火のしを当てながら、微笑をむけた。

「きょうは御用がおありなのではございませぬか？」
「いや、ないんだ」
「忘れていらっしゃる」
くすくす笑っている。
千代の胸中、伊右衛門ののんきさが、はがゆくてならない。
二百石に加増された以上、戦いにのぞむ場合、それだけの人数が必要である。こういう定員を軍役という。二百石ならば、規準として、騎馬武者二騎、歩卒六、七人は必要であった。
ちなみに、戦国武士というのは、徳川武士とはひどくちがう。徳川武士のようなじめついた忠義の観念はきわめてうすい。
要するに、主人に対して、功名を請け負っているのである。いいかえると、二百石の山内伊右衛門一豊は、一つの企業である。信長という親会社に対し、功名を請け負っているといっていい。
それだけに、おなじ二百石でも徳川武士の場合なら家格の体裁として侍、中間、小者を召しかかえればいいのだが（徳川期も中期以降は経済的理由から軍役どおりの人数を召しかかえている武士は皆無といってよかった）、戦国武士のばあいは、できるだけ有能な士をさがし、口説き、自分の食をきりつめてもかれらを優遇しないと、大きな働きができなかった。
（のんびりしていらっしゃる）
と千代は思うのである。きょうから人さがしに夢中になるのが当然ではないか。
「吉兵衛と新右衛門が、大よろこびでございましたよ。馬に騎れる武士になれた、と申しまして」



（そうだった）
伊右衛門は、鼻からカミソリを離した。
「千代、家来をさがさねばならぬな。わしはお前のように気楽ではない。きょうはいそがしいのだ。そうそう、亡父の旧領だった黒田村（尾張国羽栗郡）へでもいまから出かけて行って、人をさがして来ようかと思う」
「まあ、お忙しうございますこと」
千代は、火のしをあてつつ、うつむいて忍び笑っている。
「黒田村は、きょうで、あすはどこへいらっしゃいます？」
千代はずるい。いつもそれとなく先を打ち、伊右衛門に考えのヒントをあたえるのである。
「あすは、どこ？」
伊右衛門は黒田村だけを考えて、あすはどこにするとかを思わなかった。
「できるだけほうぼうでさがせば、お気に召す者も出て参りましょう」
「それもそうだな」
しかし、やたらと物色はできない。
この時代、郎党をさがすのは、普通、縁のある地や、血縁にかぎられていた。渡り者とちがって、随身の気構えがちがう。
縁のある土地といえば、自分の出身の村、知行地、などである。

伊右衛門があたらしくもらった知行地は尾張国内にあるが、まだ縁がうすい。
「美濃の不破などに、ぶらりとお遊びがてらにいらっしゃいませぬか」
「おお、そうであったな」
千代の実家だ。それを忘れていた。
「それではきょう、使いを出しておきましょう。伯父の市之丞は一豊様が大好きですから、もうおろおろしてよろこぶにちがいありません」
じつのところ市之丞は、伊右衛門に対してそれほどでもない。しかしそういうようにいえば人と人とのつながりがうまくゆく、という智恵を千代はうまれつきそなえているのである。
「それに」
と、千代はいった。
「吉兵衛と新右衛門は、ふたりともお連れあそばすのでございましょう?」
「ああ、連れてゆく」
「あの者どもは、ぜひ殿よりさきに、新規お召しかかえの者に会いたいとそればかり楽しみにしているようでございますわ」
「ほう」
伊右衛門は考えた。
なるほど、考えてみれば伊右衛門がまず会うよりも、かれらに会わせ、かれらが推挙する、という形をとれば、これからの「山内家臣団」の人間関係がうまくゆく。



「そうすれば千代、おれは行かずとも、この屋敷でじっとしておればよさそうだな」
「お大名になりあそばしたときは、きっとそうなされませ」
千代はほがらかにわらうのだ。
「しかし、いまの御身分なら、木下藤吉郎様のように軽々しいとのソシリをうけるほどに気安く出むいて人にもお会いあそばしたほうが、召しかかえるときでも、——わざわざ出むいてまで自分を見こんでくれているのか、と物よろこびするものでございます」
「そうか」
出かけた。
馬上、黒田村までの日盛りの道を打たせながら、
(なにやら、千代めの言いなりになっているような)
と気持がふとしたが、すぐ男の自尊心がそれを打ち消した。
(なに、どれもこれも、わが考えたことを千代が隈取(くまど)っているだけのことだ)
伊右衛門は、その後、数日、尾張黒田村、美濃不破郷などにゆき、しかるべき百姓家から、二男、三男を物色してきて、歩卒十人を選んだ。
二百石では、七人が経済的な限度である。多すぎるかな、と不安になった。
十日ほどして、新規召しかかえの十人の若党、馬の口取り、小者があつまった。
みな屈強の若者たちである。

しかし伊右衛門は、かれらを扶持してゆくことができるかどうか、心配になってきた。前にもふれたように、二百石では歩卒六、七人というところなのに、十人。

それに、この知行は新知だから、まだ年貢は入っていないのである。当分は、従前の貯えでやらなければならなかった。

「千代、やってゆけるだろうか」

と伊右衛門はいった。

「なんとかなりましょう」

「あっはは、お前はのんきでいい。人間は毎日米を食うんだよ。衣類も要る。武具も買ってやらなければならない」

「ほんと」

「おいおい、いまさら気づいたのかえ」

「いいえ。一豊さまが、ぞんがいこまかいことにお頭をお使いなさる、と感心したのでございます」

「女房殿がのんきだと、つい使いたくなるものだ」

「もうしわけございませぬ」

「わしは、父が討死してから流亡の生活を送って、年少で辛酸をなめている。それからいけば、お前はおなじように戦場で父をうしなったもののいい伯父をもって苦労知らずにそだった。その苦労の有無のちがいだ。人間苦労はすべきではない。苦労しすぎると、ついついさきざきのことばかり心配になるものだ」



「千代はのんき育ちでございますから、さきざきのことは陽気に考えております。この戦さでまたお手柄をおたてくだされば、十人ぐらいは楽に養えますもの」

「手柄とは、武運が必要だ」

「一豊様は、うまれつき、ご武運にめぐまれていらっしゃいます。千代はそう信じております」

「ほう、そう信じているのか」

「いますとも」

伊右衛門は、千代とこういう会話をかわしていると、その場だけでも楽天家になってしまう。

「なるほど、おれは武運があるかなあ」

「ございますとも」

千代は断定した。

「それならありがたい。ところが千代、いかに次の合戦で働こうと、今日あすの米がなければ彼らは養えないよ」

これは現実の問題である。

「一豊様、わたくしどもが、粗服を着、雑穀をたべ、それでも足りなければ、わたくしの小袖を売ります」

「のんきだなあ。そんなことでいつまでやってゆけると思うのか」

伊右衛門は、良家に育った千代をよほどのんき者だと思っているようだった。

千代は、決してのんきなたちではない。彼女ののんきさは、母の法秀尼から教えられた演技で

ある。

「妻が陽気でなければ、夫は十分な働きはできませぬ。夫に叱言をいうときでも、陰気な口からいえば、夫はもう心が萎え、男としての気おいこみをうしないます。おなじ叱言でも陽気な心でいえば、夫の心がかえって鼓舞されるものです。陽気になる秘訣は、あすはきっと良くなる、と思いこんで暮らすことです」

　正直なところ、千代も、これだけの大人数の家来をかかえて、やってゆけるとは思わない。が、あすはなんとかなろうではないか。

千代は、美濃不破地方では、

——お館さま。

といわれた不破家で養われた、いわばお姫さまそだちである。

ところが、うまれつき家計の切り盛りの才能がそなわっているのであろう。

ずいぶん家計を切りつめているのに、彼女にはちっともしみったれたふんいきがでてこない。

いつもゆったりしていて、なんの屈託もなく暮らしているようだ。

そのくせ、千代は、山内家の家計をあずかる主婦のくせに、マナ板ももっていないのである。

米をはかるマスを代用にしていた。

彼女の持っているマスというのは、材は竹板で、フチは竹である。

これを裏返してマナ板につかう。



伊右衛門が一度台所をのぞいて、

「マナ板ぐらい、作らせたらどうだ」

とまゆをひそめたが、千代はびっくりしたように伊右衛門を見あげ、

「このほうが、ずっとつかいやすうございます。わたくしが工夫したつもりでございますのに」

千代はその上で大根を切ってみせた。

トントンと快いひびきが生じた。

「ね、小鼓のようでございましょう」

「なるほど」

つい、千代の話しかたのリズムにひきこまれて感心してしまった。

「なるほど、台所の小鼓か」

「ついでに幸若舞でも舞ってさしあげましょうか」

「まあ、いい」

このマス兼用のマナ板は、江戸末期にちかい文化二年、山内家から高知城下の藤並神社に寄贈されながく保存されていた。マスの裏に無数の庖丁のあとがついていた（昭和二十年の戦災で焼失、現在その模造品がおさまっている）。

　千代は器用な女性であった。というよりなんでもない素材からうつくしいものを作りあげる一種の芸術的な才能があった。

　これも後年のことだが。

唐織のさまざまな小布れをたくみにはぎ合わせて、小袖をつくった。

その出来ばえがあまりにみごとなので評判になった。当時、天下をとったばかりの秀吉がこれをきき、

「ぜひみせてくれ」

とたのんだ。

この「作品」には秀吉も感心した。おりから、秀吉一代の建築的傑作である聚楽第が完成した。聚楽第へ後陽成天皇の行幸をあおいだとき、秀吉はとくにその小袖を展観して、天皇に自慢した。

ひょっとすると、千代は服飾デザイナーのくさわけということができるかもしれない。

まあそれは後年のはなし。

とにかく、家計のやりくりというのは、けちの精神でやっては一家がしみったれてくるし、ソロバン勘定だけでやると家のふんいきが殺風景になってくる。やりくりは工芸家的な感覚でやるべきであろう。

千代には、天性それがあった。

それに、

「なんとか、やれましょう」

というのは、いわば芸術的にいっているのであって、計算でいくと、とてもやってゆけるはずがなかった。

「そうか」



伊右衛門は算用のできる頭脳だが、もう千代の「芸術」にまかせる気になっている。

それから数日経った。

元亀元年六月十九日の丑ノ刻、城のほうにあたってにわかに法螺の音がきこえた。

(あっ)

と千代はとびおきた。

すぐ燧石を打ち、燭台に灯を点じた。

ぼっと部屋があかるくなった。

「一豊様、一豊様」

ゆりおこした。伊右衛門は馬鹿のようになって、ねむりほうけている。

「お城でお陣触れの貝があのように鳴っておりまするぞ」

わっ、と伊右衛門はおきた。

千代を見た。

「なんじゃ、千代かえ?」

寝ぼうけている。合戦で組み敷かれているような夢でもみたのであろう。

(こまったひとだ)

と、千代はおもった。

「一豊様、あの貝がきこえませぬか」

「………」
　事態がわかってきたらしい。
　すぐ床の間の具足びつへ駈けより、ふたをはねのけた。
「千代、湯漬け」
「はい、支度ができております」
　実をいうと千代は、今夜あたり貝が鳴るのではないかという予感がしていた。昨日の夕刻、屋敷の前を、木下藤吉郎が馬上で通ったのである。
　千代は、屋敷の長屋を建てますために大工と打ちあわせをしていた。
　大工をつれて路上へ出、長屋門を指さした。
　そのとき藤吉郎が通った。
「やあやあ、伊右衛門の内儀どの」
　と、藤吉郎が気さくに声をかけた。
　千代はくるりとふりむき、おどろいてあいさつをしようとすると、藤吉郎は手綱をひいて馬をとめた。
「ご精が出るな。御加増になったゆえお長屋を建て増しなさるのか」
「は、はい」
　千代は、どぎまぎしている。
　藤吉郎は、千代のそうした若女房らしいういういしさが、たまらなく気に入っているらしい。



「結構、結構。伊右衛門は美濃、尾張に行っていたようじゃが、よい郎党がみつかりましたか」
「はい。とても」
　千代は赤面症の気味があって、首すじまで真っ赤になっている。
　それがまた、藤吉郎の気に入っている。
「それはよかった。そんな郎党ならば、藤吉郎も見たいものじゃ」
「ああ」
　千代はうれしかった。うれしさをいっぱいに表現できる表情にめぐまれている。
　彼女の徳のひとつであろう。
　千代の笑顔が藤吉郎にも伝染って、何を思ったか、馬からとびおりた。
　屋敷へ案内せい、というのである。郎党を見てあげようというのだ。
　郎党にとっても、織田家の大将からこういう処遇をうけるのは、破格な仕合せである。
　おりあしく伊右衛門は不在だったが、千代は案内して庭さきに吉兵衛、新右衛門以下をひざまずかせ、それぞれ藤吉郎の言葉を頂戴した。
　藤吉郎は、すぐ鞍の上にもどった。
　夕焼け空をみながら、
「あすは晴れればよいのにの」
　ことさらにつぶやいて、行ってしまった。
　そのつぶやきに、何か意味があるように千代はおもった。ひょっとすると、と思い、出陣の支

度だけはしておいたのである。

伊右衛門が玄関に出ると、五藤吉兵衛以下、みなひざまずいて待っている。

門を出た。

口取りが、馬をひいてきた。

「みごとな星の夜だな」

と見あげつつ、伊右衛門は馬上のひととなった。

「千代、出かける」

と、門わきへ声をかけた。

門わきで、千代が無言で頭をさげた。

門前を、おびただしいたいまつが駈けすぎてゆく。陣触れの貝をきいて城へむかう人馬である。

(われも遅れをとるまじ)

と、伊右衛門はそのとどろな蹄の音、具足の金具のひびきのなかに巻きこまれた。

もう、千代のことは念頭にない。

(男はふりかえるな、と千代はいった)

伊右衛門は、もはやこの瞬間より将来のなかに思いを置いている。

(功名。……)

伊右衛門の生活感情は単純である。いや、単純なようにあの利口な千代は仕むけてくれている



のかもしれない。

男とは、――と伊右衛門はおもうのだ。いかに高言を吐き、才芸にすぐれていても、それがなんであろう。男が、男であることを表現するものは、功名しかない。

若い伊右衛門の哲学になっている。

(この哲学は、いつか崩れるときがくる)

とは、若い伊右衛門は夢にも思わない。

払暁、織田三万の大軍団の行軍がはじまった。将士はまだ、攻撃の目標が、越前朝倉氏か、近江浅井氏の本拠をつくのか、明確には知らされていない。

夜が、しらじらと明けた。

総大将の信長は、馬上、中軍にあり、汗をきらって甲冑をつけていない。頭に黒漆ぬりの笠をかぶり、白の浴衣に、黒の陣羽織。その陣羽織の背には、銀箔を押した桐蝶の紋がきらきらと陽光にかがやいている。

ひどく、伊達な装束である。

先頭が関ヶ原付近に達したとき、全軍の将士は、そのむかう方角にかたずをのんだ。

道は、三道にわかれている。

北国街道をとれば、朝倉の本拠である越前一乗谷をくつがえすことになろう。

南は伊勢街道である。

直進すれば中山道は近江へ出る。

（どちらか）

と伊右衛門はおもった。

やがて、先鋒部隊が道を直進して近江へむかっているというささやきが波のように伝わってきて、

（さては浅井攻めか）

と伊右衛門は、おもわず胴ぶるいをした。

近江の浅井氏は、兵するどく、馬騰り、銃器も多い、ということは天下の評判である。

醒ケ井で宿営したとき、

「吉兵衛、敵は浅井ぞ」

と、伊右衛門は、声をふるわせていった。

「さん候」

吉兵衛らも、緊張している。おそらくこんどの戦さは、敦賀での朝倉の支城を攻めたようにたやすくは片づくまい。

「吉兵衛、こんどの戦いは、どうやら討死も覚悟せねばなるまい」

「覚悟の前でござる」

無償で武運を拾えるものではない。

軍記的表現でいう破竹の勢いとは、近江に攻めこんだ織田軍団のことである。



雲雀山、虎御前山のふもと一帯の農村を焼きつくし、浅井氏三十九万石の本拠小谷城にせまろうとした。

小谷城の東南に、横山城というのが、その支城といった形で、浅井氏の重要な要塞の一つになっている。

横山城が陥ちれば小谷城の防衛能力は半減する、という存在である。

横山城は臥竜山の山頂にあり、三層の楼閣を湖北の天にそびえさせ、そのふもとを姉川の流れが洗っている。

織田軍は、信長自身が総指揮をしてこれを包囲した。

容易に抜けない。

浅井方では、すでに越前の同盟軍朝倉氏から一万の援兵が来着しつつあり、元亀元年六月二十六日夜半、ついに近江戦線に着陣した。

浅井軍は大いに士気あがり、横山城救援のために織田攻囲軍の背後をさらに包囲してこれを姉川河畔で殲滅しようとした。

「三河殿（家康）はまだ来ぬか」

というひとりごとを、信長は横山城包囲いらい、つぶやきつづけていた。

「すでに先鋒は岐阜に到着した模様にござりまする」

などと、駅伝が、しきりと報じてくる。

「すでに垂井に」

「もはや醒ヶ井に入りましたゆえ、何刻には御到着でござりましょう」
と飛報がしきりとくる。
ついに、敵方の援軍朝倉部隊が入ったその二十六日、織田方の同盟軍徳川部隊一万も横山城包囲の戦線に参加した。
竜ヶ鼻の本陣にいた信長はみずから家康の馬を出迎え、
「三河殿、かたじけない」
と、思わず手をとった。
その間も、浅井方の作戦活動は停止していない。
姉川をはさみ、野村、三田村といった地域をあたらしい戦線としてぞくぞくと集結しつつある。
二十七日夜、伊右衛門とその郎党たちは姉川の向う岸におびただしい松明がしきりと動いているのを望見した。
「あれをご覧なされ」
と吉兵衛はいった。
「敵は、あす早暁を期して乾坤一擲の決戦をする様子でござりまするぞ」
「なるほど」
伊右衛門は、夜霧を通して、火の群れのさかんな運動をぼう然とみている。
吉兵衛は、戦さ場のカンがすぐれていた。
「新右衛門、そちはどう思う」



と、祖父江新右衛門にきいた。
この男も、カンがわるくない。
「おそらく、吉兵衛のいうとおりでござりましょうな。吉兵衛ですらそう思うのでありまするから、御本陣はとっくにお気づきでございましょう。おっつけ、部署の変更がありましょう」
伊右衛門の美徳は、自分にさほど才がないということを知っている点である。つねにこの二人の意見をただした。
ふたりはいかにもこの若い主人の両翼になってたすけているというよろこびがある。
伊右衛門は、かれらの意見をよくきき、もっともと思う意見を採択した。その採択の的確さ、早さという点に、伊右衛門の能力はある。
姉川は、北近江の大河である。
みなもとを美濃境の高峰鉄粕岳に発し、まっすぐ南流して伊吹山のふもとを洗い、伊吹山から東へ曲げられて湖畔平原に出、十五キロを西流して琵琶湖に入っている。
浅井・朝倉の陣はその北岸にあり、織田・徳川の陣は、その南岸にある。
地形は、浅井・朝倉軍に有利である。
なぜならば、かれらの占拠している岸は崖が切り立ち、織田方から容易に攻めかけられないからだ。
夜陰、信長はただちに諸将をその竜ヶ鼻本営に招集し、軍議をひらいた。

軍議、といっても、信長の場合は相談ではない。攻撃部署を命令するだけのことである。
ただ、軍議の直前に信長は同盟軍の家康にだけは、その意中をもらしていた。
「お手前は到着早々であるから、将士も疲れておろう。後詰め（予備隊）にまわりますように」
家康、二十九歳。
後詰めときいて、憤慨した。
「聞こえませぬ」
というのである。
「それがしは三十に足らぬ少壮でござる。その若さで、老人あつかいの後詰めとはどういうことでありますか」
「いや、兵の疲れを考えたまでのことだ」
「迷惑でござる。加勢にきた以上は一番こそ望ましい。後詰めとあれば来世にまで聞えが悪しゅうござる。とにかく、一番をおおせつけてくだされ。さもなければ今夜、陣をはらって浜松へ帰るばかりでござる」
といった。
先陣というのは損害が大きい。大将みずからの討死もめずらしくない。
が、家康はそれを望んだ。この人物は決して血気にはやるというたちではなかったが、利をつねに遠くへ置いていた。大利を遠くへおき、眼の前の不利を考えない。そういう思考方法の男である。



信長は信長で、家康のそういう思考方法をよく知っている。
「お手前は後詰めに」
といえば、当然家康は色をなして、
「一番を」
というであろう。そこを待っていたのである。相手にみずから望ませて先陣をゆるす以上、相手はいい加減な戦さはできない。信長にはその辺の機微がわかっている。
第一、家康の軍は、三河兵が主力で、尾張兵が主力の織田軍よりもはるかに強いのである。この強兵集団に先陣をやってもらいたいのは、信長の当然望むところであった。
「さらば、先陣をたのむ」
といった。
軍議になった。
信長は、先陣を発表した。
諸将はわきたった。口々に不満を鳴らした。なるほど、譜代の諸将にとっては、織田家興亡のこの一戦の先陣を客将にとられるというのはつらいことだ。
信長は議論ぎらいの男である。大喝一声し、
「小僧ども、推参なり。なにを知りて反対をば唱えるぞ」
軍議はこれで決定した。
ところが木下藤吉郎の部署は。——

徳川部隊は、姉川渡河戦の皮切りをつとめるべく、織田陣地の左翼に展開し、千草部落という、河畔にもっとも近いところまで進出して夜のふけるのを待った。

すべて、無灯火行動である。

信長直属の織田部隊についても、先鋒が任命された。

先鋒は、坂井右近という猪突猛進型の武将がえらばれた（この戦闘で戦死）。

二番手は、池田信輝である。

三番手が、木下藤吉郎であった。

信長は、対岸の浅井・朝倉連合軍が容易ならぬ敵とみて、旗本にいたるまで十三段の縦に深い陣立てをつくった。

おちこちの村寺から初夜（午後八時）の鐘がきこえわたるころ、織田軍はそれぞれの部署に移動しはじめ、ほぼ二時間で陣立てがおわった。

「われらは三番隊か」

伊右衛門は、がっかりした。この一戦でできれば千石の身分になればとおもっていたのである。でなければ、抱えすぎるほどにかかえた歩卒を養ってゆけないではないか。

「殿、まあお気楽に召せ。武運というものはどこにころがっているかわかりませぬぞ」

と吉兵衛はなぐさめた。

そのとおりだ、と新右衛門もうなずき、



「亡き殿（伊右衛門の父）も申された。持場々々で懸命ならば武運はひきよせられてくるものじゃ、と」

といった。

伊右衛門は、そうか、そのようなことを父上は申されたか、と相好をくずした。

そんな程度のありふれた教訓に伊右衛門が感銘しているわけではない。二人の譜代の臣の説教癖を満足させてやっているのである。

伊右衛門はもはや二百石。

この男の胸奥もその禄高とともにだんだんひろくなってきたというべきであろう。

木下隊の一同は、民家の軒、木のかげなどで仮眠した。

午前二時、全員がおこされた。

「おお、みごとな星空じゃ」

伊右衛門は北近江の天をみあげた。

六月とはいえ、夜霧が具足の下までしみとおって、体が冷えきっている。

午前三時。

東のほう千草部落の方角にあたってすさまじい銃声がおこった。

対岸の浅井・朝倉陣地からも、星のように火光がみえ、やがて天地をとどろかすような銃声がきこえてきた。

「おお、徳川殿の川渡りがはじまったぞ」

木下隊は、すぐ前進した。
その前方で、織田の先鋒坂井右近隊が、武者声をあげながら河中に入ろうとしていた。
伊右衛門は、ぶるっ、と胴ぶるいがきた。戦さははじまったのである。
吉兵衛が、馬上でどなった。
「殿、殿、どこにおわす」
「ここにいるわ」
伊右衛門は、夢中で前進していた。
押しながら、河岸へきた。
夜目でよくわからないが、おびただしい松明が河中で入りまじり、硝煙があがり、叫喚の声がきこえ、姉川はいまや地獄図絵のそのままになっていた。
「吉兵衛、新右衛門、離れるなっ」
伊右衛門は河へとびこんだ。
が、馬が前脚を折ったのか、どっと河中へ投げだされた。
もんどり打って水中に落ちたのだが、運のわるいことに崖下の淵で、ずんと深い。
もともと琵琶湖の東岸に流れ込む川は、北から数えて、余呉（よご）川、姉川、大野川、犬上川、愛知（えち）川（がわ）、日野川、野洲（やす）川などがあるが、いずれも川の長さがみじかく、山地に雨が降ればあふれるほどの水流になるが、平素は河床が白く干上がっている。



姉川も同断である。
ところが、それでも川だから瀬がある。多少の淵もある。
伊右衛門は運わるくその淵に落ちこんだのだ。重い具足を着こんでいるためにどんどん沈んでゆき、河底の砂をつかんでしまった。
（こまった）
河底の砂地を蹴り、何度も蹴ってやっと浮かびあがったときは、目の前を人馬がゆく。
あふれるように行く。
どうやら、すでに五番手、六番手の部隊が通過しつつあるようで、伊右衛門の木下隊は、とっくに対岸にあがってしまっているだろう。
槍をさがしたが、そのあたりに見つからない。
馬もいない。
いや、馬どころか、郎党たちも、伊右衛門がどんどん先へ行ってしまったと見たらしく、そのあたりに居なかった。
（どうしよう）
泣きたくなった。
ふと、頭上の星が目に入った。濃藍色の空にひときわ光芒を放っているために明星（金星）かと思ったが、日没後西天高く輝くはずのその星が、この刻限に伊右衛門を見おろしているはずがない。

（あっ、千代）

それが、千代の顔にみえた。

千代が微笑した。

微笑しながら、

「槍も馬も郎党もなくなっても、あなたご自身がそこに居るではありませぬか。戦さは、千変万化するものです。そのまま、素手で、徒歩で、お往きなさい」

（往ってもよいか、千代。——）

「いいですとも」

（千代が護ってくれるか）

「勿論」

伊右衛門は、カブトをはねあげ、しぶきをあげて駈けだした。

夢中で駈けた。

みると、最後尾の信長の旗本が、旗鼓(きこ)堂々と渡渉(としょう)しつつあった。

伊右衛門は、やっと対岸の崖の草をつかんだ。一尺、体を持ちあげた。崖をひっ掻くようにして這いあがった。

そのとき、背後の伊吹山が紫に染まり、元亀元年六月二十八日の太陽が団々とのぼりはじめた。

伊右衛門は崖っぷちから顔を出した。

戦場を見た。



硝煙と朝霧が立ちこめてよくわからなかったが、あたりは累々(るいるい)たる死体のむれである。

地獄図絵といっていい。そのあたりを駈けまわっているのは、多くは浅井・朝倉の武者で、織田方の武者はあきらかにひるみ、攻勢の姿勢をうしない、防ぎに躍起となっていた。

あとでわかったことだが、この時期にはすでに一番手の坂井右近隊は潰滅(かいめつ)し、右近もその子の久蔵も討ち取られ、部隊三百のうち百余人が戦死してしまっていた。

二番手の池田信輝も切り崩され、三番隊の木下藤吉郎隊も潰滅寸前にあった。伊右衛門が落馬しなかったならば、いまごろはこの死体群の一つになっていたのではないか。

陽が昇ってみると、いや、凄い。

これほどすさまじい合戦の光景というものを、伊右衛門の生活でもあまり目撃したことはない。主を失った馬の群れが、戦場を狂気したように駈けまわっている。

そちこちで、組み打ちがはじまっているが、どの組み打ちも一瞬で勝負がついた。なぜといえば、組み伏せたとたん、上になった男が、下の男の郎党に串刺しに突き伏せられ、やっと起きあがって首を掻き切ろうとすると、駈けこんできた敵に、やっと拾った命を奪われている。

「しゃあっ」

と、伊右衛門の横を馬を激しく打たせて駈けすぎる朱具足の武者があった。

（おお、あれは）

知っている。鉢を鶏の尾でかざった異形(いぎょう)のカブトをかぶっているからそれと知れる。十番手に

所属している田沼雲右衛門という豪の男だ。雲右衛門は青貝を磨りこんだ自慢の槍をしごきつつ敵陣の中に突入して行ったが、またたくまに敵の騎馬がむらがって寄せ、一合もまじえぬうちに数本の槍で天空に突きあげられた。

三度突きあげられたが、おそらく三度目は死骸になっていたであろう。

すでに信長の旗本が渡河をおわった。

ところが浅井・朝倉勢のすさまじさは、十三段構えの織田陣の備えが、十一段まで破り去られている。

(こうしてはおれぬ)

伊右衛門は、夢中で駈けた。駈けるだけで自分が何をしようとしているのか、わからない。

(とにかく馬だ)

やっと、目標を得た。敵をもとめるよりも馬をもとめるべきであった。

夢中で駈けているうちに、わっと眼の前が茶褐色になった。

馬が伊右衛門の頭上におおいかぶさろうとしている。

(脛を斬れ)

というのが、騎馬武者に対する唯一の心得であった。

伊右衛門は刀を右肩にかつぐなり、体ごとで斬った。

ところが、あやまって手綱を斬った。

これがかえってよかった。敵はあっと落馬した。



伊右衛門はすばやく馬を奪って乗り、馬腹を両股でたくみに締めながら、起きあがろうとする敵武者を鞘ぐるみの太刀でなぐった。

武者は顚倒した。

そこへ影のように走ってきた歩卒がある。

(おお、伊作ではないか)

千代の実家の不破家の領内からきた新参の下郎である。

体が大きいわりには動作のすばやい男だ。

「殿、ここはおまかせくだされ」

といいながら、武者に組みついた。

そのうち、吉兵衛が、これも馬をなくしたらしく、徒歩で息を切らしながら駈けてきた。

新右衛門も、歩卒をつれて飛んできた。

やがて、その浅井武者の郎党も主人の急をすくうべく、騎乗を交えて十五、六人が真っ黒になって襲いかかってきた。

死闘になった。

伊右衛門側は、人数がすくない。

伊右衛門は槍をもたない。せっかく奪った馬には手綱もなかった。

短剣をぬいた。口にくわえた。

そのまま馬から躍りあがるようにして飛びおり、浅井方の武者に飛びついた。

「わあっ」

と武者がのけぞったときには、伊右衛門の両刃の鎧通しが、相手ののど輪へ突きとおっていた。

その槍をうばい、跳ねおきて、新右衛門と闘っている男の右脇下を突き、引きぬくや、飛びこんできた敵の郎党のすねを力まかせにかっぱらった。

「殿、おみごと」

吉兵衛がわめいた。その吉兵衛は、伊作がしがみついている敵の物主（将校）の背に抱きつき、槍の口金のあたりを握り、敵の草摺をはねあげてずぶりと突いた。

相手が急によわった。

それまで組み敷かれていた伊作が、腰をはねて相手に馬乗りになった。

「伊作、気をつけろ」

吉兵衛はどなった。

組み打ちではこの瞬間がもっとも危険なのである。下になった相手にはまだ余力がある。武者はこういうときに最後の力をふりしぼるものだ。

「伊作、首をあわてて取るな、兜のまびさしをつかめ」

練達の吉兵衛は、伊作に実地で教えようとしている。

「右足、右足。右足で肩をふみつけろ」

といったとき、敵は伊作がまびさしをつかもうとした手首をねじあげた。



「ぎゃっ」

と伊作は敵の上から崩れおちた。手首の骨を折られたらしい。

こういう手があるのだ。小具足、鎧組といい、戦場の格闘術である。のちに柔術、さらには柔道に発展したもので、こんにちの柔道とはちがう点は、ほとんどが逆手の技術である。

「それみろ」

吉兵衛は躍りかかって組みつき、ようやく相手を仕止めた。

袖印に、名がかかれていた。浅井方の足軽大将の一人で、鬼藤三郎兵衛義兼といい、近国にまでひびいた豪の者である。

「殿、御武運おめでとうござる」

（おれは運がいい）

伊右衛門は雀躍りしたくなるような思いだ。

ところが、本隊であるべき木下隊がどこにいるのかわからない。

おそらく四分五裂してしまったのだろう。

この合戦について「信長公記」の表現を借りると、

「推しつ返しつさんざんに入りみだれ、黒烟立て、鎬を削り、鍔を割り、ここかしこにて思ひ思ひの働きあり」

乱戦そのものであった。

遠藤喜右衛門という、浅井方随一の豪傑はこの乱戦のなかで、

——われこそは信長を討ち取るべし。

と自分の袖印をひきちぎって織田勢にまぎれ、やがて一騎、進襲して信長の面前にまでせまった。

信長の旗本竹中久作（竹中重治の弟）がかろうじてこれを支え、死力をつくして戦い、ついに遠藤の首をあげた。

戦勢依然として織田・徳川連合軍に非だったが、戦闘半ばから信長はそれまで予備隊として手もとにおさえていた稲葉道朝隊を駈けさせて浅井方の右翼をつき、さらに家康は榊原（さかきばら）康政隊を朝倉方の側面に進出させたため、にわかに浅井・朝倉軍は崩れ立った。

戦さはいったん崩れたとなると、どうするすべもない。

浅井・朝倉は当初わずか二ヵ所崩れ立ったにすぎない。

が、崩れは、崩れを呼んでしまう。たちまち、全軍の大潰走がはじまった。

算をみだし、われさきにと遁げてゆく武者の群れは、さきほどまであれだけ手痛く戦ったおなじ浅井・朝倉の強兵か、とおもわれるほどだ。

「殿、追いましょう」

吉兵衛、新右衛門がいった。追いすがって首をかせぐほど、容易なものはない。もっともそういう首は、軍功としては低く評価されるのだが。

「いや、木下殿はどこにいる。木下隊に加わらねば隠れ働きをしたように言われるぞ」



伊右衛門は、薄れゆく朝霧のなかで藤吉郎の姿を懸命にさがした。当時、藤吉郎はまだ信長から馬印（うまじるし）をゆるされておらず、例の金の瓢簞（ひょうたん）に金の切りさきの馬印はこの戦場には出ていない。

「木下殿はいずれに」

「木下殿を見かけなんだか」

と、伊右衛門とその郎党は、必死になってひとに訊ねまわった。

「知らん」

みなは、それぞれ忙しい。

「なに？　木下殿？　おのれの大将を見失うやつがあるものか」

毒づいて駈けてゆくやつもある。

やっと大路という部落のはずれで伊右衛門は木下隊をみつけた。

「おお、伊右衛門か、ご苦労じゃな」

藤吉郎の微笑に余裕がある。本来なら、われア、どこの隊で働いていたか、とどなりつけるところだが、それをいわない。

「あ、追わぬのでござるか」

「伊右衛門、休め」

「追わぬ」

気がついてみると、織田の全軍が停止している。

戦術としてはこのまま敵に追尾して戦勝の利を拡大し、さらに突っこんで浅井の本拠である小

谷城の山麓を包囲し、一挙に城をくつがえすのが常道であろう。

ここでとどまれば戦いは、織田の六分の勝ちにすぎなくなる。

藤吉郎も、信長の本陣へ何度も使番を走らせてそれを進言した。

が、信長は動かなかった。

慎重な男なのだ。

これほど気の短い男が、短兵急の戦さは桶狭間をのぞいてはまったくやらない。

釣り師に似ている。

気のみじかいひとほど、いざ釣り場に糸を垂れればひどく気のながい作業をする。むろん、いい釣り師にかぎることだが。

信長は、それだった。

「小谷の本城を裸かにしてしまう」

と、自軍の武将たちに作戦方針をあきらかにし、小谷城のまわりの支城をつぶしはじめた。

まず、横山城を陥し、これを木下藤吉郎三千の兵に守備せしめ、さらに佐山城に対しては丹羽長秀に包囲させ、そのほか、小谷城のまわりの北の山には市橋長利、南の山には水野信元、西の彦根山には河尻秀隆を置き、それぞれ臨時要塞を築かしめ、信長自身は全軍の論功行賞をおこなったあと、さっさと岐阜へもどってしまった。

伊右衛門は、新知四百石。

依然、藤吉郎のもとにあって横山城を守備し、小谷城攻略の最前線の要塞守備に任じた。



四百石、という加増は大きい。

まだ戦闘中だから知行地もはっきり決まったわけではないが、励みができた。

「吉兵衛、おれは織田家に仕えて幸運だったな」

と伊右衛門は、横山城の西櫓の板敷に寝ころびながらいった。

窓から、琵琶湖が遠望できる。湖岸までわずか三里。

城は丘陵の上にある。西に湖水、東に伊吹山が見え、敵の本拠小谷城までは北西三里あまり、にらみあったかたちである。

信長が本隊を率いて岐阜へ帰っているあいだ、小競りあいは毎日あるが、決戦は日のべのかたちになっている。

六月の日ざしが矢狭間からさしこみ、塗り籠めの櫓の中は蒸れるようにあつい。

「織田様にお仕えあそばしたこと、まことに御運がよろしうございました」

「人間、身を寄せる大将によって生涯の運不運がきまるものだ。ありがたい」

まったくそうである。

戦国期といっても、諸方の新興国家は、関東の北条氏にしろ、中国の毛利氏にしろ、すでに領土拡張の限界に達し、ひたすらに守勢にまわっている。

越後の上杉、甲斐の武田も、武強日本双璧といっても、かれらは互いに牽制しあってはかばかしい領土拡張をしていない。

伸びつつある新勢力としては土佐の長曾我部氏が四国全土を併呑する勢いを示しており、薩摩の島津氏も、あわよくば九州全円に威を張ろうとしている様子だが、しかしなにぶんにも中央から遠すぎる。

近畿を制する者が、天下を制するのだ。尾張にうまれた信長は、そういう地理的好条件にめぐまれていた。

しかも、この異常なほどの膨脹速度はどうしたことであろう。

領土は、月々ふえている。

だからこそ伊右衛門のような者でも、とんとん拍子に禄高がふえてゆくのだ。

「よい士たることの第一は、まず主家をえらぶことでござるよ」

と吉兵衛はいった。

この時代はそうだ。

その前時代の室町時代やさらにそれ以前の鎌倉時代、またこの時代よりあとの徳川期、といった社会の固定した時代では、人間はうまれた環境条件から容易にぬけだせない。

しかし戦国時代はちがう。

主人も有能の士をよりすぐって召しかかえるかわり、士たる者も、主人を選ぶ。

選ぶ自由をもっている。

主人が無能で主家が振わぬとあれば、さっさと退散するのが、この時代である。

主従たがいが、たがいの才能を通じて結びあっている。それ以前やそれ以後のように、忠義、



情義でのみ結びあった関係ではない。

なにしろ、

「七たび牢人せねば一人前の武士ではない」

といわれたほどの時代である。

「よい主家をもった」

という伊右衛門の述懐には、右のような背景があるのだ。

そのかわり、功なき者は捨てられ、才なき者は捨てられる。

「大将とあおぐ木下殿もいい。この人はひょっとすると織田家第一の大将になるのではないか」

もっとも、これは千代の観測の受け売りであった。

伊右衛門の胸は希望にみちている。

信長の姉川の大勝によって、浅井氏が亡びたわけではない。この戦いは元亀元年六月二十八日だが、その後も浅井氏の小谷城は、伊右衛門ら木下藤吉郎隊がこもる横山城のむこうにそびえており、その城が陥ちるまであと数年を要した。

気のながい包囲戦がはじまったのである。

もっとも。

この間、信長は浅井攻めにかかりきっていたわけではない。摂津石山本願寺と戦い、浅井・朝倉の奇襲部隊と琵琶湖畔の坂本城で小ぜりあいをし、その間、この両氏と擬装講和をし、さらに

伊勢長島の一向一揆（いっこういっき）と戦って難戦し、叡山（えいざん）を討ち、とにかく多忙そのものであった。

が、伊右衛門らは、多忙ではない。

横山城に籠ったきりの滞陣なのである。むこう何年つづくかもしれない滞陣のなかに身を置くはめになった。

元亀元年も秋が来、過ぎ、冬になり、さらに翌二年の春になった。

「さてさて信長公とは気のながい大将じゃの」

あきれる思いであった。敵の小谷城は三里むこうの丘の上にある。晴れた日には城門を出入りする人馬まで見えるようである。それを力攻して陥そうとしないのだ。

城将の木下藤吉郎は将士がこの滞陣に倦（あ）いて城中に惰気（だき）が生ずることをおそれ、さまざまな工夫をした。

こちらから仕掛けて小競りあいをしたり、敵の城下の青田を刈ったり、村を焼いたり、戦局に関係のない小戦闘は絶えまなくやっている。

が、いずれも雑兵どもの戦いだ。先方も名ある士は出てこない。

伊右衛門らにとって、武功の樹（た）てどころがないのである。

藤吉郎は、人間というものを知りぬいた男だ。陣中の気分を察し、横山城のふもとの村はずれに、小さな歓楽地をつくり、遊女たちの小屋がけをゆるした。

城中の士は、組ごとに日をきめて出かけてゆく。

が、伊右衛門には縁がない。



「わしは好かぬ」

と、固いことをいっている。

事実、伊右衛門は、遊女というものにかつて触れたことがなかった。

「吉兵衛、新右衛門、お前たちはゆけ」

「殿はお固うござるな」

吉兵衛らには、それが窮屈（きゅうくつ）であった。

だが、かれらはそういう主人に遠慮はしていられない。かまわずにどんどん出かけていっては、あとで遊女の品評などをして興じている。

ことさらに、伊右衛門の前でやる。

あてつけである。

ところが、伊右衛門は知らぬ顔だ。

（かわったおひとだ）

幼少のころから伊右衛門を知りぬいている吉兵衛や新右衛門でさえ、この点だけはふしぎである。

蔭で、

「やはり奥方がこわいのじゃな」

とか、

「いや、ご性分じゃ。しかし、例の京の空也堂の小りん、あれとはあるいはあやしかったかもし

れぬ」

といっているころ、その当の小りんが横山城下にあらわれた。

小りんがこの横山城下にきたのは、すでに諜者としてではない。

そのひとを、と心に念じつつ、わざわざこの戦乱の里まできた。

(山内伊右衛門一豊と言いやったな)

その織田家の武士の、平凡だがどこかに少年じみたういういしさをもっている若者にもう一度会いたいと思ってきたのである。

(べつに面白味のある男ではないけど)

なぜ魅かれるのか、自分でもわからない。

「いいえ、恋じゃないよ」

と、浅井の小谷城にいる従兄の望月六平太にきっぱりいった。

望月六平太、南近江の甲賀では知られた郷士で、いわゆる忍び、忍者、甲賀者、などといわれている役目の男だ。

近江甲賀郷は、足利の隆盛期このかた、南近江の領主六角氏に属していた。六角氏が浅井氏と同盟して対織田戦線に参加している関係上、望月六平太も、その下忍どもをつれて小谷城に籠り、諜報活動をしている。

小りんは望月一族のひとりとして六平太をたすけていた。



読者は、例の空也堂の当時をおもいだしていただきたい。

「叔父が空也僧になっております」

と、あの境内の武者小屋で伊右衛門らにいった「叔父」とは、この従兄の六平太であった。

六平太は事実、空也僧に化けて京に潜入し、織田方の軍勢の動きをさぐっていた。

年は、九つ上。

歯がない。

平素はつげの木と獣骨でつくった義歯をはめている。旅に出るときははずす。はずして空也僧の装束などを着ると、どうみても七十ぐらいの老人にしかみえなかった。

小りんと六平太とは、すでに体で結ばれている。

が、どちらにも愛情があるわけではなく、たがいのごく生理的な必要のために相手を使用しあっているにすぎなかった。

小りんが、三里むこうの敵陣地である横山城の山麓へゆく、といったとき、六平太は、

「無意味だろう」

といった。

すでに戦さははじまっているのである。戦場での甲賀衆の役目は、火付け、野荒しなどであって、女は必要ではない。

「無意味かもしれないけど、ゆく」

と、小りんはいった。

六平太は、くすっと笑った。
「惚れたな」
といったのは、このときである。
「よせ」
退屈そうにいった。嫉妬をしているわけではない。この若者は、いつも空也宗の老行者に化けているせいか、心までが老いこんでいる。
世の中を変に悟ったようなところがあり、覇気、嫉妬、出世欲といった年相応な生ぐささを、わざと萎(な)えしぼませているようなところがある。
「山内伊右衛門とはお前が惚れるほどの男かね。どこに惚れた」
「自分にもわからない」
ひょっとすると、甲賀者のなかに育った小りんには伊右衛門のもっている平凡さが、かえって輝かしいものにみえたのかもしれない。

その小りんが、村の草刈り娘の風体をして横山城の東麓の脇烏(わきがらす)という部落のあたりをうろうろしていた五藤吉兵衛をよびとめた、というわけである。
「なんじゃ、お前は小りんではないか」
「はい」
しおらしくうなだれてみせる。



「そのなりはどうしたことだ。そちはこの在所の者ではあるまい。それどころか、大和の石上村(いそのかみむら)の者で京へ叔父をさがしにきた、と申していたのではないか」
「伊右衛門様にひと目でもお会いしたくて京から参ったのでございます。かかるところゆえ、武者たちに遊女とまちがわれてはならぬと思い、かような風体をととのえました」
「うそはたいがいにせい」
吉兵衛は、不精ひげの中から歯を出してみせ、この男にしては精いっぱいに凄んだ。凄んでみたところで、人のいい顔は、どうにもならない。
「わらア、浅井の諜者ではないか。その変装(つくろい)のうまさ、甲賀育ちであろう」
「ちがう、ちがう」
小りんは涙をいっぱい溜めている。
「ちがうのじゃ、吉兵衛」
「オイサ、呼びすてにしやがる」
「お願い、伊右衛門様に逢わせて」
「ひとを馬鹿にしやがって」
吉兵衛は顔をごしごしこすった。娘からこうすがられると、どうにもできない性分なのである。
「考えてみろ、小りん、お前のようなシッポのはえた娘をあるじに手引きできるとおもうか」
「シッポなどはえていません」

小りんは、両手をうしろへまわして、自分のおしりをなでた。

「やっぱりはえていないわ」

「諜者臭（くせ）え、というのよ」

「あのね、吉兵衛さん。私がもし諜者だとして、まあ考えてみてください。伊右衛門様のような低いお侍に諜者が近づいてなんの役にたつとお思いです」

「ひらき直りやがった」

「だってそうでしょう」

小りんは両手でお尻をおさえたまま、吉兵衛の顔をのぞきこんだ。

「そう。言っちゃおうか。吉兵衛さん、あなた様にすれば上出来でした。この小りんはたしかにこの国の甲賀郷のうまれで、父は近江六角様に仕え、従兄は近江浅井様に仕えています。でも、父は討死し、六角様も亡んだも同然でございますし、いまはわたくしは従兄の六平太と小谷のお城におりますけど、べつに浅井様にそれほどの義理もございません。もう諜者なんぞやめています。行くところがないから、小谷のお城に籠っているのです」

「おどろいたことを言いやがるなあ。小りん、さすればお前、あの京の空也堂では、諜者として飛びこんで来やがったか」

「あたり前」

「へっ、当り前だと？」

「そうでしょう？　あのころの私のお役目だったのですもの。吉兵衛さんでもお役目ならそうす



るでしょう？」

「それもそうだが」

「ほら、ごらんなさい。だけど私はもう諜者などやめていますから、そうおそろしがらないで」

「おそろしがってはおらん」

「じゃ、お引きして」

小りんは吉兵衛の両手をにぎった。

小さな、可愛い手である。

五藤吉兵衛は、あまい。

小りんの掌（てのひら）のやわらかさ、骨の細さ、肉付の可愛さに、すっかり好意をもってしまった。

「お前は、悪い人間じゃないな」

といった。

人にはそんなことがままあるものらしい。いやな男だと思っていても、その男が耳たぶに真っ赤な霜焼けを作っていたりすると、

（案外、いい男なのかもしれないな）

と、ついおもってしまう。人間というのはいつも、同類の人間という生物に、敵意、嫉妬、冷酷、憎悪を感じていながら、おなじ心の裏側で（表側かもしれないが）同類の人間のどこか一ヵ所でも心の通いあう場所をみつけて、その一ヵ所だけでも愛そうという心の働きをもっているもの

のようだ。

「お前は悪い人間じゃないな」

と吉兵衛がいったのは、その程度の意味である。

「しかし、乱世とはいえ、かわった娘だ。お前も甲賀郷へ帰れば歴とした地侍のむすめだろう」

「それがね」

甲賀郷は、分家が新宅をつくり、新宅が隠居を作りなどして、地所が細分化し、地侍とは名目だけでほとんど食えない者が多い。

自然、ここで諜報技術が発達し、その技術を売って生きている者が多くなっている。

ただ、山つづきの隣国伊賀の忍びたちとちがう点は、甲賀衆は郷党の団結がつよく、既成権力に素直なところである。

六角氏が近江の守護であったころはよく仕えて忠実であり、浅井氏が戦国大名として勃興すると、これにまた忠実であった。

しかし織田信長の近江侵略がはじまってから、甲賀も平和な山郷ではなくなった。まあそういう事情はどうでもいい。

「要するに、甲賀郷に帰っても、父や伯父などが討死しているので、食べてゆけないのです。しかたなくて、小谷城に籠っています。お城の中なら、矢はぎの仕事もあるし、具足のつくろいもするし、なにかしら、食べてゆけるもの」

「そうかねえ」



相手が名だたる甲賀忍者の筋目だから、吉兵衛も、そんな話は頭から信用していない。

しかし、情は移った。

「ここで待っておれ」

吉兵衛は駈けだした。

やがて城中の持場にもどると、伊右衛門にその旨を伝えたのである。

「えっ、小りんが？」

顔が、蒼ざめた。

が、懐しさもある。この懐しさは、愛慕に似ている。

(千代とはちがった女だった)

「会わぬ」

「いや、こわがりなさるようなおなごではござらぬよ。よくよくみれば、あの雨の夜とおなじただの小娘じゃ」

「そうか」

動揺している。

「念のため新右衛門とそれがしがお供をして参りましょうか。しかし殿も男のはずじゃ。おなごと逢うのに、付き添いは要りますまい」

「ふむ」

あの夜の小りんの体が思いだされた。

伊右衛門は、城を出た。

魅かれている。

伊右衛門は山をくだり、櫟の林のなかの一すじ道を歩きはじめた。

樹は、くぬぎだけではない。

栗、樫、楢などがまじり、そのなかでもくすの木がひときわ、こずえを落日に焼けた天にそびえさせている。

幹に、蔦がからんでいた。

背で、かさり、と音がした。

（たしか吉兵衛は、このくすの木のあたりだといったが）

（小りんか）

と思ってふりむくと、白い空也頭巾をかぶった旅の空也僧が立っている。

老人であった。とはうそで、ありようは甲賀者の望月六平太なのだが、むろん伊右衛門は知るよしもない。

「御坊、このあたりでおなごを見かけなんだか」

「ふむ？」

六平太は、あごをあげた。

「女とは、おのれの女か」



「見かけなんだか、とだけきいている。余計なことをきかずともよい」

「言うのう」

六平太の空也僧は、朽ちた切り株に腰をおろした。余計なことを訊ねてみたのは、おぬしの人相が気になるからじゃ」

「人相？」

伊右衛門は、いやな坊主に出あった、とおもった。そういわれてみれば振り切って行ってしまうわけにはいかないではないか。

「わしの人相に何が出ている」

「死相が出ている」

「あっはは、その手には乗らぬ。人をたぶらかして銭をとろうという売僧であろう。戦場にいる武士に死相があるというのは、むしろ誉れなことだ。ひとの運命などを、おのれのような死にぞこないの老いぼれにわかるものか」

「わかる」

「では、ほかのこともあててみい」

「おぬしが探している女の名は、小りん」

えっ、と伊右衛門は棒立ちになった。

「おぬしは、織田家の家来、この横山城をあずかる木下藤吉郎の手に属し、うまれは尾張、姓は

山内、通称は伊右衛門、名は一豊」

「こいつ」

伊右衛門は、父祖重代の美濃千住院の一刀を引きぬくや、空也僧に打ちかかった。

からっ

と空也僧は棒ではずし、

「その腕ではむりだ」

と数歩さがって棒をかまえた。ここで伊右衛門を撲殺する気で来ている。

「おのれは何者じゃ」

と伊右衛門はわめいた。

六平太は棒の先を沈め、やがて草の上を走らせて伊右衛門の下腹部を突いてきた。

あやうくかわし、伊右衛門は刀をふりあげざま、棒をたたいた。

ひらっ、と六平太は右へ跳び、とびおりると同時に棒を逆手にもって空中に一回転させ、

「くわっ」

と、奇声をあげて撃ちこんできた。

まともにあたれば、伊右衛門の頭蓋骨はこっぱみじんに砕けたろう。

が、そこは戦場で、槍、太刀打ちに馴れた伊右衛門である。

横へすっとんで、素っとびざま、樫の若木を斬った。

木が倒れ、六平太の足をさえぎった。



伊右衛門という男は、決して英雄でもなく豪傑でもないが、ただ切所において玲瓏とした心境のひろがってくる妙な男だ。

風が出た。

草がそよいでいる。

そのむこうに六平太の棒がせまっていた。あと一跳躍で、伊右衛門の脳天が砕かれるだろう。

(来た)

と伊右衛門が思ったのは、相手の六平太ではない。

自分のその心境が、である。来た、と思ったとき、いつも戦場で経験するように、体が、浮くような思いがした。ついで肉体への意識がなくなる。

越前の首坂で体験したあの心境が、伊右衛門を訪れた。

あとに残るのは、功名の意識しかない。

ついには、それさえ消える。消えたあと虚空に残るのは、烈風のような伊右衛門の太刀だけである。

(おや。——)

と、甲賀郷士の望月六平太はひるんだ。

(これほどの男だったか)

六平太は、容易に動けない。

もともと甲賀郷士というのは、幼少のころから、火付け、偸盗(ぬすみ)、城入り、変装、毒殺、それに投石術、手裏剣(しゅりけん)、刀術、といった間道の術や個人的格闘の訓練に長じている。武家社会から卑しめられているのは、そういう陰質のはたらきによる。

が、山内伊右衛門一豊は、武家社会における正統の武士である。

騎馬戦をやり、歩卒を指揮し、立身すれば大軍を進退させる技倆(ぎりょう)の世界に生きている。

どちらも、軽蔑しあっていた。

(たかが忍びめ)

と伊右衛門は思うし、六平太も、

(戦場ならばいざ知らず、平装の一対一なら、この連中がおれたちにかなうはずがない)

自分の技術に自信をもっていた。

ところが、その六平太が、

(油断ならぬ)

と思ったのは、相手の心境である。たかが功名餓鬼(こうみょうがき)かと思えば、どうやらそうでもなさそうであった。

伊右衛門の姿から、人間の形が消え、えんえんと白炎があがっているように思える。この白炎が、幾多の戦場において、この平凡な伊右衛門に思わぬ功名をなさしめてきたものだ。

「こいつ」

と、六平太の棒が天空から落ちてきた。



伊右衛門、受けようともしない。

受ける姿勢をとれば六平太の方でちゃんと次の計算ができていたのだが、驚いたことに伊右衛門はそのまま弾丸のようになって六平太にとびこんできた。

太刀ごと。

いや、太刀だけが生きもののようにすさまじく。

「あっ」

と、六平太が棒をひいた。

構えが崩れた。

伊右衛門の刺突を、髪一すじの差であやうく避けた。

「よそう」

六平太が、十間も飛びさがって叫んだ。

「おぬし、織田家の侍ながら、わしは見こんだ。いつか、会いにゆく。とりあえず、わしの女を呉れてやろう」

六平太は草むらから小りんをつかみだし、投げるように突きとばした。

縛られている。

口に、布を噛まされていた。

六平太が去り、草の上に小りんが残った。

「……」
伊右衛門は、たったいま起こった事態のあまりな異常さに、ぼう然としている。
甲賀、伊賀の者は、伝説や人のうわさほどの変幻の術をもっているわけではないが、武士として種族がちがうために、その道徳が理解できない。
理解のできぬ集団ほど、ぶきみなものはない。筋目のある伊右衛門のような武士が、近づくべき相手ではないのだ。
「……」
と、小りんは草むらの上で、身もだえた。
黒い眼が訴えている。
「伊右衛門様。何をしていらっしゃいます。なぜ早う、この縄目を解いて下さいませぬ」
といっている。
「ああ」
伊右衛門は、気味わるそうにこの甲賀うまれの娘をみた。
（もう、この種族とは関係りたくない）
そんな気持である。しかし縛られて倒れている小りんは、なんと蠱惑的な生きものであろう。
伊右衛門は、小りんのそばにしゃがみ、脇差をぬいた。
縄を切った。
雑木林に、暮色が包みはじめている。



小りんは、自由になった。
が、動かない。草むらの上に腰をくびらせて横ざまに倒れたままである。
伊右衛門は心配になってのぞきこんだ。
「どうした。動けないのか」
「動かせて」
小りんは、眼だけで笑っている。このまま抱け、というのであろう。
（なんという娘だ）
常軌というものがない。並な社会の女の常軌が、この娘にはないのだ。
眼が、伊右衛門を凝視めている。
歯が、すこし、笑った。皓い。その暮色の中の皓さが伊右衛門の常軌を狂わせた。
この甲賀生れの娘には、そういう力が備わっている、男の常軌を狂わせる力が。
小りんの裾をかきわけた。
「だめ」
と、小りんはいった。
暮色がいよいよ濃い。伊右衛門は、この娘の細い腰を抱きすくめた。この天地に、この娘の血の温度だけが存在している。
伊右衛門は、悩乱した。
「だめよ」

小りんは、低い湿った声でもがく。もがけばもがくほど、伊右衛門がどう狂ってゆくか、小りんは天性、わかっているようであった。

ついに、闇がきた。

天に、細い月がかかっている。

一刻ばかり、この闇のなかで、伊右衛門は自分が所属しているすべての社会をわすれ、ただの男になった。女としては巧緻すぎるほどに神が造った小りんの体を相手に、ただ夢中で体液にまみれあった。

気づいたときは、くすの木の上にいた月が、もう栗の葉のむこうにきらめいている。

「うれしかった」

と、小りんが、虚脱して倒れている伊右衛門の耳もとでささやいた。

「わたくし、伊右衛門さまをつれて、この戦場から逃げてゆきたい」

「逃げる？」

ときいて、伊右衛門は、われにかえった。

この男の、輝かしい本性である。

功名餓鬼の俗物に。——

「おれを連れてこの戦場から逃げる、というのか」

「私が食べさせてあげます。それともいっそ、織田家などのような歴とした家にいるよりも、伊



右衛門さまほどの武勇と才覚があれば、このあたりのあぶれ者をあつめて野伏の棟梁になれます。合戦がおわれば出てきて野を掠め、死人の具足を剝いだり、槍や刀を盗んだり、ときにはいずれかの大将に傭われて、火付け、野荒しをしたり、陣借りをして戦さの手伝いをしたり」

「野ぶせりか」

「野武士よ」

「おなじことだ。おれは織田家の歴とした家中だから左様なものにはならぬ」

「気楽」

と、小りんはいった。

「おなじ世を渡るにしても、たれにも頭をさげず、気随気儘に暮らせて、寝たいときには寝、腹がたつときには遠慮なく怒鳴り、しかもお金が入ってくる。あの六平太も、浅井の小谷城が陥ちれば野武士の棟梁になるのだ、といっています」

「おれはいやだ」

「ホホ、その世界の味を知らないからよ。いってみればあたしの体と同ンなじ味」

伊右衛門の首に腕を巻きつけてきた。その唇が、伊右衛門の唾液を待っている。

ごくり、と伊右衛門ののど仏が上下し、固唾をのんだ。

「あのね、甲賀も伊賀も土地がすくないからみなそんな仕事をして暮らしている。そのほうが、お城下で肩衣を着て歩いているよりずっと気楽です。いま、見たわ」

「何を」

伊右衛門は、さそいこまれるようにたずねた。小りんは伊右衛門のあごに、肉のやわらかな指をあてて、

「六平太との打ち合いを。――望月六平太というのは、棒術では甲賀きっての妙手なのです。あの男の棒は、六尺のすべてが刃だといわれているほどのもので、打ちあって殺されなかった者はありません。それを伊右衛門さまはいなされたばかりか、六平太のほうが危うかった。だから、出来ます。近江でも一番大きな野武士の組が」

「世の中から、踏みはずすことになる」

「あたりまえ」

小りんは笑った。

「だから気楽だ、といったのではありませんか。踏みはずしてはじめて、人間らしい暮らしができる。ね、わたくしは、野武士の棟梁の妻」

「……」

「情婦（おもいもの）でもいいわ。伊右衛門さまさえ野武士になってくれれば、わたくしは一生おそばを離れずに済む」

「言っておくが」

伊右衛門は、夜空を見た。

「おれは強いのではない。天運がついているのだ。天運がおれをまもっている。千代がそう申していた」



「千代」

小りんは起きあがった。

「伊右衛門様の奥様の名ですね。こういうときにそんな名を出すものではないわ。二度といったら、千代とやらという女を、小りんが刺します」

甲賀者の心情とは、得体（えたい）の知れぬものだ。

ある日、伊右衛門が城籠りのつれづれに馬をひきだし、遠乗りをした。

木下隊の籠る横山城の北西二里、東西三里、南は数里にわたって占領警戒地だから、自由に歩きまわれるのである。

姉川の北岸、宮部という部落がある。叡山最後の僧兵のあがりといっていい宮部善祥房の出身地である。宮部はこのころに木下藤吉郎に随身し、のち大名になった。――これは余談。

その宮部の部落の街道わきに茶店があったのを幸い、松の木に馬をつなぎ、

「湯漬けが所望じゃ」

と、よしずの蔭に入った。

腰をおろすと、横に若い薬売りがいる。色の白さ、京者らしい。

それが笑いかけてきて、

「ここに見えられると思うて、あとをつけ、先まわりした。先夜は、どうも」

と馴れなれしく言う。

「汝は何者じゃ」

「わからぬか、望月六平太よ」

といったから、伊右衛門は一瞬顔から血がひき、やがて真っ赤になった。あのときの老いた空也僧とは、打ってかわった若者である。

「また、闘る気か」

と、伊右衛門は腰をあげた。

「いやいや、やらぬ。あのとき、わしはいつかおぬしを訪ねてゆくと約束した。おぬしが気に入ったからだ。それに、小りんの体を通じて、互いに他人ではない」

さらりと言う。

「ところで、話がある。湯漬けを食ったら、裏の桑畑まで顔を貸してくれんか。いやいやわるい話ではない。おぬしがよろこぶことだ」

湯漬けが出た。

伊右衛門は、のどに通らない。それを無理に流しこんで、箸をおいた。

薬屋が、先に立った。

やがて桑畑の中に入りこむと、身をかがめた。伊右衛門にも、しゃがめ、という。

「話を手短くいおう。伊右衛門、心ゆるした友垣の言葉としてきいてくれ」

六平太は、手拭で汗をふいた。手拭の中に、毒針を含めてある。伊右衛門が斬りかかれば、それで斃す用意だ。



「小谷の城も、早晩、しまいさ。しかし攻めようによっては、天下の浅井だ。容易に陥ちまい。陥す法は一つしかない」

「………？」

「内応さ」

と、甲賀者はいった。

「城内にはわれわれ甲賀組が五十人いる。日をきめて城に火をかけ、同時に織田方が、大手、搦手から攻めかかれば、落城うたがいない。どうだ、おぬしが、諾、といえばわしはやる。落城に工作したとなればおぬしの大手柄になり、二千石はまちがいないぞ」

「六平太」

と伊右衛門はこの怪物を見た。その節義のなさ、やはり武士のそれではない。世間で卑しむ忍びにしかすぎぬ。

「その代償に何がほしいのだ」

「おぬしの魂がほしいのさ」

「魂？」

「おれに売らぬか、浅井の小谷城との引きかえに――」

「魂を売る？」

世間で聴いたこともない。魂というのは売り物になるのか。

「売れよ」

と、薬屋の望月六平太はいった。

「いい買い値ではないか。浅井の本拠小谷城一つがその代償だ。いわば近江浅井家三十九万石で、伊右衛門の魂を買う」

甲賀者にはかなわない。自分が仕えている城を焼くから、それで——。

と商い(あきな)を持ちかけている。

「魂を売ればどうなるのだ」

伊右衛門は、悪魔と相談しているような気持になり、手がこきざみに慄(ふる)えている。

「いや、簡単なことだ。われわれ甲賀衆は落城とともに立ちのく。じつをいえば次の仕事が待っている。おぬしも知ってのとおり、中国の毛利が大坂の本願寺と同盟して、織田家の勢力を摂津(いまの大阪府・兵庫県の一部)で食いとめる防衛戦を準備している。わしら小谷城の甲賀者は、こんど毛利に傭われることになったのさ」

「ふむ?」

「伊右衛門。船火事の前には、船ねずみの群れは船から海へとびこんで消えてしまうという話をきいたことがあるか」

「ある」

「われら甲賀者も、船ねずみよ。浅井家の譜代でもないのに城とともに焼かれてはかなわぬ。そこで、毛利へゆく」



伊右衛門は、ぼう然ときいている。

「毛利へ行っても織田が敵だ。だから、おぬし、わしがときどき会いにくるから、織田方の機密、軍略、うわさ、鉄砲の数、部将どものあいだの仲のよさ悪さ、すべてを教えてくれぬか。たとえば木下藤吉郎と明智光秀は仲がよろしくない。柴田勝家と丹羽長秀はどうか、などということさ」

「……」

「わしとそういう関係を結んでくれれば、小谷城はあすにでもおぬしの手柄によって陥してみせる。二千石ものだぞ」

「魂を売れ、とはそのことか」

伊右衛門は、やっと口をきいた。のどがからからになっている。

「どうだ」

「六平太、こんどはわしの」

と、伊右衛門はすこしどもった。

「いうことを聴いてくれるか」

「聴くとも」

「わしは、おぬしが見ぬいたとおり、功名の餓鬼かも知れぬ。おぬしはわしのそういう弱味に乗じてこの話をもってきたのであろう」

「まあそうだな」

六平太は桑の葉をむしった。口に入れ、ぐちゃぐちゃと嚙みはじめた。
「いいか、甲賀者は口が固い。おぬしが今後織田家の機密を洩らしている、というようなことは、おぬしの生涯ひとには知れぬ」
「しかし六平太、おれの話の続きだが、たしかにおれは功名をたてたい、立身はしたい。したいが、まあ、あれだな、……つまりよく出来たことに小心な男だ」
「――？」
「そんな芸当はできぬさ。ことわる。おれは真昼間の太陽の下で功名をたてる。そういう男でないと立身できぬ、とおれの女房殿がいうた」
「女房殿？」
六平太には、意外な発言だったらしい。
「とにかくことわる。しかし六平太、このこと、金輪際（こんりんざい）、他言せぬ。ここで別れよう」



# 唐国千石

いや、小谷城の浅井方もよく戦う。
木下藤吉郎の横山城からわずか三里余のむこうに小谷城があるのに、まだ陥ちない。姉川の決戦から足掛け四年目の天正元年になっても、この、
三里
は、地の果てよりも遠い。
小谷城は、依然として湖東の丘陵にそびえているのである。
「浅井の近江侍は強い」
とほとほと感心したのは、当の横山城をあずかる木下藤吉郎であった。藤吉郎がのちに近江侍を積極的に採用したのはほかにも理由があるが、このときの感心がものをいっている。
余談だが――。
のちの豊臣家の大名のなかで、近江出身の者が非常に多かった。まず石田三成がその著名なる

ものの筆頭であろう。長束正家、増田長盛、藤堂高虎、宮部善祥房、田中吉政、木村勝正、大野治長、など、あげてゆくときりがない。

もっともこれらの連中に共通しているのは、いずれも謀将型でなければ吏僚型である。猛将という型が少ない。

浅井・朝倉連合軍の小谷城防衛戦も実をいうと、籠城戦士が勇猛だったということ以外に、近江武士の外交のたくみさということがあずかって大きな力になっている。

敵の織田方を奔命に疲れさせるために、足利将軍義昭を仲介に講和をもちかけたり、叡山の僧兵団、南近江の六角承禎（佐々木義賢）、大坂石山本願寺、甲斐の武田信玄、河内の三好氏などと巧みに連絡をとって各地で戦さを起こさせ、織田軍に兵力分散をさせ、小谷城一城にかかりきっていられないようにした。

じつに小谷城の浅井久政・長政父子は、天下を動かす外交をやっている。織田信長の軍団は、このため四方八方で戦っていた。

それでも、信長はときどき思いだしたように大軍をひきいて、年に一度ぐらいは小谷攻めにやってくる。

元亀二年八月

元亀三年七月

いずれも夏である。火の出るように攻めるのだが小谷城はびくともせず、

――まだだめか。



と思うと、信長はさっと大軍を退き、あとはあいかわらず横山城の木下藤吉郎にまかせておく。そんなやり方である。

信長は病歯を抜く歯科医に似ている。無理をして抜こうとはせず、神経を腐らせ、痛みを去り、ときどき鉗子で抜こうとして、

――まだむりか。

とみると、痛みどめの頓服でおさえてまた時期をまつ。その痛みどめの役目が、横山城の木下守備隊であった。

横山城から小谷城まで三里。

このわずかな距離のあいだで死んだ武者、雑兵は、敵味方あわせて何千という数であろう。当時、この持久戦で、両軍の若侍がたがいに歌合戦をやった。

横山城の木下隊が、

　浅井の城は小さい城や、
　ああ善い茶の子、
　朝茶の子

と歌いながら踊ると、浅井方でも負けず、

　浅井が城を茶の子と仰言る、
　赤飯、茶の子、強い茶の子

とやりかえして踊り、さらに浅井方は、

信長殿は橋の下の土亀（どがめ）
ヒョッと出てひっこみ、
ヒョッと出てひっこみ、
も一度出たら首を取ろ

といった。この唄は、ほんの最近まで滋賀県（近江）北部の草刈り唄になって残っていたという。

伊右衛門は、この足掛け四年の持久戦のあいだに、いくつかの武功をたてた。

ずっと、岐阜の家には帰っていない。千代からはたびたび手紙がきた。

千代は手紙がじょうずである。

「あっはは」

と、伊右衛門が美濃紙を見てひとり笑いしているときは、たいてい、千代からの手紙を読んでいるときである。

「吉兵衛、新右衛門らもこれを読め」

と見せてやる。

新右衛門は大笑いをするが、吉兵衛は笑わない。見ているだけである。

文字が読めないのだ。このころの武士で文字が読める、というのはわりあいすくない。

新右衛門が朗読してやると、はじめて吉兵衛が大口をあけて笑う。

千代の手紙には、さしたる用件は書いておらず、いわゆる描写主義である。説明主義ではない。



たとえば、いつもツクバイのそばに雀が三羽来るが、ある日、千代は米粒をツクバイの上に置いてやった。

すると四羽きた。

四羽目の雀は、顔が吉兵衛どのに似ていた。それが大変なあわて者で、米粒をついばもうとしてあわててストンところんでしまった。

雀がころぶはずがない。

「いや、本当なのです。千代がたしかに見たのですから。そのおかしいかっこうったら」

と千代が大真面目で、自分で自分の笑いをこらえているような文体で書きおくってくる。

吉兵衛、新右衛門の妻たち、それぞれの子どもらの言動も、千代の筆を通して伝えてくる。

みな元気いっぱいに暮らしている様子が、眼でみる以上にわかるのだ。

千代は、新参の郎党たちの里まで訪ね、里の様子を書き送ってくる。これも人の動きが活写されていて、じつに楽しい。

伊右衛門の家来たちは、みな千代の手紙を待ちかねるようになっていた。

（おもしろいおなごだ）

遠く戦陣にいて、伊右衛門は千代という自分の妻のあたらしい面を見たような思いがしている。

が、千代には千代のこんたんがある。

この手紙で、夫の伊右衛門の家来を結束させ、団結させ、手足になって働いてくれることを期待しているのだ。が、手紙の文面は、そういう意図がまったく感じられないほどにみなを楽しま

せてくれる。

「これは伊右衛門様にだけ」

という手紙もある。

夫婦の閨房の想い出などをちらりと書き、思わず伊右衛門をして千代の肉体を、その匂いまで眼の前で感じさせてしまうような書き方をしている。

恋しい、とか、夢の中でお逢いしている、とか、そんなことを書いているくせに、

帰ってきてほしい。

とは、いつも書いていない。ときどき岐阜へ所用に帰る籠城の士卒があるのだが、伊右衛門には、帰休させてもらえ、とは決して書かない。

むしろ、

「ご運というものは、えてして時はずれに来るものでございますから、お城をお空けあそばしませぬように」

などと、書いている。

ところが元亀二年十二月の押しつまったころ、急に木下藤吉郎が、伊右衛門をよんだ。

隊長木下藤吉郎は、

「急に岐阜からお召しがあり、一両日、城をあけてわしは帰る。ついて来ぬか」

といったのだ。



(あっ、千代の顔が見られる)

伊右衛門は、思わず腰を浮きたたせたほどによろこんだが、ふと、千代の手紙をおもいだした。

——御運は、時を見さだめずに来るものでございます。岐阜に帰ろうなどとは思わず、片時もお持ち場をお離れ遊ばしますな。

ということだ。

伊右衛門は、千代の言葉に信仰をもっている。ひょっとすると、藤吉郎について行ったあとに何かがあるのではないか、と思い、

「折角ながら」

と、藤吉郎にいった。

「殿の留守を狙って敵が押しよせるでありましょう。武士の宝は、敵陣にござる。それを見捨てて、岐阜には帰れませぬ」

「伊右衛門。功名、功名もよいが、すこしゆとりを持ったらどうだ」

と、藤吉郎はいやな顔をした。折角のこちらの好意を、と興醒めてしまったのである。

(この男の女房のほうが、はるかに、人としての肉づきが豊かだ)

と、藤吉郎は藤吉郎で、千代の顔を思いうかべている。

(よい女房だな)

つくづくと思うのだ。あの千代の夫なればこそ伊右衛門を眼にかけてやっているのではないか。

「まあ、勝手にせい」

藤吉郎は、押しつまった二十九日に、軽騎五十人をつれて岐阜へ去った。

果然——。

といっていい。

年があけた元亀三年の元旦、にわかに浅井方が大軍を催して横山城をとりかこんだのである。浅井方としてはひさしぶりの反撃であった。

横山城の留守隊長は、竹中半兵衛重治である。

半兵衛は美濃国菩提一万石の小領主の家の惣領で、早くから信長に属していた。信長は、横山城の守備を木下藤吉郎に命ずるときに、その参謀長格として、この竹中半兵衛をつけたのである。

「智謀、神のごとし」

といわれた人物である。

白皙、痩身、無口で、おなじ美濃出身の明智光秀とおなじように、この当時めずらしい読書人である。ただ病弱で、たちのわるい咳をときどきする。

そのせいか、城中にいるときには平服を着、重い具足をつけなかった。

戦場に出るときは、癇のつよくない馬に静かに乗っている。「虎御前」という刀を太刀佩きに佩き、具足は、馬皮の裏皮を粒うるしであらあらしく塗りたてたものを着け、カブトは一ノ谷の立物、それにたれよりも風変りなのは陣羽織を用いず、黒餅の定紋のついた木綿の胴服をながながと打ち羽織っていることであった。虚弱なために風邪をひくまいというつもりなのであろう。



この姿で、馬上ゆらりと戦場に立つと全軍が粛然とした。

「半兵衛、雷電、左右に落つるとも動ぜず」

といわれる。

その生涯の最後は三十六歳。みずからの手で敵を斬首捕虜にした戦功は一度もないが、大軍の駈け引きには竹中半兵衛ほどの名人は、当時なかった。

その半兵衛が、伊右衛門らの隊長代理となった。

伊右衛門は、この静かな竹中半兵衛という男が大好きであった。

この夜、夜半、横山城のまわりが、にわかに松明の火の海のようになった。

「すわ、敵ぞ」

と、城内を駈けまわる者が多い。藤吉郎留守中の敵襲である。狼狽するのもむりはなかった。

伊右衛門は自分の持ち場の櫓の窓から城外の敵の火を見、さすがに体がふるえた。

「吉兵衛、この人数のおびただしさ、どうみても敵の総大将浅井長政がみずから率いているものと思える」

「殿、城をうって出ましょう。このさい、われらの手で敵将の首を獲るのじゃ」

吉兵衛は戦さが好きだ。りんりんとした声で、伊右衛門をはげました。

（なるほど、長政の首か）

そこまで気づかなかった。千代がいつもいっているとおり、人は最大の目標に直進すべきもの

だ。小事に眼をくれてはならない。
「されば抜け駈けをするかっ」
と眼を吊りあげた。
悲壮な決意だ。この雲霞の大軍に伊右衛門主従だけで突き入ろうというのだ。
「みな来い」
どどどっと櫓から駈けおり、まっしぐらに大手門へむかって走った。
――第一、大手門が開いているかどうか。
そんなことも念頭にない。
すると大手門の内側に十個ばかりのカガリ火をたかせ、その中央で、しんと静まっている人の群れがある。
中央にいるのは、竹中半兵衛重治である。床几に腰をおろし、具足の上に例の裾長の胴服をゆらりと羽織っている。
「おお、先着は、山内殿か」
と、半兵衛ほどの人物が、山内伊右衛門の名前を覚えていてくれた。
「山内伊右衛門一豊でござりまする」
「存じあげている」
半兵衛は、くすっと笑い、
「ときどき、御内儀からおもしろいお手紙を頂戴している」



「えっ」
千代は、半兵衛にまで出しているのか。
「雀が、ころがったそうですな」
「これはまた」
伊右衛門は、恐縮した。そんなことまで書きおくっているとは、どういうことだ。
「山内殿、夜明けを待って大手門をひらく。全軍突出する。しかし退き鉦とともに退く。その進退をお誤りあるな」
半兵衛はいかにも好意的である。千代の手紙で、伊右衛門を他人のようには思えぬのであろう。
「わかりましたか」
「はっ」
伊右衛門はいったが、半兵衛はにこにこして、
「一番槍をおつけなさい。この門の内側にぴたりと体をつけておいて」
「はっ、これは」
伊右衛門主従は、門のそばまで駈けた。
やがて城内の武者という武者は大手門の内側にぞくぞくとあつまってきた。
天明――。
開門と同時に半兵衛は、城内の鉄砲足軽の全員を突出させて、敵に一斉射撃をあびせ、次に弓組を出し、さらに鉄砲組を出し、四段目で武者たちの一斉突撃を命じた。

伊右衛門は、先頭を駈けている。

(敵は総大将長政ぞ)

伊右衛門はカブトを伏せて駈けた。

ぴいっ

ぴいっ

と、弾丸が左右をかすめて飛ぶ。

敵の鉄砲組が、竹束のタテのすきまから、そのあたりが硝煙で真白になるほどに撃ちまくってくるのである。

味方がばたばたと斃れた。

(武運――)

自分の運を信ずるほかない。

敵の弓組が前進してきた。

こんどは、矢が、ぶすぶすと地面に突きささった。

伊右衛門はついに敵の足軽隊に突入し、雑兵にはかまわず、さらに駈けた。

左右をまもるように二騎、吉兵衛と新右衛門が駈けている。

最初の敵が、馬をあおって伊右衛門の前にあらわれた。

「織田 弾正忠の家来山内伊右衛門一豊」



と、伊右衛門が名乗りをあげると、敵は、

「草野河内守義仲」

といいながら、悠々手綱をさばきつつ馬を輪乗りにうたせている。

輪乗りというのは、騎馬戦において、馬を出来るだけ小さく前後左右に輪をえがきつつ運動させることで、なかなか技術が要る。

源平のむかし、平家武者にこれが出来る者がすくなく、坂東武者にはぜんぶこの心得があり、とくに熊谷次郎直実はこの名手であった。平家の敗北の一つは、騎馬戦において坂東武者の輪乗りの技術に負けたといえるだろう。

(ほう、みごとな敵じゃな)

見事すぎる。

六尺ちかい大兵の男で、馬も寿星のたくましいものに乗り、金色さん然たる鯛の前立打ったカブトをかぶり、黒具足に白い陣羽織を羽織っている。

どうみても、万石取りの侍大将で、その前後に多数の騎士が群れている。

(これは近づけぬ)

と思ったとき、城壁の上で総指揮官竹中半兵衛重治が打たせる攻め太鼓が、にわかに急調子になってきた。

音に節度があり、みごとな太鼓である。

織田方は少数ながら、どっと押してきて、伊右衛門のまわりに味方の騎馬がふえ、やがて乱戦

となった。

「長政がだめならせめて草野河内守を」

と、伊右衛門は馬を駈けさせた。

が、敵の人数は多い。織田方は伊右衛門をふくめてしだいに押され気味になった。

じつに浅井武者というのは強い。

ばたばたと織田方は討たれてゆく。

そのとき、背後にあたって、半兵衛の鳴らす退き鉦がひびきわたった。

伊右衛門らは、逸散に城門へ逃げ帰った。

ついで半兵衛は、追ってきた敵に対し、すかさず鉄砲足軽を推進させて斉射させ、さらに弓組と交替し、ついで鉄砲組を推進、といったぐあいにすきまもなく射ち、その斉射の硝煙の消えぬうちに、

——騎兵突撃。

を意味する攻め太鼓が鳴った。

が、敵はなんといっても大軍である。まるで厚板の壁を赤手（せきしゅ）で撃つようで、びくともしない。

大軍に戦法なし、という諺（ことわざ）がある。

浅井方は、圧倒的な多数だから、ただひた押しに押してくればいい。

事実、その押しで、織田方の名ある武者がつぎつぎに討たれてゆく。



謀才神のごとしといわれた織田方指揮官竹中半兵衛もさすがに、手がでないといったかっこうだった。

が、半兵衛は動じない。

「これでいいのだ」

と微笑しながら、一見、むなしくみえるような防禦戦をくりかえしては、損害を重ねている。

伊右衛門はついに半兵衛の床几まで進み出、進言した。

「竹中殿、お耳を汚すようなれど、われらがごとき弱輩の意見でもお聞きくださりましょうか」

「えっ」

半兵衛は、松のこずえを見ていた。

考えごとをしていたようである。われにかえったように、

「どうぞ」

と、微笑した。

「山内伊右衛門殿でありましたな。朝からのお働き、よく見とどけております。おみごとな武者ぶりでござった」

「ところで」

伊右衛門はいった。

「かように、城門をひらいては兵を突出させ退いては門を閉じ、さらに開門突撃、といったぐあいに繰りかえしてもなにぶん敵は大軍でござれば、百戦功がござりませぬ。されば御大将木下藤

吉郎様が手勢をひきいて御帰城に相成るまで、サザエがフタをとじるがごとく出戦せずに籠って矢戦さ鉄砲戦さにとどめておけばいかがでありましょう」

「よく考えなされた。それがしも何度かそれを考えました。それも一案だと思います」

半兵衛は、決してくささない。

「愚戦にみえる。が、この愚戦には裏がある。あすの朝まで、まずまずこの調子で働いてくださらぬか」

おだやかにわらった。

伊右衛門は、ひきさがらざるをえない。

実のところ、半兵衛は、浅井方が出戦、という気配がみえた瞬間、岐阜へ軽騎を飛ばしてある。

主将藤吉郎に岐阜で大兵を狩りあつめさせ、急行して戦場後方に出現させ、挟み撃ちで一挙に浅井の大軍を総大将長政もろともに殲滅しようというのが、半兵衛の作戦である。

藤吉郎は参謀半兵衛の策を大いに喜び、いま北近江のこの戦場にまで猛速度で急行しつつあるはずであった。

それまで、城方としては、出戦して敵への刺戟をつづけていなければならない。なぜなら完全守勢に立てば、敵は、

（さては後詰め、後ろ巻の策があるか）

と、気づいてしまう。

半兵衛は、主将藤吉郎の到着が、あすの未明と計算していた。



やがて、弾と血と剣戟のなかで、元亀三年の元旦の陽が落ちた。

その翌暁、藤吉郎の手兵二千が、戦場の南方にあらわれた。

この朝、湖からこの横山城のある丘陵地帯にかけて、霧が深い。

攻守、ところを変えた。

勝ちほこった浅井軍団は、背後におもいもかけぬ木下藤吉郎隊の出現をみて、動揺した。

（竹中半兵衛殿の言葉があたったな）

と、伊右衛門は、感心した。

その智、神のごとし、というのは半兵衛のような男のことをいうのであろう。

半兵衛は、城門を八の字にひらかせ、金の采配を、

ぱらっ、

と振った。

攻め太鼓が序破急の順ではげしく打ちひびき、法螺貝が、びょうぼうと霧の中に鳴った。

伊右衛門ら籠城軍は、おもてもふらず、真っ黒になって浅井軍に突撃した。

乱戦になった。

偶然、いや縁があったのか、乱軍のなかでふたたび金の鯛の前立を打ったカブトの草野河内守義仲をみた。

草野の働きはものすごい。

当時、戦場ではもうめずらしくなっていた大薙刀（おおなぎなた）をもちい、水車のごとくふりまわして一旋するごとに織田方の士の血が飛び、馬が斃れている。

「吉兵衛、新右衛門、あれをやるぞ」

（むりだ）

と、吉兵衛はおもったらしい。馬を寄せてくるなり、殿、殿、殿、と三度わめき、伊右衛門の馬首を他の方向へまわそうとした。

「吉兵衛、何をする」

伊右衛門は、眼が吊りあがっている。逆上して、敵の強弱がわからない。眼中、功名だけがある。

「えい、死ぬまでよ」

と、馬をあおり、すさまじい勢いで草野河内守に接近した。

「おお、また来たか」

草野も、伊右衛門の出現におどろいたらしい。真っ白な歯をみせ、懐しそうに笑った。当時の武者というものは、敵味方憎しみで戦うものでなく、戦場といえ、名ある武士は、一種競技ににたゆとりをもっている。

草野の馬は大きい。

馬格で圧倒するようにして迫ってきた。

余談だがこの草野河内守は、荒馬をならす名手で、このときの乗馬は奥州馬で名代の悍馬（かんば）とさ



れていた。

それを、草野はうまやにつないで何時間ものあいだ、かいばも水も与えなかった。ころはよしと思うときに、かれはうまやに行って人参など馬の好物を与える。与えながら、さまざまに愛撫してやり、これを何日かくりかえすうちに、猫のようにおとなしくなった。

しかも戦場に出れば、野獣そのものの猛気を帯び、主人と一体になって荒れ狂う。

伊右衛門は、やせ馬である。

「あははは、人知らずめ」

と草野は、まず薙刀を旋回させて、伊右衛門の馬の足を切ろうとした。薙刀使いの常道である。

「わっ」

と伊右衛門は、馬首に槍を垂らせてそれを受けた。

「戛（か）っ」

と音が生じ、伊右衛門の槍の柄は、真っ二つに切られてしまった。

（わっ）

伊右衛門は、地獄の大釜でものぞいたような恐怖にかられた。

槍の柄が二尺を残すのみで、あとは地上にころがっている。

思ううちにも、草野河内守義仲の大薙刀の刃が虚空（こくう）に旋回して、伊右衛門の首の根にせまりつ

つあることを直感していた。

(死ぬんだ)

伊右衛門は一瞬覚悟し、あぶみを蹴出し、腰をひねって鞍の後輪によりかかり、襲ってくる薙刀の旋回のなかで、無我夢中で、刀をぬき、抜き打ちに敵の握り手を斬った。

斬った、と思った。

いや、べつに手練があるわけではない。万死に一生を覚悟しただけだ。

あとは伊右衛門の運だけが、伊右衛門を死からすくってくれるだろう。

もともと、馬上、太刀が、薙刀、槍など長いものと勝負するばあい、絶対といっていいほどに不利である。

後年（といってもこの年から十一年後だが）賤ケ岳の戦いで、いわゆる「七本槍」「三振太刀」という十人の功名をたてた者が出た。七本槍の中に後年の加藤清正、福島正則などがまじっていることは読者は先刻ごぞんじであろう。

三振太刀というのは、太刀をもって戦った三人の武功者のことだが、この三人は功名をたてたものの、このときの手傷で、戦闘後三人とも死んでいる。

馬上の太刀というのは、それほど不利なものだ。

ただ、唯一といっていい方法は、槍、薙刀をもつ敵の指を撃つしかなく、それが秘法とされている。

まったく偶然、伊右衛門の夢中でふるった刀が、草野河内守の右手の親指を切りおとした。



「ぐうっ」

と草野は妙な声をあげて薙刀をおとした。

すぐ刀のツカに手をかけたが、親指を切られているために握れない。

(いまぞ――。)

と伊右衛門は、手綱をしぼりしぼり、右手で太刀をあやつりながら草野の馬に寄せてゆき、

びゅっ

と、首をねらって片手なぐりに斬った。

が、刃はカブトのシコロにあたり、はねかえってしまった。

そのすきに草野は、だっと馬を寄せてきて、

「組まんず」

とばかり、駒を押しならべ、左手をのばし、すばやく伊右衛門の手をにぎろうとした。

馬上組み打ちのばあい、先に相手の手をにぎって引き寄せた者が、たいていは勝つ。

不覚にも伊右衛門は右手をつかまれ、ずるずるとひきずられた。

敵の馬は強悍、しかも乗り手は妙手で、伊右衛門の半身は、鞍から浮きあがってしまった。

「葉武者、成仏せい」

と、草野はなみはずれた剛力で伊右衛門の素っ首をだきかかえ、鞍壺に押しあて、不自由な右手で短刀をぬいたとき、吉兵衛と新右衛門が、木曽馬のように小さい馬で駈けつけてきた。

「殿っ、殿っ、討たれてはなりませぬぞ。奥様がおなげきあそばしまするぞ」

こんなことを戦場でいう馬鹿は、伊右衛門の郎党のほかにはなかろう。
敵の鞍壺に素っ首を押しつけられながら、伊右衛門は、
（あっ、千代）
と、その顔がうかんだ。
――短刀で敵の馬を、馬をお刺し遊ばせ。
と、たしかに千代はいった。
伊右衛門は短刀をぬいた。抜くや、
ぐさっ、
と草野河内守義仲の馬のあばらの間に突きたてた。
馬が、竿立ちになった。
どっ、と二人はころげ落ちた。
そのとき、草野の歩卒三人が駈けつけてきて、槍をさかさまに持ち、伊右衛門を突き刺そうとした。
その歩卒を、吉兵衛がいち早く槍玉にあげ、新右衛門がさらに槍を竿のようにふりまわして、草野のカブトをなぐった。
「わっ」
と脳震盪（のうしんとう）をおこしたらしい。



弱るすきを、伊右衛門は腰をはねあげて馬乗りになり、右手刺し（めてざし）で敵の具足のすきまの右腕のわきを突いた。
その瞬間、草野の郎党の一人が、伊右衛門のカブトをめがけ、まっこうから大太刀をふりおろした。
ぐわん、
と激しい衝動を受け、失神してしまった。
「新右衛門、ぬかるなっ」
と、吉兵衛らは、夢中で働いた。まずその歩卒を突き殺し、槍をひきぬくや、主人伊右衛門の下にあってなお戦闘力を失わない草野河内守の顔をめがけ、真一文字に槍を突き入れた。
槍の穂は、草野の口に入り、うなじまで突きとおった。
「してやったり」
吉兵衛は草野にとびついて、首を掻いた。
その間、新右衛門らは草野の郎党の攻撃を必死にふせいでいる。
が、伊右衛門は、夢をみていた。
失神している。ばかなはなしで、千代の体を臥床（ふしど）のなかで愛撫している夢をみていた。
死力をふるったあとで失神すると、ままこういうことになるらしい。股間が、濡れた。
「殿っ」
と吉兵衛が、ゆりおこした。

伊右衛門は、気をとりもどした。のそっと起きあがった。

「ここは、どこだ」

戦場のまっただなかで、茫然としている。

霧が、晴れはじめていた。湖から晴れはじめ、東方の丘陵地帯へ流れてゆく。

戦場をとどろに数百の騎馬武者が駈けまわっていた。

どの袖じるしも織田方のもので、草、赤土、水溜りの上に散乱している首のない死骸は、ほとんど浅井方のものであった。

「殿、お味方の大勝利でござるぞ。殿は、近江でさる者ありと知られたる草野河内守を討ちとられましたわ」

「千代が、そう申したか」

頭をやられて、伊右衛門はまだ、夢とうつつとがはっきりしない。

「殿、ここは戦場じゃ。奥方などはおわしませぬぞ」

「ふむ。……」

伊右衛門はすでに味方は追撃戦に移っているというのに、その合戦半ばで郎党らにかかえられ、横山城にかつぎこまれた。

小谷城が落ち、浅井久政、長政父子が自刃し、近江一国（南近江はそれ以前に平定）が織田家の有に帰したのは、天正元年八月である。



この浅井討滅戦には、終始、木下藤吉郎の部隊は第一線にあり、その功もっとも大きかった。

信長は、この草履取りあがりの部将に小谷城を与え（のち長浜に築城）、浅井氏の旧領のうち二十二万石を与えた。

藤吉郎、このとき三十八歳。

はじめて大名になったのである。姓も変え羽柴藤吉郎と称した。

ほどなく信長は、秀吉に筑前守を称することをゆるし、同時に、朱柄の唐傘の資格もさしゆるした。

この傘は、柄が長い。家来が一歩はなれて差しかけてゆくのである。公卿、門跡、大名のほかはゆるされないものだ。

（千代の眼は高かった。この草履取りあがりのひとが、近江小谷二十二万石の大身代に成りあがろうとは、たれが予測したろう）

と、伊右衛門はおもった。

織田家の家中には、秀吉が卑賤のころの伝説が、多く伝えられ、伊右衛門もきいている。

まだ信長の草履取りだったころ、「猿」とよばれていた秀吉は、お城の大手の松ノ木門の下を通っていた。

すると、そばの板塀のフシ穴からにわかに水がとびだして、猿のつらにかかった。

あっと飛びのいたが、水がなまぬるく、臭気がある。小便である。

猿は大いに怒り、

「どいつだ、おれの顔に小便をかけたのは」

と、門内にとびこんだ。

すると、まだ悪童っ気のぬけなかった信長が、松の木にかくれた。

袖がみえた。

「おのれじゃな」

と飛びかかろうとすると、信長は、

「おれだ、三郎だ」

と、閉口していった。三郎とは信長の名である。

が、猿めは屈せず、

「お主でござりまするか。しかしながらお主とはいえ、男のつらに小便をかけられてはだまっておれませぬ。これへ出られませい」

と、本気でどなった。

この猿のことだ。どこまで本気かはわからないが、とにかく演技力の卓抜な男である。それに、信長という常人では見当のつかぬ人物を、この猿はみごとなほどつかみきっている。

信長は、感心した。猿は、ひとのいうようなおべっか使いではない、——こいつは男だ、とおもった。

が、あまりの猿の剣幕に閉口して、

「許せゆるせ。おれはそちをためしてみたのだ」



小便をかけて試されては、猿もたまるまい。

「これからは取りたててやるから、顔を拭いて堪忍せい」

となだめた。

この話は、千代も知っている。

その小便で試された猿が、朱の柄の唐傘をゆるされ、筑前守に任官し、二十二万石の大名になったのである。いかに戦国の世でも、驚天動地のことであろう。

それにつれて、山内伊右衛門一豊も、泉州唐国において千石の知行をもらった。織田家の直参ながら、従前どおり秀吉の与力（家来でなく出向と解していい）である。

ひさしぶりに岐阜へもどった。

「千代、久しかった」

と、伊右衛門は、形ばかりの小さな書院に座し、千代の手をとるような仕草をした。

「まあ、ひとが来ますものを」

と、千代は笑った。

「かまわぬではないか。わしの守護神どのを抱こうがおがもうが、ひと目に遠慮はいらぬことだ」

「またあんな大げさなことを。千代は神さまなどではございませぬ。それよりもこのたびのお取りたて、おめでとうございます」

「千石だぞ、千代」

伊右衛門は、少年のように笑った。泉州唐国という知行地はまだ見たことはないが、とにかく、千石というのはなみなみな身上ではない。もっとも、いちいちその知行地へ行って民治をしたり、年貢を取りたてたりする必要はなく、それらの吏務は、織田家の堺代官松井友閑の役所で代行してくれることになっている。

「でも、その唐国という土地、いちど行って見とうございますね」

と、千代はあこがれるような眼をした。

とはいえ、別に本心ではない。千代はどちらかといえば出嫌いで、いままで縁もなかった泉州の土地など、行ってみたいと思わなかった。が、そういえば伊右衛門の心が勇むであろうと思ったのである。

「一度、行ってみるか」

伊右衛門は、単純なものだ。千代の言葉に乗った。

「唐国というのは、泉州でも泉北に属するそうだ」

妙な地名である。上古、韓国民の居住地だったところで、戸数は百戸ばかり、地味は美濃よりも肥えている。

「それよりも、羽柴様は、小谷城よりも湖岸の今浜（のちの長浜）のほうが湖水をひかえ、しかも中山道をおさえる要衝とみて、新城をお築きになるそうでございますね」

「よく知っているな」

いつもながら、千代の早耳には伊右衛門もあきれてしまう。



「そりゃ、天下の織田家のお膝元の岐阜でお留守をしておりますと、諸将の動きが手にとるようにわかります」

「………？」

それだけではあるまい。いかに岐阜が織田の策源地とはいえ、侍屋敷の女房の耳にまで諸将の動きが伝わるようでは、防諜もくそもあったものではない。

そうやすやすとわかるものではないのだ。

「千代、そなたは妙な才能があるな」

と、伊右衛門は、わが妻ながら、薄気味がわるくなってきた。

「いえいえ、千代はなにも存じませぬ」

と、千代はあわてた。

じつのところ、千代は隣り屋敷の主である茶坊主に、実家の不破家からの到来物などを、しょっちゅう持ってゆき、それとなく、織田家の動きを聴いている。

千代には、情報源があるといっていい。これらの情報によって、千代は千代なりにさまざまの判断をくだしているのだ。

が、女である。

千代がもし男なら、ゆうに五十万石の国を動かす人物になれたであろう。

女は、少々お茶目であっても愛らしくなくてはならない、と千代は思っている。

「それで、どういうのだ」

「それで、と申しますと？」
と、千代は、自分の賢(さか)しらさをかくすのに天性の才能があった。
「今浜を長浜とお改めになり、ここに羽柴様最初のお城をお築きあそばす、とうけたまわりましただけ。そのほか、なにも存じませぬが、——でも」
と、千代は口ごもった。
「でも？」
と、伊右衛門は、あとがききたい。
「でも、どうなのだ」
「あの、千代の亡父のことを申してよろしうございましょうか」
「なにをいう。世に亡いとはいえ、わしにとってもしゅうと殿ではないか」
千代の亡父は若宮喜助友興(ともおき)といい、千代が物心つかぬうちに討死した、ということはかつて触れた。
若宮喜助は、近江の湖畔、たまたま長浜にほどちかい所に住んでいたということを千代はきいている。
「でございましょう？」
「ふむ。だから、長浜が懐しくおもえる、というのか」
「……」



と、千代は言葉には出さず、唇もとで微笑をたたえて、うなずいた。
ほんとうは、これも本心ではない。亡父のかつていた地方であるとはいえ、千代にとってさほど強烈な魅力はない。
しかし、伊右衛門にせがんだ。
「羽柴様が長浜にお城をお築きあそばせば、お城下に町が出来、むろん侍屋敷の土地の拝領などもございましょう」
「むろんのことだ」
が、織田家直属である伊右衛門は、岐阜にこの屋敷を拝領している。羽柴家にとって与力だから、長浜には屋敷地は貰えまい。が、強いてのぞめば、むろん秀吉は、自分を家来同然の気持で慕う者としてよろこんで屋敷地をわけてくれるだろう。
「長浜に、住みたい」
と、千代は童女のような口ぶりでいった。
「あははは、それほど亡父の故地というものが懐しいのか」
と、伊右衛門はおかしがった。
なんの、伊右衛門には、千代の本心はわからない。
要するに、
(羽柴様に、もっと密着しておけ)
といいたいのである。千代の見るところ、織田家で人物といえば、身分の差は別として、羽柴

筑前守秀吉こそ第一等であった。このひとに夫がついてゆけば、まずまちがいはないであろう。だから、

「織田家直参」

ということで伊右衛門が岐阜だけに屋敷をもたず、長浜にも持てといいたいのである。が、露骨にはいわない。

「あっははは」

伊右衛門は、愉快になった。

「千代はいつまでも娘々しすぎて、気苦労がなくていい。亡父の故地だからという一片の感傷で近江長浜にも屋敷をもちたいか」

「千代はそこに住みとうございます」

「おどろいた子供だ」

伊右衛門は、すっかり大人ぶって、

「よし。ほかならぬ千代の駄々だ。羽柴様におねがいして屋敷地を拝領しよう」

初更の鐘がきこえたころ、すでに伊右衛門は、臥床のなかにあった。

千代を待っている。

（侍の夫婦というのも、妙なものだ）

とおもう。一年のほとんどを戦場か、占領地で暮らしていて、夫婦がともに語らいあえる日か



ずというものは、わずかしかない。

（まあ、上様が天下を統一なされば）

平和な夫婦の日がやってくるだろう。

織田家の侍のすべてが、大なり小なり、その信仰をもっている、信長がかならず天下を統一するという……。

むろん信長が、家臣に持たしめたものだ。この信仰が、織田家の、いわば士風の一部をつくっている。

もともと、信長のお国もとである尾張というのは、侍が弱いことで近国に知れわたっていた土地である。隣国ながら家康の三河（尾張・三河ともに現在の愛知県）は侍の強さで天下に知れたところだから、風土と人の関係というのはおもしろい。

その弱い尾張侍（伊右衛門も尾張うまれの尾張そだちだからその一人である）を率いてついに天下平定への階段を駈けあがった信長という男は、その天才性においては、秀吉、家康などが遠く及ぶところではない。

尾張侍は、むしろ、信長が驀進（ばくしん）してゆくあとを、息せききって付いていくのが精一ぱいだった、ともいえる。

信長の苛烈な性格にへきえきしながらもなお逃げ散らなかったのは、

（上様こそ、天下をお取りになる）

という信仰があるからだ。

（千代との暮らしも、いつかは楽になる）

伊右衛門は、べつに英雄豪傑の資質を持ってうまれなかったから、希望というのはそんなところである（いやもう、こんな男がなぜ後に土佐二十四万石の太守にまでなったのか、筆者も書きながら、ふしぎでならなくなる）。

余談ながら、戦国の世で、兵が最も強かったのは甲斐の武田家。ついで越後の上杉家。これが、戦国時代における二大強兵軍団であろう。

ついで、関東の北条。これを加えると、三大強兵集団ということになる。

さらに、山陰山陽道をおさえている毛利の軍団がある。

僻遠の地では、薩摩の島津、奥州の伊達、土佐の長曾我部などは強かったが、しかし、地理的関係から天下の権を中原で争うわけにはいかない。

いずれにせよ、武田家の一例をひいても、尾張侍五人に武田侍一人と、いわれたほどに精強であった。

伊右衛門が、いっこうに戦国武士らしい武辺さがないのは、これは尾張うまれの共通した性格でもある。

それが、

（上様はきっと天下をおとりになる）

という信仰だけで信長について行き、やがては長篠で天下一の武田勢を打ち破るにいたるのだから、勢いのついた集団というのは、おそるべきものである。



千代は、闇のなかで、小さく答えた。

「はい」

と、この典型的な尾張侍はいった。

「千代、早う」

伊右衛門は、待っている。

「……」

千代が、寝化粧を終えて、屏風のむこうにすわり、やがて燭台の灯を吹き消した。

伊右衛門は、臥床のなかで、千代の豊かな腰を抱いた。

（小りん。……）

とふと思ったのは、伊右衛門のような男でも、男の性根は面妖なものだ。

伊右衛門の体に残っている記憶では、小りんは、抱けば折れるような細い腰をもっていた。千代はそうではなかった。

肉置きがゆたかで、肌は小りんのように乾いてはおらず、いつもしめったような手ざわりがある。

（女としてはどちらがよいか）

などとは、伊右衛門は考えない。もともとそういう余裕のないところが、伊右衛門の取り柄といえば取り柄である。

戦場で、敵にぶつかったときの伊右衛門のように、無我夢中で千代の体を攻めた。
「お終い？」
と千代は微笑した。
伊右衛門は、すこし夢中になりすぎて千代を置きざりにしたようであった。
「うん」
伊右衛門は、少年のようにはにかんだ。
「もっと、語らおう。夜を明かして」
「うれしい」
千代は伊右衛門の胸に顔をおしつけた。が、ふと気づいて、
「お約束を守っていらっしゃる？」
と、小さな声でいった。
初夜のときにかわした約束を、である。生涯、仇し女に心を寄せぬ、ということであった。そのかわり、千代と心を一つにして一国一城のあるじになろう、ということをふくんでいる。
「まもっている」
と、伊右衛門は、闇のなかで赤くなった。
「ほんと？」
「いつわりはない」
と、嘘つきのたれもがいうせりふを、伊右衛門は不器用につかった。



「でも、殿方というのは、戦場でおなごに触れぬと気が荒れると申すではありませぬか」
「そうとも、聞いている」
「聞いている、って、一豊様ご自身は、いかが？」
千代は、たくみに誘導している。
「さあ、わしか。気が荒れているのかどうかは知らぬが、槍をとっての戦いでは、平素節制せぬ者は、重要なところで、カクリと気を折り、思わぬ不覚をとるそうだ。わしにはそういうことはない。不覚をとらずに戻ってきたということが、なによりの証拠ではあるまいか」
と、気の弱いことをいった。
が、その弱々しい答えがかえって真実感があって千代を満足させた。
「ね」
と、千代は念を押した。
「大身になられ、城主、国主になられても、お側女などをお置きになってはいやでございますよ」
「ふむ」
「一豊様、ちゃんと、ご返事。——」
「ああ、そのようにする。千代はわしの守護神だから」
伊右衛門は、再び千代を抱きよせた。しかし、心の片すみでは、小りんのことを思っている。
(側女とはああいう味わいなら、ゆくゆくは持ちたいものだ)
伊右衛門は、五十石で結婚したときとは、多少、男として世間がひろくなっている。

その翌朝、伊右衛門が登城したあと、妙な僧侶が、屋敷を訪ねてきた。

空也僧の風体である。

笠をとると、七十ぐらいの老人で、歯がないために、声が洩れ、よくききとれない。

五藤吉兵衛が、応対した。

「貴僧はどなたでござる」

「名か」

にやっと笑った。両頬が黒ずむほどに落ちくぼみ、奇怪な面貌である。

甲賀者望月六平太であった。

「ご存じの空也僧、といってもらえば、ご当家の殿にはわかるはずだ」

「殿は、お城にあがられている」

と、吉兵衛は不快そうにいった。

そこへ、伊奈波明神への物詣からもどってきた千代が、門わきで、空也僧をみた。

「吉兵衛、このご坊はどなたです」

「ああ、これは御内室様でござるか。なるほどご評判のとおり、織田家の家中きっての美人であられまするな」

千代はまゆをひそめた。こんなきたない老空也僧に、馴れなれしくものをいわれることはないのである。



「どなたでございます」

「いや、名か」

つるりと顔をなでた。

「申しても、あまりたくさんござるゆえ、名乗っても名乗らずとも、おなじでござりまする。それより、御当家は千石に御加増相成ったそうでござりまするな」

「これ」

と吉兵衛は、空也僧の言いぐさのつら憎さにむっとした。

「僧とみて、ゆるしてはおる。しかし言葉づかいに気をつけよ」

「………」

望月六平太は、吉兵衛を黙殺した。

「後刻たずねてくる。ただ、伊右衛門殿に伝えてもらいたい。加増されれば家来も要ろう、わしを召しかかえぬか、と」

伊右衛門は、午後三時に下城した。

「なに、空也僧？」

と問いかえして、肝が冷えた。小りんのことを、もしや千代に明かしはせぬか、と。

が、千代は気づいている顔色ではない。

「存じよりの者だ、召しかかえて貰いたい、と申しておりました。あれは何者でございます」

「甲賀者だ」

吐きすてるようにいった。伊賀、甲賀の者は、信長の好まぬところだし、織田の軍勢が、伊賀攻め、甲賀攻めを年来くりかえしてきている。そういう手合いとかかわりたくはない。

「忍びでございますか」

「そう、甲賀の忍び。浅井家に身を寄せておったが、落城後、天下に身を寄せるところがなくて、わしを頼ってきた。戦場で、ふとしたことで知りあった」

「忍びは、叛服常ないときます。あのような化物の者は、なるべくお近づけにならぬほうがよろしうございます」

「うふっ」

と笑ったのは、伊右衛門ではない。

いつの間にあらわれたのか、空也僧姿の望月六平太が背中だけをみせて、縁側に腰をおろしている。

「まあ」

これにはさすがの千代も青ざめた。

千代が驚いたのは、それだけではない。

こちらをむいた望月六平太の顔である。

朝、訪ねてきたときとはまるでちがう顔で老いのかげもない。歯も白々と美しく、頬はゆたかで、皮膚のつやもちがい、どうみても二十八、九の齢である。



「そなたは、何者です」

「朝、お目にかかりました。あのときは戯れに老人になって参上しましたが、この顔が、素顔です」

(やはり、化物じゃな)

千代は、油断なく、望月六平太を見つめている。

「御内室様。忍びを召しかかえなされ。ゆくゆく一国一城のあるじを心掛けるお人なら、忍びを手もとに置くのは心得でござるぞ」

「………」

「申しておく。織田家の家中はもとより、ご当家の祖父江新右衛門、五藤吉兵衛殿にも、拙者が忍びであるとは気づかれぬようにする。いかがじゃ、……わしを買わぬかな」

「………」

千代は、怖じずに見つめている。

「ついでにこれも申しておく。わしほどの技術があれば、どの大名の直飼いを望んでもすらりと叶う男でござる。それをたかだか千石の山内伊右衛門殿にお仕え申そうというのは、よくよく見込んだがためでござる」

と、恩に着せている。

が、千代は、

(狐狸を飼うようなものだ)

と思い、きびしくいった。
「屋敷を出なさい。人をよびまするぞ」
「はて、御内室」
と、望月六平太は、しつこい。
「左様に犬猫を追うように申されるものではありませぬ。いま一度、明日あらためて参上しますから、よく考えていただきたい」
立ちあがった。
千代が縁側に走り出たときは、もう影もない。
「旦那様、なぜあのような者とお近づきになったのでございます」
と、さすがの千代も、このときだけはすこし取りみだしていた。
「ふとしたことでだ」
と、伊右衛門は、にがい顔をした。さる女を通してである、とはいえない。
翌日、伊右衛門は、終日屋敷にいた。
（六平太め、来おるか）
と思うと、気が気ではない。魔物でも来るような怖れが、伊右衛門にある。
が、陽が暮れた。
ついに来なかった。
千代もほっとしたらしく、



「あの者、参りませなんだな」
といった。が、千代は、多少考えが変わりはじめていた。
（もし筋目のいい忍びなら、一人ぐらい召し抱えなされたほうが、戦場でのお働きなどで便利なのではあるまいか）
しかし、毒物のようなものである。用い方によっては薬になるが、誤ればとんでもないことになるだろう。
「旦那様、あの者、どうなさいます。もし心が直（すぐ）な者ならば、召しかかえになってもよいではございませぬか」
「これは」
と、畳があがった。
「かたじけのうござる」
藍の肩衣、同色の袴をつけ、髪は総髪で元結（もとゆい）を清げにむすんだ立派な武士が、畳の中から出てきた。
居付くともなく、望月六平太はその夜から居ついてしまった。
五藤吉兵衛も、この新参者が、あの日の老いた空也僧であるとは気づかない。
「食客（しょっかく）でござる」
と、古参の吉兵衛や新右衛門以下に、あいさつした。

「生国は肥後」

などと、遠国でごまかしている。

翌朝から、むろん服装は肩衣ではない。麻の粗服に伊賀袴、といったふつうの牢人体につくっている。

寝起きする長屋も、ちょうど明いていた一室に自分で入りこみ、しかも朝夕の屋敷うちの掃除などは、小者に立ちまじってくるくると働く。

「なんだ、あれは」

と祖父江新右衛門などは、伊右衛門からひとことも聞かされていないから、見当もつかない。

「随身を望んでいるらしい」

と、吉兵衛の答えも、想像である。

「山内家も千石ともなれば、ああいう牢人者もやってくる。新右衛門、昔をおもえば殿もご立派になられたものだな」

「ふむ」

よくあることだ。

千石、二千石取りの屋敷には、諸国で敗残した牢人が、食客となって飯だけを与えられ、お長屋でごろごろしている。

いざ合戦となれば、陣借りして働き、その働き、武功の次第では、奉公をゆるされることがあり、時には、織田家の場合なら信長の眼にとまって直参に取りたてられることもあるのだ。



「ご当家には食客がいる」

というのが、吉兵衛、新右衛門の他家への自慢になった。

望月六平太も、そこは心得ている。古参でいわば家老格というべきこの二人には、愛嬌もふりまき、頭もひくくしている。もともと変幻自在な男なのだ。

数日たって、吉兵衛と新右衛門は、

「いい男らしい」

と、すっかり気に入った。

それどころか、

「六平太、合戦があれば舎利無陀羅に働くがよいぞ。されば殿も御家から御加増を受け、そのぶんだけおぬしのお扶持となって下されることになるのだ」

と、はげましてやったりした。

「いやいや、何分とも御両所のお指図によって身動きをいたしまするゆえ、よろしくお引きたてを願い奉りまする」

などと、望月六平太も、ぬかりなく機嫌をとっている。

が、薄気味がわるく思っているのは、当の山内伊右衛門である。

(あいつ、いつのまにか住みこみおった)

と、にがにがしい。

召しかかえる、とは一言もいっていない。

しかし、勝手に食客で居すわってしまった以上、それでも出てゆけという勇気は、伊右衛門にはない。

それに意外にも、千代が、あの男を気に入りはじめているようなのである。

「存外、甲賀者とはいえ、性分が良さそうではございませぬか」

というようになった。

（だから女は甘い）

と伊右衛門は思うのである。六平太のすご味を、伊右衛門以外に知る者がない。

（いったい、どういう魂胆でいるのか）

ほどなく、陣触れがあった。



# 長篠合戦

その後、伊右衛門一豊は、織田家の膨脹とともに四方の戦場にのぞみ、千代とともにすごす日かずがますますすくなくなった。

「そのせいかな」

あるとき、戦場からもどってきた伊右衛門が、小首をかしげた。

いっこうにこどもが、できないのである。

「おかしなことだ」

と、ふしぎそうに千代を見た。

千代は、顔を赤らめた。こればかりは千代の智恵ではどうにもならないことである。

「いったい、どうしたことでございましょうね」

「さあ」

伊右衛門は、ぼんやりと庭を見た。千代にわからぬことが自分にわかるはずがない。そういう

顔つきである。

「わたくしは、石女でございましょうか」

「わからんなあ」

「頼りないお返事。ひょっとすると、一豊様がおわるいのかも知れませぬ」

と千代は冗談をいったりしたが、それでも一豊に側女をもて、といわなかった。

武家の習慣からいえば、こういう場合は千代から側女をすすめるのが普通であった。むしろそうすることが、貞女とされていた。

家系を絶やさぬ、というのが、武家の道徳というより、それが実利なのである。戦場の武功でかせぎだした家禄を、次代に相続させねばならなかった。

そのために、側室をもつ。

側室は女奉公人ともよばれ、家来としておなじ屋敷に住まわされた。たとえその家の相続者を生んでも、あくまで身分は女奉公人で正夫人に隷属し、その監督をうけた。

蓄妾は当然な風習であったが、しかし伊右衛門は、

——されば側室を。

などとはいわなかった。

言えないのである。婚礼の夜、千代は「わたくしがきっとあなた様を一国一城のあるじにしてみせます。そのかわり、生涯、他の女をかえりみたりはなさいませぬように」

と伊右衛門に約束させた。



その手前がある。

「まあ、すえずえまで子が出来ぬ場合は、貰い子などしよう。苦に病まぬことだ」

といって、この話をうちきりにした。

子がないくせに側室をもたぬ伊右衛門は、ただそれだけで織田家の家中で評判であった。

「いや、かたい男だ。伊右衛門はめしを食うときでも、箸さきがわずかに濡れる程度で済ませてしまう。酒も、杯に三ばい以上はどうすすめても飲まぬ。女のほうも同然らしい。内儀一人を律義にまもっている」

もっとも、織田家の家中で子なしのなかまがいる。

近江長浜の城主になった木下藤吉郎あらため羽柴筑前守秀吉がそうである。

秀吉の妻の寧々も、人目をそばだたせるほどの豊満な体をもっているくせに、子がなかった。

寧々も、千代と同様、夫の秀吉に側室をおくことをゆるさない。

（もっとも秀吉は伊右衛門とはちがい、寧々にかくれてしばしば他の女に手をつけ、そのため信長が調停せねばならぬほどの派手な夫婦喧嘩をやったりしたが）。

とにかく、この当時で、伊右衛門夫婦はその方面でも、一種、珍奇な存在であった。

その夜、この年に入ってから二度目の陣触れがあった。

日没後ふりはじめた雨が、雨戸をおびやかして、はじめは陣触れの太鼓が容易にききとれなかった。

（……？）

千代は伊右衛門に抱かれながら、耳を澄ましてその音を聞きわけようとつとめた。

遠い潮騒を聞くようなひびきが、かすかに風雨の音にまじっている。

（たしかに、太鼓。……）

音は、城の楼上からきこえてくる。

やがて貝の音がまじりはじめたが、千代の体にかぶさっている伊右衛門の耳には聞こえないらしい。

千代は眼をつぶり、唇を半ばひらき、知らぬ顔でいた。

――観世音に似ている。

と伊右衛門がいつもそういってよろこぶ千代の閨室のかおである。

千代は、その表情のまま聞き耳をたてていた。

――あの。お陣触れでございます。

などと、伊右衛門の興をそぐようなことはいわない。

わざと悩乱してやった。

「千代、今夜はどうした」

と伊右衛門は、驚いて耳もとでささやいた。

「どうも、いたしませぬ」

「そなた、いつもとはちがう」



伊右衛門は、阿呆づらでよろこんだ。

いや、千代の悩乱は本性だったかもしれない。夫を戦場へひき剝がしてゆくあの太鼓の音をききながら、あるいはこれが生命の最後になるかもしれない愛撫をうけるというのは、尋常な心情ではなかった。

やがて伊右衛門の耳にも太鼓の音が入ったのか、ふと動きをとめた。

「千代、なにか聞こえぬか」

「いいえ」

と、無言でかぶりをふった。

「お城から聞こえてくる。陣触れではあるまいか」

「一豊様」

千代は、白い腕をのばして両手で伊右衛門の耳たぶをそっとふさいだ。

「ほら、なにもきこえませぬ」

「そういえばそうだな」

伊右衛門は、愛撫をつづけようとした。

「もっと」

と、千代はささやいた。

「一豊様、さきほどのように。――」

「こうか」

太鼓はなおもひびいている。すでに千代の枕をひびかせるほどの音になっていた。
「千代」
「厭やでございます、お放しになされては。――」
と千代はかぶりをふり、やがて伊右衛門のいのちを体に受けた。受けおわるとすばやく寝床のなかで裾の乱れをつくろい、
「お陣触れのようでございます」
くすっと笑った。
「あっ」
と伊右衛門ははねおきて、床の間の具足びつにとびついた。
千代も廊下に出、つぎつぎと灯りをつけて行き、最後に台所の燭台に灯をつけながら、
（今夜のはきっと）
とおもった。伊右衛門のいのちが、千代のからだのなかであたらしい芽をふきだしそうな予感がしたのである。

雨。
なお降りやまない。
行軍がつづいた。伊右衛門らの属する羽柴隊が、岐阜の城下に入ったときも、なお雨がつづいていた。天正三年五月のはじめのことである。



（戦さの相手は、甲州の武田勢だな）
伊右衛門らは、はっきりとは聞かされていなかったが、そう推察することはできた。
やがて織田家の天下制覇への道を大きくひらいた長篠の合戦がはじまるのだが、伊右衛門程度の将校には、信長の意中が知らされていなかった。
すでに武田勢一万三千は、主将勝頼に率いられて家康の領地である三河に侵入し、設楽郡の長篠城をかこんでいた。
当時、甲州武田家は百三十三万石、兵数三万三千。
信玄亡きあともその兵馬のするどさは、天下第一とされ、いたるところで徳川軍を破った。このとき家康は三十四歳、領地は武田勢のために九万石をうしない、四十八万石、兵数一万二千。
国境いではげしく防戦しつつあるが、とても手にあう敵ではなかった。
家康は、信長に急を報じ、何度も援軍をたのんだ。
が、信長は岐阜を動かない。
岐阜城下に軍勢をあつめたものの、いっこうに出陣を命じないのである。
「どうなされたのでございましょう」
と、吉兵衛は、伊右衛門にいった。
岐阜での宿舎は、寺になっている。毎日、雨をみながら、主従は日を消していた。
「わからぬ」
伊右衛門も、不機嫌に首をふった。敵が武田武者であるとすれば、こんどは生きて帰れぬので

はないかという予感がするのである。

「織田様も」

と、望月六平太は寝そべりながら、五藤吉兵衛へあごをむけた。

「こんどはご大難であるようじゃな」

織田家は、武田家よりその所領ははるかに大きく四百万石を越え、兵数も十万余にのぼるほどの大軍団に成長しているが、なお信長は武田家の兵馬をおそれ、いままで臆病としか思えないほどの態度でいっさいの戦闘をさけてきた。

信長の武田を怖れる気持は、織田侍のはしばしにまで伝わっている。

「なんの、武田武者とて」

と、吉兵衛が青い顔でいった。

「鬼ではあるまい」

「いや、鬼よりもおそろしかろう。信玄手飼いの猛将馬場、小幡、穴山、山県、甘利といった連中が、くつわをそろえて長篠城をかこんでいるそうだ」

と、望月六平太が、甲賀者特有の煙るような微笑で、いった。

「よせ、六平太」

祖父江新右衛門がしかりつけた。

「陣中、敵味方の強弱を論ずるのは織田家の法度であるぞ」

「わしは食客だ、かまうまい」



六平太は、わらっている。

伊右衛門は、だまっていた。沈黙したまま窓外の雨の音を聴くふりをしている。

(武田武者とて鬼ではあるまい)

と思うものの、胴が小きざみにふるえてくるのをどうしようもない。

信長が、その軍団に出動を命じたときは、長篠にある家康の最前線はほとんど潰滅する寸前であった。

なぜ信長がここまで腰が重かったのか、これは筆者自身の余談だが、作家の海音寺潮五郎氏と話していたときに、氏はふと、

「梅雨どきだったからでしょう」

といわれた。

筆者は、眼があらわれるようなあざやかな衝撃をうけた。じつのところ、長篠合戦における信長の出足のおそさについては、古来、定説がない。

同盟軍の家康が、つぶれようとしている。さしあたって長篠という家康の最前線要塞が、武田の手に落ちようとしている。家康は、信長の援軍を爪をかむ思いで待った。

それでもなお信長は出てこない。有名な鳥居強右衛門事件は、このときにおこるのである。

家康の、

「織田待ち」

は、血のしたたるような、いや現実において徳川軍の血が流されつづけている時間待ちであった。

それを、

「梅雨だったからだ」

という解釈は、古来ない。信長は、雨のあがるのを待っていた、というのである。これでいっさいの疑問は解ける。

信長は、この戦闘で、世界戦史上、最初の「一斉射撃」を準備していた。それによって一挙に武田の騎馬隊を潰滅させようと考えていた。しかし雨では、鉄砲の火縄がぬれて射撃は不能になるのである。

右は余談。

わずか千石の一将校にすぎぬ山内伊右衛門の身には、さほどのかかわりはない。

ただ、伊右衛門の脳裏には、

「武田の騎馬隊」

という神話的なまでのおそるべき敵の像がいっぱいに占めている。

天正三年五月のなかば、信長はその麾下の諸隊を部署して、それぞれ出発させた。

出発の前日、伊右衛門は、妻の千代に手紙をかき、

「生きて帰れるかどうかはわからないが、もし無事に生命があったとすれば、この合戦はわしの生涯の切所になるだろう」

という旨をしたためた。



長浜への飛脚便に托したために、その翌日には手紙は千代の手もとについた。

(切所。——)

という言葉が、千代の胸にもひびいた。

(このたびの御合戦が、わたくしの体にも実りますように)

と祈った。陣触れの太鼓をききながらはらんだとすれば、千代にとっても長篠の合戦は記念すべきものになるであろう。

千代が手紙を読んでいるころ、伊右衛門は雨をおかして三河の街道を東に進んでいた。

織田勢は、二万人動員されている。

足軽衆は全員、妙なものをかつがされていた。直径五寸ほどの丸太である。

それと、いままでに類のない新編成部隊ができあがっていた。織田家の諸隊の鉄砲足軽から精妙の者のみをえらんだ三千人の銃隊がそれである。これを佐々成政、前田利家、野々村幸久、福富貞次、塙直政、といった五人の旗本が指揮をとっていた。

長篠城というのは、絶妙の要害をなしている。

まわりは山岳地帯で、西からは滝川、東からは大野川が流れてこの長篠で合流し、それが豊川という川になって、五十キロむこうの渥美湾にながれこむ。

三つの川は、この長篠でY字形になっており、流域平野も、せまいYの字にひらけていた。

その長篠城から二キロ下流に手ごろな狭さの野(設楽原)がある。武田軍団と織田・徳川軍団の

予定戦場としては、これ以上広くても都合がわるいであろう。
第一、信長がこまる。
信長の作戦はじつに奇抜だった。山と山ではさまれたこの野を、柵でえんえんと遮断したのである。
その柵の前方には、連子川というほそい川が柵に沿って流れている。野戦陣地を構築したわけである。いや、牧場を作りあげた、といったほうがわかりやすいであろう。
織田・徳川軍は、その柵の中、つまり牧場の内側に入った。柵のきわには、例の三千人の選抜銃隊が、三段にわけて折り敷いて、「牧場」のそとに銃口をむけている。
銃口の方角に、武田軍の陣地がある。
伊右衛門が所属する羽柴秀吉の部署は、左翼であり、左隣りは丹羽長秀隊、右隣りは滝川一益隊が、柵の中に入っていた。
伊右衛門らはすべて馬をすて、徒歩になっていた。羽柴秀吉でさえ、徒歩であった。
こぼれ話がある。
秀吉が、柵の材木をタテヨコに結びつけている足軽の作業を見、
「おのれらの手はのろいのう。柵のけりはこういうぐあいに結ぶものよ」
と、カブトも着ず、上半身裸かになって自分で結びかたの模範を示した。
さすがに草履とりからたたきあげた侍大将だけあって、じつにうまい。
鳶職のように柵の上にのぼり、陽気に鼻唄をうたいながら、結びつけている。



これには、伊右衛門は感心した。
織田家の数ある侍大将のなかで、鳶職のまねができるのは、旧称藤吉郎、いまの名は羽柴筑前守秀吉だけであろう。
しかも、鼻唄をうたっている。
足軽たちは、もうそれだけで気持があたたかくなって、
（わいら大将）
といった。こぼれるような微笑で秀吉を見あげている。
秀吉のいるところ、ぱっと陽が射したように明るくなるというのは、もってうまれた性格によるにもせよ、他の大将にはない独特の統率力にちがいない。
「伊右衛門、伊右衛門」
と、秀吉は頭上から笑いかけた。
「そちものぼって来い。敵も味方もよう見えて、なかなかの眺めだ」
「はっ」
と伊右衛門は声をかけられたことだけで感激し、ナワをくわえてのぼりはじめた。
「馬鹿だなあ、素手でのぼってくるやつがあるか」
秀吉は大口をあいて笑った。
（なるほど、横木をかついでゆかねば）
と、伊右衛門、右肩に横木をかつぎ、左手と足を動かしてのぼりはじめたが、途中、湿った生

木（き）に足をすべらせ、横木ともどもにどうと落ちてしまった。

これだけの合戦だから、伊右衛門の身辺だけに筆をついやすのは惜しい。

こんどは、敵の大将である武田勝頼の側にすこし触れよう。

勝頼は齢三十。

決して凡将ではない。

おそらく武田家という名家にうまれずに槍一筋の身分でも、侍大将ぐらいまでは十分駈けあがれるほどの男だ。

が、侍大将以上の器量ではない。そこが勝頼の不幸の第一である。

第二の不幸は、戦国の群雄から軍神の権化（ごんげ）かとまでおそれられた武田信玄のあとを継いだということだ。

——お父君はえらかった。それにひきくらべ。

というぐあいに、信玄手飼いの老将たちは小姑（こじゅうとめ）感情をこめた眼でこの第二世を見る。勝頼はたれを相手にするよりも、その眼を相手にしなければならない。

だが、信玄を越えることは不可能である。せめて故信玄の最優等生になろうとした。

——おれが父を一番よく知っている。

という自負心もある。

信玄は、すべての点で独創的な男だったが、ただ、気分としては保守的な色彩のすきな男で、



鉄砲という新兵器をさほど大胆には採用しなかった。

勝頼は、この亡父の鉄砲に対する消極性を鉄砲そのものへの批判として解釈した。勝頼は、信玄が思いもしなかった新解釈をくだしている。

「鉄砲は飛び道具だから卑怯（ひきょう）である」

信玄は地下で苦笑しているにちがいない。長篠合戦の直前、武田軍は長篠城をかこんでいたが、信長出馬とききき、

「決戦はおもうところだ」

と勇んだ。もともと長篠城をいためつけていたのは、家康が本拠の浜松から出てくるのを待つためでもあった。徳川軍の主力をおびきだして野外で決戦し、一挙に勝敗を決しようとしたのである。

が、家康は武田軍をおそれて容易に出て来なかった。ひたすらに信長の出馬を待った。

いよいよ、出てきた。

が、家康ひとりではない。織田の大軍、という景物がついてくる。

勝頼は大いに勇み、

「望むところである。織田・徳川を一挙に破ってみせよう」

といった。

が、織田・徳川は、二倍の兵力をもっている。到底勝ち目はないと見、信玄手飼いの老将馬場、内藤、山県、小山田、原といった連中はこぞって勝頼をいさめ、

「兵をおさめて甲州に帰り、戦さを再興しましょう」
といった。
勝頼は、彼ら老臣の無言の蔑笑に堪えきれなくなった。
「戦う」
その理由は、およそ戦国武将らしくもない非合理なものである。
「退却はならぬ。武田家は、いまだかつて戦わずして敵を避けたことはない。それは卑怯というものだ」
一騎駈けの武者の美意識で、一国の興廃をになう大将の物の考え方ではない。
勝頼は諸将の反対を押しきって強引に決戦にふみきり、諸隊を部署し、滝川を渡って会戦の陣形をとった。
ときに天正三年五月二十日である。
二十一日、夜明け、勝頼は全軍に突撃を命じた。
伊右衛門は、柵内にいる。
織田軍では、別命があるまでぜったい柵外に出ることを禁じていた。
信長の意中では、すべて戦闘を鉄砲足軽にまかせるつもりであった。
だから伊右衛門ら将校は、牧場の柵のなかで飼われている家畜のように手持ちぶさたであった。
「吉兵衛、われわれは能なしにみえるな」



と冗談をいっていたが、ひとつには冗談でもいっていなければこの慄えがとまらなかった。
柵外をみよ。
武田の騎馬隊が、押し太鼓を天地にひびかせながら、寄せてくるのである。
多くは、
武田の赤備え
と称せられる朱具足である。
赤い津波が、伊右衛門らの陣にひたひたと寄せてくる。
（あれが、武田勢か）
整然たる動きである。
歩兵の密集隊形と騎兵の獰猛な突撃は、信玄以来の祖法とするところだ。一万五千の武田兵が、あたかもいっぴきの赤い怪獣に化したように、じりじりと押し進んでくる。
「みごとなものでござりまするな」
と、五藤吉兵衛も、思わず声を放った。
「さすが、日本一といわれるだけある」
伊右衛門も、うならざるをえない。戦国百年にして、ほとんど芸術的とさえいわれる傑作がうまれた。それが甲州の武田軍であるといえる。この武田の戦法、編成は、のちに徳川三百年を通じて、兵学の基礎となったものである。
「射つな。射つな」

と、羽柴秀吉は、三段にかまえている足軽鉄砲隊の隊列をみまわりながら、いった。

信長の命令であった。

鉄砲の有効射程は、四十間である。

その射程内に十分に敵が入ってからでないと、弾を放つな、といわれている。

(信長様は、果して大丈夫かな)

伊右衛門も、内心疑惑が消えない。

軍の主戦力は、あくまで騎馬の槍武者であり、鉄砲足軽は補助部隊であるという古い考え方が、伊右衛門のあたまを去らない。

いや、伊右衛門だけではない。敵将の武田勝頼もそう思っているし、日本中、いや同時代の西洋でも、いま信長がとろうとしている戦法は、百年後でなければ出なかった。

武田軍は、ついに射程近くまで迫った。

伊右衛門らの陣地正面の敵先鋒は、信州の真田信綱、それに土屋昌次の隊である。

武田の押し太鼓の調子が、急になった。

どっと騎馬隊が速度を増した。

ついに、柵内から敵の眼鼻までがみえるようになったとき、各銃隊長が、

「射て」

第一列が一斉に火ぶたを切った。

弾は雨のように飛び、柵を押しやぶろうとしてつぎつぎと突撃してくる騎馬武者をばたばたと



倒しはじめた。

いやもう、凄惨というか。

武田軍が、各部署において展開し、突撃し柵に迫り、柵を押しやぶろうとした。

が、織田方の鉄砲は間断なく火を吐き、五十騎、六十騎、と束にして倒した。

「ほう、ほう」

伊右衛門は、馬鹿のように声を放った。当然なことだ。

鉄砲というのは、もともと、弾をこめ、火薬を詰めるのに、三分はかかる武器だ。

その弾ごめの間隙を縫って騎馬武者が襲ってくるのが常法だが、信長の新工夫はそれをゆるさないのである。

第一列が一斉射撃をすると、すぐ退いて弾ごめをし、その間、第二列が柵に進出して轟発する。

さらに第三列が。

というふうに、この方法をもってすれば後世の機関銃と同様、弾が絶えることなく前面の武田軍に雨注した。

飛んで灯に入る夏の虫、という俗諺があるが、武田武者はそれに似ている。飛びかかってきては柵の前で倒れ、さらに押してきてはあっというまに、百、二百の生命が、地上から消えた。

硝煙は、設楽原の天地にうずまき、ときどき風が来ては、どっと薄れる。

煙の薄れた野一面に、武田軍の朱具足の死体がるいるいとかさなっていた。

天才が勝った。

凡才は亡びる以外ない。

その運命の表裏を、みごとに実現したのはこの天正三年五月二十一日の会戦であった。

武田の勇将たちには、もはや、この野が自殺の場所となった。

退却は、かれらの習性がゆるさない。

（もはや武田家は滅亡ぞ。滅亡とあれば、命も惜しまず、兵も惜しまず、後世にのこる名のみを愛してここに討死せん）

という感情が、全軍の指揮官の頭を支配した。

かれらは、勝頼の愚を憎んでいる。勝頼が支配者になったとき、すでに武田家はほろんだも同然だったとみていた。

むなしい戦いがつづいた。

敵と槍を合わせることなく、柵の前でむなしく斃れた。

山県昌景、内藤昌豊、馬場信春、といった天下にきこえた部将は、無名の足軽の鉄砲にかかってつぎつぎにたおれた。

二十一日の午前六時から、午後二時ごろまでのあいだである。設楽原は屠殺場になった。

——ころはよし。

と信長はおもったのであろう。

陽がやや傾いたとき、茶磨山の本営から攻め太鼓を打ち、貝を鳴らし、一せい突撃を命じた。



全戦線にわたって、柵がいっせいにひらかれ、無傷の織田・徳川両軍三万が、どっと突出した。

「吉兵衛、新右衛門、つづけ」

と、伊右衛門も馬を駈けさせている。

そのころ、武田勝頼は、近習数騎とともに甲州へむかって落ちつつあった。

伊右衛門らは、猟犬のようなしつこさで敗敵の討ち取りに熱中した。

（なんだ、これが天下の武田勢か）

と拍子ぬけするほど、逃げる敵というものは討ちやすかった。

もっとも、追撃戦での首数というものは、武名としてはさほどの評価をうけない。

戦さがおわって近江長浜の城下にもどってきたときは、夏も過ぎようとしていた。

日中、湖の砂浜はなお灼けてはいる。しかし湖北の天は、蒼さを濃くしはじめていた。

凱旋の羽柴隊が長浜城下に入ると、街道のわきにびっしりと御徒士、足軽の留守居家族の者や、農家の男女が土下座して待っている。

侍屋敷はすべて門を八ノ字にひらき、家族は門前で立って凱旋部隊を迎えようとしていた。

千代も、素足に真新しい草履をはき、盛装して門前で立っていた。

先頭の諸隊がすぎ、やがて中軍の騎馬隊が、金の瓢箪の馬印をかかげてやってきた。大将の羽柴秀吉は、山鳥栗毛の大馬に朱塗りの鞍をおかせ、頭に風折烏帽子をかぶって悠々と馬をうたせてくる。

秀吉は、沿道の男女に、愛想よく冗談をいいながら、馬をすすめる。
その行列のなかに、農家のせがれらしい二、三歳の子供が、よちよちとまよいこんできた。
秀吉は馬からおりるなりその子を抱き、たかだかと差しあげて、
「重い子じゃ。たれの子ぞ」
と、にこにこと笑った。
子供は泣かない。よく動く黒い瞳で、そのあたりを見まわしている。
秀吉は、土下座をしている列までちかづき農婦に話しかけた。
農婦は、顔をあげた。恐怖で顔がみにくくゆがんでいた。
「そちの子じゃな。あははは、そちに似合わず度胸のすわった子じゃ。十になれば城へ出せ。児小姓にしてやるぞ」
と、子供を母親にかえし、家来を一人残して村、父の名を聞かせた。
馬上にもどった秀吉は、さらに馬をすすめる。
千代は遠くからその風景をみていて、秀吉という男の心の配りかたを知った。
なにしろ信長の草履取りからあがった男だけに、譜代の家来というものがない。この時代、譜代の家来という自分の手足同然のものを持つ、持たぬでずいぶん大将の働きがちがってくるものである。
秀吉は、これにかわるべきものを持とうとした。
与力、新付の家来だけでなく、その家族にいたるまで自分の腹中におこうという努力である。



だから、足軽の女房にまで、馬上から、やあ、やあと声をかけた。
それだけでなく、百姓にまで気さくに声をかけている。
こういう大将はない。
なにしろ秀吉は長浜二十二万石の主で、成りたてながらも大名なのである。
前時代、浅井家が君臨していたころとちがい、この地方はずいぶん勝手のちがう殿様を迎えた。
さきほど、二、三歳の子供をつかまえて「気に入った、召しかかえてやる」といわれた農婦など、自分の頭では理解できぬこの事態に、よろこぶよりも渋面をつくってぼんやり顔をあげている。
（おかしな人）
千代には、自分の亭主よりも、正直なところ、この秀吉に男性としての魅力をおぼえていた。
「やあ、伊右衛門の内儀か」
秀吉は、山内家の門前で馬をとめた。
「はい。千代でございます」
頭をさげたきりである。
「顔をあげい。そなたの美しい眼をみると、おおおれもやっと長浜の城に帰った、という思いがするぞ」
と、秀吉は、評判の大声でいった。天下の三大声といわれたほどののどの持ちぬしだから、大

げさにいえば全軍に鳴りひびくほどの声だ。
「まあ。おじょうずを。——」
と千代はついそんなはずんだ言葉が口をついて出そうで、こまった。
「このたびの御武運おめでとう存じまする」
「ああ、ありがとう、しかしお内儀」
と秀吉は鞍の上の上体を千代のほうにかたむけて、
「これは内証じゃが、こんどの武田攻めはわしらの戦さではなかった」
「まあ、するとどなたの戦さだったのでございましょう」
と、千代は陽気に反応した。
「なんの、上様（信長）ひとりがなされた戦さよ。わしらは駈けまわっていただけ。まことに楽な合戦であったわ」
秀吉の意図は、全軍へそれをいいきかせるためのものらしい。
武田百三十三万石は、織田家と徳川家のものとなった。が、こんどの戦さでは諸将諸士に対する恩賞は薄かろうと秀吉はみている。あとで不平をいうな、という意味のことを、千代に冗談で語りかけることによって全軍に報らせているのである。
秀吉が過ぎ、やがて伊右衛門が痩せた老馬をぽくぽく歩ませながらやってきた。
伊右衛門の家来十数人が、そのうしろにならんでゆく。この集団は、どういうわけかひどく貧乏くさかった。



主人の馬が馬だから、吉兵衛、新右衛門の馬も、伊右衛門のよりも老けこんで痩せている。それに具足の糸がすり切れ、鉄胴のウルシが剝げてさびついており、新しくかかえた芳蔵という若党などは、胴丸をナワで帯して、それへ安っぽい打刀を一本さしていた。
この一団の貧乏くささは、伊右衛門が禄高以上に人をかかえこんでいることが第一の理由だが、いま一つは伊右衛門の性分によるものだったろう。
他人とおなじ物を着けていても、着古すとどこか貧乏くさくなるたちなのである。
これだけは千代の手に及ばなかった。
その夕刻、伊右衛門は屋敷に帰ってきた。
「千代、命がもって帰ったぞ」
と、それだけは真珠のように白い糸切歯を見せて笑った。
「おん守神の御加護によるものながら、御武運めでたく存じまする」
と千代はあいさつした。
そのあと伊右衛門は家来に手伝わせて具足を解き、それぞれ蔭干しにさせた。湯でながい戦場生活の塵をおとし、夕餉をかるく済ませ、あとは寝所に酒器をもちこんで、千代との二人きりの祝宴を張った。
生還の祝いである。
千代も、伊右衛門にすすめられるままに杯をかさねた。
伊右衛門の酒は、ほんの二、三杯、それを一時間もかかってなめるように飲み、それで結構酔

うというめずらしい酒である。

千代は、酔わない。飲めばおそらく一升でも崩れないであろう。

伊右衛門は、三杯目の杯ですっかり酔ってしまっている。酔いながら、長篠での槍働きを事こまかく千代に語ってきかせた。

「カブト首が二つ、雑兵首が五つ、わしとしてはまずまずの働きだろう」

伊右衛門は自分の力の限度を知っている。

もともと伊右衛門だけではなく、織田信長の旗本である尾張衆というのはそれほど強いわけではなく、尾張育ちの者で豪傑というのはめずらしいといっていい。

織田家の武士が強くなったのは、信長が隣国の美濃を併合してからのことである。美濃の国というのは武辺者が多い。

三河も、武辺の国である。だから長篠での追撃戦は、家康の三河衆が目のさめるような働きをした。

この合戦中、信長は、家康の家来である大久保七郎右衛門、同次右衛門という兄弟の働きを弾正山の本営から見おろして讃嘆し、

「三河殿（家康）はなんとよい家来をもっていることよ。自分はかれらほどの者を持っていない。この者どもは良い膏薬とおなじだ。敵にべったりはりついて離れぬわい」

といったといわれる。



とにかく、兵の強弱でいえば信長の尾張衆は、隣国の三河、美濃、さらに近江などからくらべれば、一段劣っていた。その尾張衆が天下をとったのは、いつに指揮者信長の天才によるものだろう。

「とにかくこんどの長篠合戦は、上様（信長）のお指図が図にあたったわけで、一にも二にも上様お一人のお手柄だと思う。羽柴殿も、わしは柵を結んだだけのことだ、と申されていた。これだけの大勝利ではあったが、たいしたご加増はのぞめまい」

と伊右衛門がいうと、千代も笑顔で肩をすくめ、

「ご加増どころか、上様にお礼を申さねばなりませぬ。あれほどこわい武田勢と戦って、長篠で討死した物頭（高級将校）の者は、織田家では皆無、徳川家で一人、ということでございますもの。上様のお智恵でお命がたすかったようなものでございます」

「そのとおりだ」

「でも、千代には手柄がございましてよ」

「千代に手柄？　なんのことだ」

と、伊右衛門はいぶかしげに千代の顔をのぞきこんだ。

千代は顔を染めている。

「どうした」

「……」

「おわかりになりませぬか。いいえ千代だけの手柄ではありませぬ。一豊様とご一緒のお手柄

とまでいわれて、伊右衛門もやっと気づいた。狼狽して顔が真っ赤になっている。

「千、千代、うまれるのか」

「ん」

と千代はうなずいた。

伊右衛門は、杯を落とした。両手を胸もとにぶらさげて、顔だけがみるみる笑いくずれはじめた。

「まことか」

「きっとそうだろうと思います」

「千代、手柄だ」

「お手柄は一豊様のほうも」

「むろん、わしの手柄でもある。すると、あの出陣の夜か」

「いや」

と、千代はますます赤くなった。

「そうか、これはとほうもない長篠合戦のご加増じゃ」

伊右衛門は、立って歩きはじめた。

翌天正四年の初夏、伊右衛門は石山本願寺攻撃に参加していたとき、国もとからやってきた荷駄の者が、

「長浜のお城下でのうわさに、お子様がおうまれなされたそうで」



といった。

伊右衛門はこの報らせを待っていた。

「奥は達者か」

とせきこんできくと、荷駄の者は、はっきりとうなずいた。

「はい。お肥立(ひだ)ちはよろしいときいておりまする」

「で、男か、女か」

「存じませぬ」

「なんだ、それでは使いの役目をなさぬではないか」

「いいえ、手前はべつにお使いではござりませぬ。おうわさをお伝えしたまででござりまする。おっつけお使いが参りましょう」

それを待つことにしたが、伊右衛門は落ちつけなくなった。

(なにしろ、長篠合戦の陣触れの太鼓をききながらうまれた子だ。山内家の家名をあげるような子になるだろう)

と期待で胸をおどらせているうちに、数日して長浜から陣中に飛脚がきた。

「おめでとうございます」

と飛脚がくどくどあいさつするのを伊右衛門はさえぎって、

「男であろうな」

ときいた。

「いいえ、姫君でござりまする」
飛脚は他人のことだからおちついたものである。
伊右衛門はちょっと落胆したが、しかし子はできぬものとあきらめていた矢先だから、父になったよろこびのほうが大きい。
千代の手紙をひらくと、みごとな達文で、簡単に女児誕生のことを報告してあり、名をつけてほしい、とあった。
伊右衛門は一晩、名を考えたが、いい名が思いうかばない。
あくる日、天王寺口で激戦があり、日暮れてやんだ。
なお考えた。
ついに平凡な名がうかんだ。
よね
というのである。
その旨を手紙で書き、望月六平太を使いにして長浜へ走らせた。
その年いっぱい、伊右衛門は、摂津、河内、和泉、紀州で転戦し、長浜で息づいているはずのおよねの顔をみることができなかった。
翌天正五年の四月、ようやくこの方面の合戦が片づき、長浜にもどった。
「千代、およねを見せよ」
と門に入るなり、いった。



およねは、ねむっていたのだが、千代にだきあげられて、玄関へ出てきた。
眼の切れのながい、千代にそっくりの女児であった。真っ黒な瞳で、まばたきもせず伊右衛門を見つめている。
「千代」
伊右衛門は、抱きとった。たかだかと抱きあげ、
といった。
「この娘を、よね姫といわれる身分にできるかどうか、わしの働きにかかっている」
千代は、おかしかった。眼をかがやかせていう伊右衛門の表情のほうが、当の幼児の顔よりもずっと幼かった。

# 乱世の奉公人

石山合戦のあと、羽柴筑前守秀吉は、主人の信長から付けられていた与力衆を、信長に乞うて自分の家来にした。

与力衆というのは、寄騎（よりき）とも書き、以前に触れたかも知れないが、江戸時代の奉行所役人である「与力」とはすこしちがう。

いわば、出向社員のょうなものである。親会社から派遣されている将校のことで、これがこんどの場合、羽柴という子会社の社員になった、というわけである。

伊右衛門もそのひとりである。

禄高も、二千石にふやされた。不労所得というべきもので、信長直属の旗本が、陪臣（ばいしん）に格下げされたことにともなう見返り、というべき加増であった。

秀吉の家来になったために、それまでは秀吉のことを、

「筑前様」



とよんでいたのを、

「殿様」

とよばねばならなくなった。信長に対しては、上様とよぶことになる。もっとも信長直接には縁がなくなり、このちは良きにつけ悪（あ）しきにつけ、「殿様」である羽柴秀吉と運を一つにしなければならなくなった。

秀吉は、伊右衛門をかけがえない男だとは思っていなかったが、しかし家中の士が思うほど平凡な侍だとはみていなかった。どころか、

「山内伊右衛門一豊は異人である」

とさえいった。

異人とは、奇才、奇骨、奇癖のある人物、というほどの意味である。

その伊右衛門評が、当の本人につたわったとき、本人がふしぎに思った。

（わしが異人か）

自分ほど平凡な男はいない、というのが伊右衛門のかなしみだったのだが。

やがて同僚の口から、「異人」の真意が伝わってきた。

「武功は狩りのようなもので、波があるものだ」

と秀吉はいったらしい。

「大豪の士でも、戦場にのぞんで雑兵首ひとつとれぬことがある。ところが山内伊右衛門は、百姓が田を耕してゆくようにたしかな働きをする。その働きには大功がなくても、あれはあれで尋

常なものではない」

他の大豪の士が猟師型とすれば、伊右衛門は農夫型である、これは平凡なようでまねのできるものではない、というのである。

（ほめられたのか）

伊右衛門はさほどうれしくはなかった。

長浜の屋敷にもどったとき、千代にそういうと、千代は笑いころげた。

「なにを笑うのだ」

「いえ、べつに……」

と千代はあわてて唇をつぐみ、

「笑うつもりではございませなんだ」

と生真面目な顔をした。

「笑うつもりはなくても笑ったではないか」

「でも、筑前様のお言葉があまりに図星だったものでございますから」

「失礼なやつだ」

伊右衛門はおかしくもかゆくもない顔で、千代をみた。

ぱっ、と千代の顔がほころびた。

もうとまらない。伊右衛門の顔がにがにがしくなればなるほど、千代の笑いはとめどがなくなった。



あたっている。

そういう人なのだ、と千代は思った。

天正五年秋、すでに日本列島の中央部をおさえた織田王国は、ついにもっともおそるべき敵と衝突せざるをえなくなった。

中国の毛利氏である。

毛利は山陰山陽十カ国にわたる強大な王国で、兵強く、勇将智将が多い。信長はこの大軍団と衝突することをつとめて避けてきた。

毛利もまた織田氏をおそれ、かげにまわって信長の敵に兵糧、弾薬を供給してはきたが、直接戦いをまじえたことがない。

その時期がきた、と信長は判断したが、この司令官には自分の部将のなかで、たれが適当であるかを考えぬいた。

ついに秀吉をえらんだ。

秀吉にとってこれほどの光栄はなかったであろう。

中国攻めは、四方に多面作戦をしている織田家の活動のなかでも最大の作戦であり、もし誤ればここまで築きあげた織田王国が一朝でほろぶおそれもあった。

秀吉はその司令官にえらばれた。信長は秀吉のために多数の大名を割いてその指揮下に入れた。

秀吉四十二。

一介の浮浪児から成りあがった秀吉の得意たるや、非常なものであった。
むろん伊右衛門もこの動員のなかに加えられる予定になっていた。
（やはり、織田家の数ある侍大将のなかで羽柴様を頼み参らせてきてよかった）
と千代はおもった。
戦国武士は、主人を選ぶ。現今の青年が入社すべき会社を選ぶように。武士たちは選ぶ権利をもっている。主人の器量を見ぬき、これこそ自分の運命を托するに足るとみてはじめて戦場で必死の働きをするのである。
秀吉は信長をえらび、伊右衛門は秀吉をえらんだ。
秀吉の中国への出陣がきまった夜、千代は伊右衛門のために祝い酒を用意した。
「まず一献は軍神摩利支天に」
と、神棚に灯明を点じ、神酒をそなえた。
「さらには羽柴筑前守様のご武運がいよいよ栄えまするように」
と、その神棚に、酒をみたした朱塗りの大さかずきを置いた。
秀吉の運こそ、わが主人伊右衛門にとって大事である。
「さあ、頂きましょう」
と、千代はその秀吉のための大さかずきをおろしてきて、伊右衛門にすすめた。
五合は入っているであろう。伊右衛門はおどろいて、
「千代、こうは飲めぬわ。すこしたすけてくれ」



といった。
千代は、飲もうと思えばいくらでも飲むことができる。
はい、とうなずいた。
伊右衛門が、さかずきのはしをわずかにすすった。
「もっと。一豊さま」
「おいおい、酔うぞ」
「酔うことを恐れているような料簡では大事は成せぬ、と古い御本にもございますそうな」
千代は鮮かな笑顔でわらう。むろんそんな古語などはない。
「そうか」
三口、飲んでほっと息をついた。
「もっと、もっと」
「もう堪忍してくれ。あとは千代、そなたが助けるという約束ではないか」
（仕様がないなあ）
千代は杯を手にとった。
杯を傾けはじめた。白いのどがとめどもなく動き、ついに一息にのみ干してしまった。
中国へ出陣の直前、伊右衛門は、食客の望月六平太のすすめで伊吹山のふもとへ鉄砲猟にでかけた。

供は、六平太ひとりである。

この男は、もう伊右衛門のもとにころがりこんでから数年になるが、その間、口をきいたことはほんの数えるほどしかない。

妙な男だ。

家来にしてやろうといっても、

「いや、食客のほうが気楽です」

といっている。

戦場ではよく働く。とくに小具足（格闘術）がうまく、敵と組みついたら最後、仕止めるまで離さない。

そのくせ自分の功名を人にゆずってしまうというふしぎなところがある。たとえば雑兵首は吉兵衛や新右衛門にくれてやり、カブト首は、自分が組み伏せておいて伊右衛門にとらせるのである。

「どういうわけだ」

と吉兵衛や新右衛門がきくと、望月六平太は理解しがたいことをいうのである。

「わしは、地獄はいやだ」

地獄、とはこの男のいう意味では、侍奉公をさすらしい。

名ある者の首を獲って首帳に自分の名前をのせれば、自然と立身してしまう。立身すればするほど身を置く社会が複雑になって、気楽な暮らしができない、というのだ。

何か、強烈な哲学をもっているらしい。



あるとき、吉兵衛がいった。

「六平太、おぬしの気楽な暮らしというのはどういうことだ」

「猫とおなじ暮らしさ」

と答えた。

吉兵衛らには、よくわからなかった。食べて寝る、それだけの生活である。食物も、自分の腹が必要とする以上はむさぼらず、寝ることも、五尺の体をおおうだけの寝ワラとそれだけの場所があればいい、というのである。

「猫がいいのさ。私は猫性（ねこしょう）だからね。猫は飼いぬしになつかず、そこの家屋敷というねぐらにだけなつくけものだ」

「犬はどうだろう」

「お前さんらは犬さ。よい侍奉公人はみな犬性（いぬしょう）の人間だ。犬をみろ、わかる。犬は猫とちがって飼いぬしにむやみに忠義だ。飼いぬしのためなら何でもやる。犬は猫とちがって自分というものがない。犬は飼いぬし以外の人間にはきばをむき、飼いぬしが命ずればとびかかってゆく。そのくせ、あの連中は、自分の犬仲間とは仲がわるい。あさましいものだ」

「あははは、すると当屋敷には犬ばかりで、おぬし一匹だけが猫か」

「猫だよ」

自由人である、と現今（こんにち）なら望月六平太はいったところであろうが、この時代にはそういう便利な言葉がない。

だから、猫といった。猫主義というわけである。猫の自由さをうしなわないために、伊右衛門の家来にならないというのである。
それとも、別の理由があるのか。
あるらしい、とわかったのは、この伊吹山での狩猟のときであった。
その理由を知ったとき、伊右衛門のきもがすくみあがった。
伊吹山は、近江、美濃の国境の天を画する四千三百尺の高峰である。
北は連峰をつらねてはるか越前の山々につづき、南は切り落したような壁になってその壁下にせまい街道が走っている。街道の名を、中山道という。
二人は、西南麓の春照という山里からのぼった。
「六平太、ことしは伊吹に羚羊がふえているそうだ。あの毛皮は、鞍のしとねによい」
伊右衛門はいいながら、ややのぼって、上野という部落でその日はとまった。
上野は、名のとおり、山間の野である。松や柏が多く、谷間には薬草が多い。この山の者は薬草を採って、京や堺から買いにくる商人に売るだけで相当な収入になる。
宿は、女一権現の宿坊で、間数が二十ほどある大きなものであった。
六平太は宿には入らず、
「この上に、三所権現の参籠堂がござる。ここまできたのを幸い、手前は今夜、それへ参籠いた



しますゆえ」
といって、さっさと森の中へ消えた。呼びとめるすきもあたえない。
(かわった男だ)
伊右衛門になじんでいるようにみえて、どこかそらぞらしい気配をもっている。
日が落ちた。伊右衛門は、こまった。自分の炊事をしてくれる者をみつけねばならなかった。
ところが、隣室にとまっている女が、ふすまごしに、
「かしぎをしてさしあげましょうか」
といってくれた。
「ありがたい。そう願おう」
と、伊右衛門は燭台に灯を入れながら応じた。が、すぐ首をひねった。
(どうも聞いたような)
声である。
「もしや、小りんではないか」
「ふ」
ふすまのむこうで、笑う気配がした。
「そうです。よく覚えていてくださいましたこと」
「忘れてはおらぬ。わしにとって、奥以外に触れたただ一人の女だ。しかしなぜかような山里にいる」

「わざわざ」
「というと？」
「来たのです。六平太殿が、殿がこの里へおみえだ、というので」
「おどろいた」
と伊右衛門は隣室のふすまをひらいた。
灯が消えた。
「あ、なぜ灯を消す」
「あれからあしかけ七年になります。齢が、顔に出ているのをみられるのが、いや」
「小りんらしくもない」
闇の中で、小りんの手をとった。ひきよせると、体ごとぶつかってきた。
抱きすくめ、そのまま小りんの体を折って倒した。
唇をあわせ、小りんの体臭をかぐと、七年という歳月がうそのように消え、京の空也堂で抱いた日がまだ昨日のように思えた。
「最後は、横山城下の林の中だったな。あれから、どうしていた」
「死んだのよ」
「えっ」

平凡、といっても、伊右衛門の生涯にも、一つ二つは、奇異なはなしがある。



この宿坊の一夜がそうであった。
小りんは、灯をおそれた。伊右衛門がどうせがんでも、燭台に灯を入れようとはしなかった。
（おかしなことをいう）
とは思ったが、強（し）いて反対するようなことでもなかったので、闇の中に沈んでいた。
やがて、小りんは席を立ち、宿坊の台所のほうへ姿を消した。四半刻（しはんとき）も待つうち、再びあらわれたときは膳部をととのえていた。
（よくまあ、この暗さで立居振舞ができるものだ）
と伊右衛門は感心した。
小りんは、シトミ戸を上げた。昇りそめた月が格子の間からさしこんできた。
伊右衛門は、箸をとった。
眼の前の小りんの姿が、半身に淡い光を浴びて、この世のものでないほどにうつくしい。
小りんは、闇の中から手をのばして酌をしてくれた。
「いや、あまり飲めぬ」
「そうでございました」
小りんはたのしそうにいった。
「三杯もおすごしになると、真っ赤におなり遊ばしたのをおぼえています。伊右衛門様のことは、かたときもわすれたことがありませぬ」
「ありがたい」

といったが、伊右衛門は、背筋が寒くなっている。小りんとのことはほんの一時の過(あやま)ちのつもりでいたのだが、小りんのほうでは想いつづけているという。気の重くなるようなはなしである。

「まあ、しかしわしはくだらぬ男だ。そういう男もいた、ということで忘れてくれるほうが、より有難い」

「そうは参りませぬ」

と、小りんは眼をほそめた。月光のせいか凄艶といえるほどの眼の表情であった。

「なぜそうは参らぬ」

「殿方には一時の浮気であっても、おなごのほうではそれが生涯である場合が多うございます」

「おどすものではない。わしには、千代という大事な女房がいる」

「お仕合せでありましょうな」

「まあ、そうだ。子供もうまれた」

「きいております」

と、小りんは沈黙した。

しばらくして、

「岐阜にまだお住いのころ、何度かお屋敷の前をうろうろいたしました。しかしそのつど、六平太殿に叱られ、とうとう御門の中へは入ったことがございませぬ」

「そ、それはよい分別であった。入ってもらってはこまる」

「冷たい」



「そういうものだ。わしにはわしの世界がある。こわされては、西も東もむけなくなってしまう」

「伊右衛門さま。おなごはこわいものでございます」

「小りん、お、おどすものではない。わしはそなたにどれほど悪いことをした。そなたの体を抱いただけのことではないか」

「それが男」

小りんは、いよいよ眼を細めた。

「ほんの出来ごころだったと申されるのでございましょう？　おなごはそうは参りませぬ」

「どうせよ、というのか」

伊右衛門は、月光のなかにうかんでいる小りんの姿がこわくなってきた。

(報(むく)いだ)

と、汗が流れた。千代との誓いを破ったむくいであろう。

(もう生涯、おなごに出来心はもたぬ)

箸を置いてしまっている。膳の上では、干し魚がすっかり固くなっていた。

「どうぞ、お召しあがりになりますように。それには毒は入っておりませぬ」

「入れられてはたまらぬ」

「——どうぞ」

小りんが、酒器をとりあげた。
「その杯をおとりくださいますよう」
「もう、酔っている。かんべんしてくれ」
「いやでございます。今夜は恨みのかぎりをきかせて差しあげますから、小りんの注ぐままにお受けくださいませ」
「小りん、わしはおそろしくなっている」
と、伊右衛門は杯をとりあげたものの、手がふるえて、酒が受けられない。
「正直な方」
と、小りんは伊右衛門のそばに寄って来、杯をもつ伊右衛門の左手の手首をおさえた。
「ほら、慄えがとまった。小りんは何をしようというのではないのです。ただ、この一夜飲んで頂き、抱いて頂きたいとおもっていますだけ」
「本当か」
ほっとした顔を、小りんにむけた。
「本当です。小りんは遠い国におりますために、今後、もう一度抱いてください、とは申しませぬ」
「どの国にいるのだ」
「遠い遠い国」
小りんは、伊右衛門のひざにもたれて、下から伊右衛門を見あげた。



体が、温かい。
（やはり、亡霊ではない）
伊右衛門は、ほっとした。
「すこし元気づいた。飲もう」
「うれしい。そのお杯をわたくしにも。いいえ、お唇（くち）移しでなければいやでございます」
伊右衛門は酒をふくみ、小りんを抱きすくめて、その唇を割ってそそぎ入れた。
「おいしい。こんどはわたくしが」
と、小りんが酒をふくみ、伊右衛門の口へ入れた。
それが胃の腑におさまるころ、伊右衛門の体にふしぎな酩酊がおこった。淡紅色の雲を踏むような気持である。
「小りん、これは普通の酒ではないな」
「ええ、そうです。出来心のお酒というようなものかしら。そのときはよくても、あとからの後悔がこわい」
しばらくして、床に入った。
酔いはなおつづいている。月が中天に移ってもなおつづいていた。
「小りん」
と、伊右衛門はいった。
「さきほど、遠い国と申したが、いったい、いまどこにいる」

「伊右衛門さまのおそばに」
「いや、住まっている土地はどこなのだ」
「おどろかないで」
寝床の中は温かい。
「十万億土」
うそだろうと思い、伊右衛門はみぞおちを動かして笑いはじめた。

「おどかすものではない」
と、伊右衛門はすっかり安堵して笑いつづけている。
「そなたのように可愛い亡者ならば、ときどき出てきてもらいたいものだ」
「またそのようなことをいう。小りんが本気にして出てきてもよろしうございますか」
「その憎体にいう唇が可愛い」
と、伊右衛門は小りんの上にかぶさって唇を吸った。もうさきほどの恐怖がなくなって、いっぱしな蕩児のような気分にひたっていた。
あの酒の酔いは、いよいよ伊右衛門の気分を陶然とした世界に誘い入れてゆく。
「本当に十万億土です」
「それはきっといいところだろう。わしも行ってみたいものだ。しかしなぜそのような国へ行った」



「聞かせてさしあげます。そのために今夜、わざわざこのような伊吹の山里にまできたのですから」
「まったく、ご苦労だった」
「いい気なものねえ。ご自分の身が安全となると、殿御はみなそのような軽口をおたたきになります」
「いや、本心だ」
「本心々々って、この体のどこについているのかしら」
小りんは伊右衛門の胸に、かさこそと指を掻き走らせてみた。
「ふっ、こそばゆい」
「こそばゆいだけがご本心」
小りんは、爪をたてた。
「痛。——」
伊右衛門は、身をまげ、曲げた拍子に右側に臥ている小りんを抱きよせようとした。
が、空をつかんだ。小りんはそこに居なかった。
（……？）
不審におもったが、酔っている。すぐ小りんが左側に臥ていることに気づき、
「なんだ、そこにいたのか、勘ちがいした」
と、苦笑した。

「わたくしはね」
と、小りんは枕に頬をつけながら、闇のなかでいった。
「死んだのです」
「えっ」
「横山城下の林のなかでお逢いしたあと、甲賀のさとに帰りました。そこで児を」
「児を？　たれのだ」
「むろん、伊右衛門さまの。しかし産めなかった」
死産した、というのである。
「知らなかった」
「児だけではございませぬ。わたくしの命まで、その児が持ってゆきました」
「しかし、ここにいる」
「ええ」
じっと、枕に頬をもたせながら、伊右衛門を見つめている。
「お知らせ申しあげたかったのです。わたくしが伊右衛門さまのお胤をお受けして母になりかけたこと。そのあと母子ともに死んだこと。そのことを御当人が知らずに、ぬくぬくと長浜のお屋敷で千代様とお暮らしなされているのがくやしくて」
「おいおい」
「出来心だったとはもう言わせませぬ」



眼がさめたときは、朝になっていた。
あとは覚えていない。
「おい。……」

一体、こういうことが世にあるものか、どうか。
朝になった。眼をさましてみると、伊右衛門は自分の部屋で、掻巻をかけられて臥ている。
(——これは？)
はねおきて、襖をあけた。隣室にはひと気もない。
(かびくさい)
シトミ戸をはねあげて、陽を入れた。板敷や薄べりの上に、枯葉が散乱している。数カ月、人の足が踏み入れたこともない様子だった。
(はて、狐につままれたような)
たしかに、小りんがここにいたし、まだ青々とした畳が敷かれていたような記憶がある。
やがて、望月六平太がもどってきた。
「どうなされた、お顔の色がよくありませんな」
と、縁側でいった。
「六平太、小りんに会った、ここで」
「ここで？」

六平太は、笑いだした。

「左様なはずはござらぬ。小りんはすでに五年前に死んだ、産を仕損ねて。殿のおたねであったと申すが、はてそれがしのたねであったかもしれぬ」

「死んだか、ゆうべのは」

「夢を見ておわしたのでござろう。ところで殿、鉄砲猟のことはさておき」

と、縁側に腰をおろした。

「織田家を見限りませぬか」

「な、なにをいう、藪から棒に」

「あははは、拙者にとっては藪から棒ではありませぬ。殿のお屋敷の食客になった日からこの用件はつづいている」

「どういう意味だ」

「お祭しのわるい。わしは中国の毛利家に身を売っていた。織田家の動きを逐一知らすのがつとめでござった」

「諜者か」

伊右衛門はふるえがきた。律義な織田侍としていままで奉公を仕とげてきたのに、なんという不覚であろう。

「おのれは、諜者か」

刀をとって踏みだそうとした。



その右脚に、六平太がとびついた。針をふくらはぎの血管にあてている。

「殿、この針には猛毒をぬってある。動きなさるな。さわがずにわしの話をきいていただく」

と、早口でいった。

「殿、いまや織田家では羽柴筑前守を大将に仕立てて大がかりな中国征伐の軍をおこす。あとは、戦さじゃ。もはや諜者の用もないゆえ、毛利家に帰る。ことのついでに、殿にご転身をすすめたのは、織田家はゆくゆく見込みはない。亡びる」

「なぜだ」

「なるほど、北陸、甲斐、信濃は織田家のものになったが、これからはそうは参らぬ。信長の実力で西の大国を破れるか。山陰山陽十ヵ国の毛利氏がいる。四国四ヵ国の長曾我部氏がいる。南九州を領してその兵天下第一といわれる島津氏がいる。勝てるか」

「………」

「見切りをつけるころでござる。織田家は信長の増上慢により、内部からくずれる日も近うござろう。裏切者が出る。毛利ではそうみている。そうなれば、四分五裂じゃ。毛利にお仕えなされ。それがしが口をききましょう」

望月六平太は、毛利家の外交官だった安国寺恵瓊という禅僧と、密接な関係があったらしい。

安国寺は毛利へ、信長についての観察を、

「いまは日の出の勢いだが、やがて高ころびにころぶでありましょう」

と書きおくっている。その観察と、六平太の観察は一致している。

だからこそ、

——織田家を見限りなされ。

といったのであろう。六平太は親切でいっている。顔に真情が出ていた。

「六平太、そちはさとい。わしは鈍だ。奉公は鈍なるが仕合せ、と千代も申した。これでよいと思っている」

と、伊右衛門はいった。

「千代に言わせれば、侍奉公をする者には、無用の智というものがあるそうだ。主家と他家をくらべるという智である。この智ほど奉公を痩せさせるものはない、と千代は申した。無用の智である証拠に、六平太、そちはそういうことにさといが、しかしただの甲賀者にすぎぬ。わしは牢人からたたきあげて、二千石を知行している」

「その二千石が人の一生にとって何だ、という疑いをもったことのないお人と、この話はできぬ」

「その疑いはわしももつ」

と、伊右衛門は、めずらしく翳のある微笑をうかべた。

「が、詮のないことだ。六平太、離せ。そちを討たぬ」

六平太は、離れた。

縁側へ出、庭へとびおりた。伊右衛門はあとを追った。



「六平太、待て、小りんのことだ」

「というと？」

「たしかにあの者は死んだのか」

「知らぬな」

と、意味ありげな笑顔をむけた。

「伊右衛門、長らく世話になった。昨夜の小りんは、この六平太の礼物だと思ってくれ」

「礼物？」

「不粋ものだが、明かしてしまおう。小りんは生きている。しかし老い、容色が衰えた。恥じて、ああいうかたちでおぬしと添い寝した。あの女らしい才覚だ。またまたこのさき、おぬしと夢で枕を交すかもしれぬ。そのときは昨夜のように可愛がってやってくれ。小りんは、おぬしが生きているかぎり、おぬしの夢に出る」

「い、いま小りんはどこにいる」

「山をくだっているだろう。わしと毛利へゆくつもりだ」

六平太は、垣根をまたぎ、杉木立のむこうへ姿を消した。

翌日、伊右衛門は長浜へもどった。

「千代、獲物はなかった」

「まあ、青いお顔」

「庭の青葉が映えているのだろう。ただ、伊吹の山中で六平太に去られてしまった」

「諜者でございましたからね」
「えっ、知っていたのか」
「ええ、一豊様にはだまっておりましたが、あのような者を飼っておくのもおもしろいものでございます。織田家のこと、諸国のこと、さまざまと、話してくれて、千代は居ながらに世の辻に立っているようでございました。いずれまた、もどって参りましょう」
「……そ、そちはどれほど利口なのだ」
伊右衛門は、千代がこわくなった。



# 十両の馬

羽柴秀吉が、信長の派遣司令官として中国の毛利氏を討つために安土（あづち）城下を発向したのは、天正五年十月二十二日である。
伊右衛門もむろん陣中に加わった。
望月六平太が予言したとおり、この戦いは織田家にとって最大の難戦になった。
が、秀吉のことだから、無理をして兵を損耗させることはしない。戦闘と外交をたくみに織りまぜながら、事をすすめている。自然、長期戦になった。
なにぶん、毛利氏は強大すぎるのである。
秀吉は、毛利氏の領国に一歩も踏みこむことができず、その入り口の播州（兵庫県）三木二十余万石の領主別所長治のために食いとめられ、三木城攻囲戦にひどく手間をとった。
「いつ、毛利の兵を見るのだ」
と、若い武士たちはこぼした。

無理はない。播州に入ったのは天正五年である。翌六年は滞陣のまま過ぎ、同七年の正月になっても、まだ播州から動けないのである。

しかも正面の敵は、毛利氏ではない。

毛利氏の同盟軍として前哨戦を担当している別所氏なのである。

「これは長い戦さになる」

と、伊右衛門はおもった。中国の毛利領へ攻めこむまでに老人になるのではないか、とわらう同僚もあった。

こまったのは、乗馬であった。一頭は病死し、乗り換えの一頭は弾丸にあたって死んだ。いま乗っているのは敵から奪った馬で、ひどく老いている。

「一丁も駈けさせると、息が切れおるわ」

と、伊右衛門は郎党たちにこぼした。

郎党の吉兵衛、新右衛門は、もっとひどく、荷駄の馬に乗っていた。

「殿、こんどの戦さは敵の首よりも、まず馬を奪うことがかんじんでござりまするな」

と、吉兵衛はいった。

伊右衛門主従は、戦闘を待った。年が明け、天正七年。

城方は、ようやく飢えはじめた。

三木城は、播州美囊(みの)郡の西部にある。鉢を伏せたような丘の上に築かれ、北は三木川をめぐらし、東は繁茂せる竹林でおおわれ、本丸、二ノ丸、新城、さらにやや離れて、鷹之尾、宮之上という支城が連結し、これらに七千五百の兵が籠城している。



二月六日、未明、城門がにわかにひらき、攻囲軍に対して最後の決戦を仕かけてきた。

戦闘は、各所でおこった。

伊右衛門はこのとき、平井山の秀吉の本営の近くに野営していたのだが、敵襲、と知るや、ものもいわずに馬にとりついた。

駈けた。

吉兵衛ら郎党が、あわててあとを追った。

「殿、殿、槍働きよりも馬を奪(と)るのが第一でござるぞ」

「わかっておるわ」

伊右衛門は、敵の前隊の中に突入し、そのままななめに横切って駈けぬけ、田のあぜで馬首をめぐらして、手綱をひきしぼりつつ、敵勢を見た。

伊右衛門は、動かない。

成算がある。執念とはおそろしいもので、伊右衛門は、独特の馬奪りの技術を工夫していた。

(はて、うまくゆくかどうか)

敵の一騎が、伊右衛門をみた。槍をきらめかせて驀進(ばくしん)してきた。

敵は、黒具足に、金の半月の前立(まえだて)を打ったカブトをかぶり、鹿毛(かげ)の肉厚く骨格たくましい馬に乗っている。

それが、地を蹴って駈けてくる。
（ころはよし）
と伊右衛門は見、
びしっ、
とわが乗る老馬にムチをくれた。
老馬は仰天したように駈けだした。が、足はおそい。
敵は槍をあげ、疾風のように駈けてくる。
擦（す）れちがおうとする寸前、伊右衛門は敵と反対の右側に上体を傾け、左足をアブミからはずし、敵のアブミを力まかせに蹴返した。
みごときまって、敵の腰が鞍からすべり、あおむけざまに落下した。
伊右衛門はすばやく馬を旋回させ、空馬に追いつくや、手綱をひろい、馬を寄せて行って、すらりと乗り移った。
秀吉はこの情景を、平井山の上から見おろしていた。
「伊右衛門のやることよ」
と、笑いだした。
やがて秀吉の視野の中にある伊右衛門は、ぐるぐると輪乗りをはじめた。落馬した男が槍で突きかかって来るのを避けているのである。
やがて伊右衛門は、逃げた。男を避けた、といったほうが正確でいい。なぜなら、そのまま馬



腹を蹴って敵陣の中に駈け入って行ったからだ。
「味なことをする」
秀吉は、草摺（くさずり）をたたいて大笑いした。
落馬した敵に槍をつけなかったのは、伊右衛門らしい律義さであろうと思ったのだ。敵の身にすれば、馬をぬすまれた上に首まで奪られては立つ瀬がない。伊右衛門は、酷なことのできぬ男である。
「あの男らしい」
秀吉は、伊右衛門に好意をもっている。ありようは、それほど味な心配りではなかった。落馬した敵が、槍をもって起きあがった形相があまりにすさまじかったから、思わずおびえて駈けだしたまでであった。
駈けだした方向が、気づいてみると崩れようとしている敵の真直中（まっただなか）であった。
これには伊右衛門もおどろいた。
槍が、四方八方から来た。
（いかん）
逃げようとすると、徒歩（かち）立ちの者五、六人が三間柄の槍をふりまわして、伊右衛門の馬に突きかかってくる。
「どけ、どけ」
と、伊右衛門は防ぎながら夢中でさけんだが、敵はいよいよ執拗であった。

「おのれ、織田侍、名を名乗れ。戦場でこすずるく馬を稼ぎ奪るとは、侍の風上にもおけぬ男よ。名を言いふらして辱しめてやるわ」

と、徒歩兵の一人がわめいた。おそらく馬を奪われた武者の家来どもであろう。

伊右衛門は、一人を馬足で蹴倒し、一人を槍で突き伏せたが、背後にまわった男が、馬にずぶりと槍を入れた。

「わっ」

と馬が棹立ちになった。

伊右衛門の眼に青い天がみえた。体が宙に浮き、どう、と落馬した。

敵は、城門へ敗走した。

その日の戦闘がおわって、平井山のふもとで、秀吉の首実検がおこなわれた。

秀吉は、背後に幔幕をめぐらし、中央に床几をすえてすわり、つぎつぎと武者がもってくる首を実検した。

別所方は、この戦闘で名ある者三十五人を失っている。

「これで、しまいか」

と、秀吉は最後に、奏者に念を押した。

「はっ、これで終わりましてござりまする」

「山内伊右衛門は、来なんだな。今朝がた、平井山から見おろしていたとき、伊右衛門の働きはすさまじかった」



なるほど、馬を奪るまではすさまじかったが、せっかく奪った馬が斃されたとき、落馬して腰骨を打ち、起きあがることもできなかった。

そこへ郎党の五藤吉兵衛、祖父江新右衛門らが駈けつけて敵を追い、やっと後方へ収容したのである。

夜、秀吉は各隊の陣地を巡視したとき、伊右衛門の宿陣の民家を訪ね、

「どうだ、痛むか」

と見舞ってやった。

伊右衛門はあわててわらの上に起きあがって拝礼した。

「伊右衛門、せっかくの鹿毛を失ったか」

「あ、ご覧じあそばされておりましたか」

「わしは、何でも見通しよ。あの鹿毛、ながい籠城で痩せてはいたが、なかなか悍のつよそうな逸物だった」

「わが馬までうしない、面目次第もございませぬ」

「そなたのおもしろいところだ。武功はなかったとはいえ、千代へのみやげ話はできたろう」

「おそれ入りまする」

その後の戦場では、伊右衛門はやむなく徒歩で駈けまわった。しかし徒歩働きでは気があせるばかりで目のさめるほどの功名のあるはずがなかった。

三木城はほどなく陥落し、そのあと地侍どもが籠る小城の掃蕩戦が一月ほどつづき、播州一円は織田氏のものになった。

秀吉は三木城に守備隊を残して、信長の居城安土へいったん凱旋した。

中国への本格的な進攻は、準備をあらたにして行なわれることになったのである。

伊右衛門も、長浜の屋敷へ帰った。攻撃の再興まで当分の休養がゆるされるであろう。

「いや、千代、こんどの合戦はひどかった」

と屋敷に帰るなりいった。

「武神に見はなされたか、運はことごとくわが前をそれて行った」

「うそでございましょう」

と、千代は笑いながら伊右衛門の体を見まわした。

「別段、お見離されになったご様子もございませぬが」

「げんに、ほんの武功もない」

「しかし、お命だけは千代のもとにお持ち帰りくださいました。なによりの武運ではございませぬか。きっと」

と、千代はうまい言葉をさがし、やがて眼をあげた。

「武神は、一豊様にもっと大きな功名をたてさせるために、とりあえずお命だけをお救いくだされたのでございましょう」

伊右衛門は妙な男で、女房の千代からこう励まされるとなにやらそういう気がしてきて、元気



のよみがえる男なのである。

「そうかな、千代」

うれしそうな顔をした。

長浜から南へ十里。

琵琶湖の岸に、信長のあたらしい本拠である安土の城下町が建設されつつあった。

伊右衛門は、この日、――つまりかれの「山内一豊」という名が後世の子女にまで知られるようになった伝説的な事件のおこった日、安土城内の羽柴屋敷に数日前から逗留していた。

城外でひらかれる馬市を見物するためである。もし手にあう良馬があれば買おうと思っていた。

朝はやく、羽柴屋敷を出た。

背後に、七層七丈というこの国にかつて現出したことのない壮大な天守閣が、湖国の雲を背にそびえている。

(壮麗なものだ)

天守閣。

というあたらしい言葉も、この巨楼の出現によって普及した。

城下に布教施設をもつ南蛮人でさえ、この天守閣には舌を巻いた。

織田家の領域はまだ五百万石を越えないが、すでに、京、大坂をおさえ、天下に号令しようという勢いを見せている。その勢いを象徴したものが、この巨城であった。

（よき家に仕えたものよ）

と、伊右衛門は自分の運のよさに、胸のおどるような気持がするのである。この気持は伊右衛門だけではなく、織田家の侍のすべてに共通するものであった。

（働きの次第では、のちに大名になれるかもしれぬ）

というのも、もはや夢ではない。なぜならば、いまだ征服されざる地が、奥州、関東、北越、中国、四国、九州というぐあいに、ひろびろとひろがっているのである。

信長は、つぎつぎと征服してゆく。そのつど、織田家の武士団のなかから大小の大名が出来てゆくというわけである。

織田家では、足軽小者まで、大名の夢をもっている。その希望を勇気づけているのが、この七層七丈の巨楼であった。

安土は、水郷である。空がひろく、野がひろがっている。自然、この城と町に照る日ざしは、ひどくあかるいのである。

（よいところに城を築きなされた）

伊右衛門は、街路をゆっくりとあるいてゆく。往還する人の数も多い。

武士も多いが、商人がやたらと多い町であった。この点が、他の諸豪族の城下町とはちがうところであった。

信長は、政策として商人を誘致した。商売ができやすいようにした。

他の諸豪族の城下では、商人の活動がひどく不自由なのである。営業権を、神社仏閣がにぎっ



ていたり、領主が関所をふんだんにつくって物資の出入りに高い税金をかけて、流通しにくいようにしている。

が、信長はすべてそういう邪魔物をとりはらい、いわゆる楽市楽座とした。自由商業にしたのである。

安土の馬市のさかんなのも、それが理由であった。

馬市は、城外の野で立っている。

伊右衛門がそこへ行ったとき、すでに五百頭以上の馬があつまり、伯楽、武士などが柵のあちこちにむらがって、戦場のような騒ぎであった。

「よう、伊右衛門どの、あなたも買いに見えられましたか」

と、一人の巨漢が声をかけた。

まだ十六、という若さだが、背は六尺に近く、筋骨のたくましさはとても伊右衛門などのおよぶところではない。

秀吉の妻寧々の遠縁にあたる若者で、十四、五のときから小姓組に入れられ、秀吉から、

「虎、虎」

とかわいがられている。のちに伊右衛門よりもはるかに大身代の大名になった男で、加藤虎之助清正といった。

「これは於虎どの。お手前も？」

秀吉の縁者だから、いんぎんに伊右衛門は応答した。
「なんの、今日の馬市は東国奥州から曳いてきた逸物ぞろいゆえ、われらが分際ではとても買えませぬ。せめて見るだけでもと思うて来たが、これはかえって眼に毒でありますな」
と、虎之助がいった。
「わしとて、ご同様でござる」
「なにをおおせられる。伊右衛門どのは二千石の身代ではありませぬか」
「いやいや、家来が多うございましてな、わしは具足を繕う金にもこまるほどじゃ」
「馬よりも人を飼いなされたか。そのほうが物頭（将校）の心掛けでありましょうな」
虎之助は、伊右衛門に興味をもっているらしい。非力なこの古参侍が、つねにどの戦場でもそこそこの功名をたてるのは、よき郎党が多いからであろうとみていた。
「しかしそれにしても手前の馬は、人に見られるだにはずかしい」
と、伊右衛門は、しんぞこからいった。
「於虎どの、あの栗毛は」
と伊右衛門は柵の中の一頭を指でさし示した。
「黄金二枚と申すわ。いやいや、とても手前のような一騎駈けの近習の手にあうしろものではありませぬ」
「黄金二枚。……」
伊右衛門は、うなる思いである。



虎之助は、自分が買えもしないのに、めぼしい馬の値はみな諳んじているらしく、伊右衛門を柵から柵へと案内して、
「あの鹿毛は黄金一枚」
「あそこに足掻いている星鹿毛は銀で七枚と申しております」
などと説明した。
「なるほど、のう。これだけの逸物があつまるとは、東国の商人も織田家のご隆盛を知っている証拠じゃ」
「岐阜のころはいかがでございました」
と、虎之助はむかし話をききたいらしい。
「信長様が岐阜城にお入りなされた当初は、東国から馬商人がやってくることは、年に何人もござらなんだ。あの当時、東国の馬は、多くは小田原の北条氏に買いとられ、北条氏の城下で売れ残った馬を、甲州の武田、越後の上杉などの城下にひいて行ったという。なかなか岐阜城にまでは逸物はあつまらなかったような記憶がある」
言いながらも、伊右衛門の眼は、あちこちの馬にするどく配られている。
午後になった。
伊右衛門はさすがに見くたびれて、そのあたりの石に腰をおろし、にぎり飯をとりだした。
虎之助は、朋輩がきたのでその群れのほうに行ってしまっている。

そのときである。
遅着きの商人がひとり、たった一頭の馬をひいて入ってきた。
伊右衛門は、おもわずにぎり飯をとりおとして立ちあがった。
（なんと、みごとな）
声をのんだのは、伊右衛門だけではない。
さしも喧騒をきわめた馬市の場内が、この一頭の出現で、しーんと静まりかえってしまったのである。
その中を、馬がゆく。
毛は山鳥芦毛といわれる複雑なもので、褐色、赤、黄、それに白毛がまじり、タテガミは暗褐色、尾ははなやかな黄味を呈している。
琵琶股がたくましく張り、肩の車骨の幅がたっぷりと広く、四足は麻を立てたように肉なく伸びている。その歩きざま、俗に鶏足といわれる軽やかなもので、正直なところ伊右衛門はこれほどの馬を見たことがない。
武士たちは、この馬のまわりにびっしりと人垣をつくった。
「ほほう、面に寿星が出ておるわ」
と、馬相を説く者があるかと思えば、
「眼がよい。一見柔和に見ゆるが、眼底になみなみならぬ光彩がある。それも、見る場所によって色が変わるわ。色移りするは最上、というが、これほどの眼をみたことがない」



という者もある。
「どこの馬じゃ」
たれかが、きいた。
馬商人は、背の低い老人である。
「奥州南部」
と、傲然といった。はるばる奥州の地から、たった一頭の駿馬をひいて商いにきた男だけに、いいかげんな妥協をゆるさぬ面構えで、武士たちの中央に突っ立っている。
「おやじ、いくらだ」
と、一人の武士がいった。
「いくら？　眼がござろう。それも天下最強といわれた織田家の御家中のお歴々じゃ。これだけの馬を見れば、おのずと値の見当がおつきなさるはずじゃ。値をそちらさまからうかがおう」
「黄金四枚」
慄えるような声をあげた男がある。伊右衛門の朋輩の藤堂高虎であった。
「あっははは」
南部の馬商人が、高声で笑った。笑っただけで、高虎の付け値を黙殺した。
みな、怖れた。
それ以上の黄金を出せる武士などは、家中でもそう多くない。
そのとき、人垣をかきわけて前へ出た男がある。杉原治右衛門といい、信長の部将明智日向守

光秀の家来で、主命により馬を買いにきた男である。

「黄金五枚」

と、杉原がいった。

馬商人は、鼻の穴を天にむけて、知らぬ顔でいる。

杉原は、恥じ入って人垣のなかにかくれてしまった。それ以上の値では、主人からゆるされている予算にあわぬのであろう。

「おやじ、いくらで売るのだ」

と、入れかわって加藤虎之助が人垣の前へ出てきて、いった。

「買う気かね」

おやじはうそぶくように虎之助をみた。

「いや、値をきいている」

「あははは、これはおそれ入る。それはやつがれのほうからききたいところでござりますわい。このやつがれ、ばくろうをして五十年になる。シタが、これほどの名馬はあつかったこともなければ、見たこともない。天下に売りあるきたいと思った。できれば天下の具眼の士に値をつけてもらいたいと思った」

織田家の侍たちは、この老人に試されているのである。もし妙な値をつければそれだけの眼しかないとあざけられるであろう。



馬を見つめている伊右衛門の顔は上気している。いまにも毛穴から血を噴きだすのではないかと思われるほど頰が真っ赤だった。

（ほしい）

気が狂いそうだった。あれが真の馬だとすれば、自分がいま乗っている馬などは、犬でしかない。

「これは馬ではない。竜でござる」

おやじは、得意になっている。

（なるほど竜か）

そうみればそうも思える。何十万、何百万頭の馬がうまれるなかで、ひょっこり竜の子がまじっていることもありえぬわけではないであろう。世の中にはそうしたこともあってふしぎなことではない。

「おやじ。……」

伊右衛門は進み出てしまった。

「わ、わしが、値をつけよう」

「おお、買いなさるわけじゃな」

「……」

伊右衛門はひるんだ。買う、といっても黄金一枚のかねも、自分は持たないではないか。

伊右衛門が真っ赤になってだまっているのをみて、おやじは急に顔をやわらげた。

「ずらりと拝見するに、この織田様のお侍がたのなかで、あなたさまの眼がいちばん気に入った。この馬をわかっている眼でござりまするな。お待ちなされ、値は言いなさるな」

そういったのは、伊右衛門の粗末な麻服を見たからであろう。この奥州のばくろうは、執心と懐ろ勘定とが釣りあわぬ伊右衛門をあわれと思ったのにちがいない。

伊右衛門は、それ以上、値を口にする勇気をうしなった。足がふるえている。

「まああとで……」

というような微笑をおやじは伊右衛門に送って、他の者に眼を移した。

「いや、これはおそれ入った。天下の織田家じゃと思ってはるばる奥州から参ったが、これは連れて帰らずばなるまい。それとも、——よ」

とおやじは馬の名をよんで、

「西へくだって安芸広島なる毛利様のお城下へでもゆくか」

と、つぶやいた。どうも芝居気の多いおやじである。

「それでは、今夜はお城下で泊まってゆるりと思案することにしよう」

みな、ぼう然としている。これほど辱しめられても一同腹もたたないのは、おやじの連れている馬があまりにみごとだったからであろう。

おやじは、馬をひいて歩きだした。

伊右衛門はどうかしている。魅入られたようなかっこうで、馬のうしろからついて行った。



はんの老樹がある。

その樹蔭までできたとき、おやじはふりかえって、

「お侍さま、ご執心でござりまするな」

と、馬をとめ、さきほどとはうってかわった人の善い笑顔をむけた。

「ほしいのだ。が、かねがない」

「おそれながら、あなた様は何石のご身上であられまするか」

みなりからみて、どうせ、五、六十石の小身者であろうとおやじは気の毒そうにいった。ところが、

「二千石」

といったから、おやじは仰天した。

「そ、それはご大身な。お見それ申しあげました。しかし失礼ながらそのお身なりではとてもとても、百石取りとさえ思えませぬ」

「家来が多いのだ」

「あっ、左様か。左様でありましょう。身上以上に数多くのご人数を扶持(ふち)なされておる。お侍はそれでなくてはなりませぬ。戦場の功名は人じゃ。ああ、あなたさまは織田様のご家運がつづくかぎりご出世なさるでありましょう」

「そう思うてくれるか」

と、どうも頼りない声である。この男が身上以上の人数をかかえるような勇気と器量の持ちぬ

しとは思えない。

　すべて千代がそうさせていることだ。侍の綺羅は人である。よき家来、数多くの人数をもつことだ。美服ではない。というのが、千代の考えであった。

「だから、わしにはかねがない」

「それはお気の毒じゃ。では、買う買わぬはさておき、あなた様の眼分量でこの馬の値を申していただきましょうか」

「買う買わぬは別か」

「へい、左様でございます。いくら？」

「黄金十枚」

「おお、よくぞ申されました。わしもそのくらいであろうと思っておりました。なるほど黄金十枚」

「おやじ、今夜は安土どまりか。それならば頼みがある。わしの屋敷はここから十里離れた長浜という湖岸にある。そこに女房殿がいる。成る成らぬはべつにして、いちど相談してみたい。待ってくれるか」

「おお、待ちまするとも。手前はお城下の美濃屋佐兵衛と申す旅館にとまっております」

「心得た」

　伊右衛門はすぐ羽柴屋敷にもどり、馬をひきだして長浜へむかった。なるほどあの馬を見た眼には、この鞍の下で動いている生きものは、まるで犬である。



（黄金十枚。……）

　夢のようなかねだ。この当時は通貨としての黄金の流通があまりなかったころである。黄金がふんだんに佐渡から出はじめて、日本が世界有数の金産国になり桃山の黄金文化の素地ができたのは秀吉が天下をとる直前からで、この当時は大名でも黄金の一枚ももたぬ者が多い。すべて米が貨幣になっていたのである。

　一枚でも、すごいものだ。あるいは黄金三枚ばかりで、伊右衛門の長浜屋敷ぐらいなら、らくらくと建つであろう。

　長浜の屋敷についたのは、夜である。

　千代はすでに寝化粧をおえて、寝所に入ろうとしていた。

「いまじぶん、どうなされたのです」

　とは、千代はいわない。

（これは大事があった）

　伊右衛門の青い顔色をみて、

　と見、とっさに覚悟もでき、それとなく問いほぐしてみようと思ったのである。

「千代はお酒がのみたいと思っていたところでした。この近在の百姓が、よいお酒ができたといって一かめ、もってきてくれたのがございます」

「お前は酒のみだな」

伊右衛門は、いい顔をしない。
「そりゃあ、好きでございますわ。いただくとつい陽気になって、世の中のなにもかもがぱっと花景色にみえてくるからふしぎでございます」
「お前はのんきでいい」
「ええ、わたくしはのんき者」
「そうだろう。お前の眼からみれば、そのあたりじゅう、花が咲いているらしい」
「ええ、一豊様のお顔にも」
千代は酒の支度をした。
伊右衛門の前に、杯をおいた。置いた、といっても伊右衛門は、口をぬらすほどしか飲めない男である。
「どうぞ」
と、注いだ。
「よさそうな酒だな」
さかなは、するめと山の芋のなます、それに湖でとれる小魚が三びき。
「千代、きょうは、馬を見た」
「馬を？」
「うん。竜のような馬だ」
伊右衛門は、安土の馬市の情景を語り、そこでの事柄をこまかく物語った。



「明智様のご家来も、丹羽様のご家来も、みなみな主命を受けて買いにきていたが、あの馬には恥をかいただけであった。加藤虎之助という小姓がいてな」
「聞いております。羽柴様ご自慢の鬼小姓でございましょう」
「ぜにを一文ももたぬのに値をつけて、ばくろうから恥をかかされた」
「まあまあ」
千代は笑いながら、心中、すでに伊右衛門の言おうとすることを察していた。とにかく意外にも大事ではなかったという安堵もあって、陽気にいった。
「それ、いくらでございます？」
「きくな、虫がまたおきるわ」
伊右衛門は、酒で真っ赤になっている。
「千代にもきかせてくださいませ」
「お前が打出の小槌をもっているわけでもないのに、きかせてどうなることでもない」
「ホホホ……、持っているかもしれませぬ」
「打出の小槌を？」
伊右衛門は少年のような眼をした。
なるほど、そういわれてみると、千代というのはふしぎな女房ではある。妙に智恵がでてくるし、切羽つまったときでもなんとかこの女房は始末してきたような気がする。こんど、成らぬことは知りつつ千代に相談しにもどったのも、よく考えてみれば、

（もしや。——）

と頼る気があったのではないか。

千代は、ほろほろと酔いはじめている。

「千代、おどろくな、黄金十枚。あははは、肝がつぶれたか」

「……」

むせている。体をまげ、口に手の甲をあてて、しきりと咳をした。酒が気管に入ったらしい。

いや、じつのところ驚いたのだ。おもわず酒がべつのところへ流れこんでしまった。

「どうした」

「はい、すこし。……」

咳がやまない。伊右衛門はどうも千代の様子がおかしすぎるので、後ろへまわって背をさすってやった。

「おどろかせてすまなかった。なんの、夢のような話さ、笑えば済む」

「はい、笑います」

「そうそう。もうおさまったか」

千代はやっと顔をあげた。

むせているうちに考えたのだ。眼がひどく澄んで、きらきら光っている。

「買いましょう」



と、いった。

伊右衛門はあきれた。だんだん腹がたってきて、馬鹿者、とどなった。

「冗談でも、ひどすぎるわい」

「うん、冗談かな」

と、千代は少女じみた表情になって、ちょっと自問するように小首をひねった。

千代の考えるところ、大馬かならずしも戦場の役に立たず、という説がある。乗り手の体にあった馬がいいという古強者（ふるつわもの）もいる。しかし、追うにしろ逃げるにしろ格闘するにせよ、駿馬をもつ武者に圧倒的に利があるというのは常識である。とくに敵陣に槍を入れてゆくときは、最初は雑兵が邪魔をして容易に敵の騎馬武者に近づけないものだが、駿馬だとそういう雑兵を蹴散らしてゆくという利がある。

いやいやそういう駿馬論はべつとして、織田家の家中がついに買えなかったほどの馬なら、今日あたり、城中城下で非常な評判が立っているであろう。

それを伊右衛門が買った、となれば、織田家五万の侍のなかできわだった話題に乗る。信長の耳にも入るであろう。侍の働きは戦場だけではあるまい、……と千代は思った。

（買うべきだわ）

と、みずからに言いきかせた。

「ふざけたやつだ」

伊右衛門は席にもどって、小魚を頭ごと口に入れた。

その拍子に、千代は立ちあがった。どこへゆく、という眼を伊右衛門はしたが、千代は微笑でおさえた。

自分の部屋に入り、鏡をとりだした。輿入れのときに、伯父の不破市之丞がもたせてくれた鏡である。鉄製円形で柄がついており、その裏に、行書で、

「毎傍玉台疑桂月　未開宝箱似蔵雲」

ときざまれている。

この鏡の箱の中に、黄金十枚がおさめられているのである。伯父の不破市之丞がもたせてくれたものだ。

——千代、使うな。

と、不破市之丞はいった。不破家は美濃三人衆といわれたほどの豪家だが、それにしても黄金十枚は、姪への思いきった贈りものである。

——婿殿の大事のときに使え。

伯父は、そういった。

千代は、それをとりだし、ふくさに包んで立ちあがった。

伊右衛門は、うつむいて小魚の骨を小皿の上へ捨てている。千代がもどってきたのをみて、

「どこへ行ったのだ」

と、不審そうに眼をあげた。



千代は、伊右衛門の両手の指をみて、眉をひそめた。小骨がくっついている。

「なまぐさそうな、手。お手洗へいらっしゃいましよ」

「なぜだえ」

「いいものをお見せしますから」

伊右衛門は、立って手をあらいに行き、もどってくると、膳部の横に紫のふくさの包みがおいてある。

なにげなくひろげた。あっ、と驚き、千代の顔を噛みつきそうな眼でみた。

「どうした、これは。黄金ではないか。し、しかも、十枚」

「はい。ご不審でございましょうけど、わけがございます。きいて頂けましょうか」

「き、きかいでか。申せ」

千代は、伯父不破市之丞の好意と、かれがその黄金につけた条件の話をした。が、伊右衛門の大きくひらいた眼はますます瞬きがすくなくなり、ついに怒鳴った。

「な、なんと、可愛気のないやつだ。われら二人は年中貧乏に堪えてきたのに、お前だけはこっそり黄金を秘めかくし、わしにも知らせなんだ。理由はなるほどわかった。しかしなんと情の強いおなごよ。千代、お前はそういう女だったのか」

はじめて自分の女房を、他人の眼でまじまじと見た。

「賢すぎる女だ、お前は。心が何室にもわかれていて、玄関からは見通せぬ」

ぽろりと千代は涙をこぼした。伊右衛門が突いたような女であることを、自分がいちばんよく

知っている。伊右衛門の興ざめたような気持が、千代自身にもわかるのである。自分が男なら、そういうさかしらぶった複雑な構造の女房など、もちたくない。

（こまった）

つい伊右衛門に与えてしまったこの印象を、どう掻き消してしまうべきか。

（泣くにかぎるわ、理屈をいわないで）

そう心に決すると、便利なもので千代はだんだん悲しくなり涙がとめどもなく流れてきた。泣いてしまった、となるとこんどはわけもなく悲しくなってきて、袂を顔に押しあてた。激しく肩がふるえはじめた。

あわてたのは伊右衛門のほうである。

「千代、誤解だった。言いすぎた。いや、あまりの意外さに、感情がとまどってしまって、よろこぶべきところを、とりちがえて腹をたててしまった。こまるではないか、泣いては」

「でも、泣かせるのはどなたでございます」

「千代。――」

伊右衛門はおろおろしている。泳ぐような手つきで立ちあがり、千代の肩をだいた。

「いまのは、おれの中の悪魔がいったのだ。おれにはそういう物が住んでいる」

と、やらでもの露悪的な分析をして、千代の機嫌をとろうとした。

（この辺でかんべんしてやろうかしら）

そう思いながらも、いったん坂道をころがってしまった悲しみは、涙を出しきってしまうまで



とまらないようである。

千代は、突っ伏せてやった。

さんざん泣くと、やっとおさまってきて、こんどは笑いがこみあげてきた。

背中が、笑いでふるえている。

伊右衛門が黄金十枚で馬を買ったといううわさは、長浜城下だけでなく、安土城下にもひろまった。

「ほほう、山内伊右衛門とはそれほどの男なのか」

伊右衛門を知る者も知らぬ者も眼をみはった。もともと平凡な男、という印象しか、家中の者はもっていない。このうわさで、人々の心のなかにある伊右衛門像が一ぺんに修正されてしまった。人が、他人を見ている眼は、するどい一面もあるが、他愛もないうわさなどで映像をつくってしまうようである。千代は、そういうことを見ぬいていたようであった。

言っておくが。

人々は、奥州産の駿馬を手に入れた、というそのことに驚いたのではない。

「黄金十枚」

に衝撃をうけたのである。

この時代のひとは、黄金という稀少金属に対して夢のようなあこがれを抱いていた。

桃太郎が、鬼ケ島からもってきた宝物は、金、銀、珊瑚（さんご）、綾錦（あやにしき）である。室町時代から戦国初頭

にかけて世にひろまったこのおとぎばなしは、当時の人のこの四種類の宝物へのあこがれをあらわしている。

貨幣としての黄金を武士が蔑視するようになったのは江戸時代になってからで、戦国時代にはそういう精神習慣はなかった。むしろ無邪気なあこがれだけがあった。黄金十枚、といううわさをきいたとき、それだけで織田家の家中の者は伊右衛門が英雄にみえたであろう。

ああ、もう一ついっておかねばならない。

黄金を天下流通の貨幣にしたのは、秀吉である。秀吉の天正大判がそうである。家康がそれをまねて、慶長大判、慶長小判をつくった。

したがって、千代がその鏡の箱にしまっていた黄金は、そういう正式通貨ではない。ただ金塊を槌で打ち平めたもので、天正大判のように規則ただしい槌目もなければ、何両とかいた墨字もなく、極印もない。しかし量目は、のちの天正大判とおなじように、一枚四十匁ぐらいだったらしい。千代の当時、四十匁で、黄金一枚、と俗称していたようである。

とにかく、たいしたものである。

「伊右衛門は、二千石の身上で三千石の身代相応の兵を養い、なおかつそれほどの財貨をもっていたのか」

非凡、という印象をあたえた。

それがやがて、

――内儀がもっていたらしい。といいつたわったとき、うわさは一そうに感動的なものになった。

「伊右衛門殿は、よい妻女をもたれている」

そういううわさほど、山内家というものの奥行きの深さを印象させるものはない。

織田家の戦闘員は、五万である。三人ずつの家族をもっているとして、十五万人が伊右衛門のうわさをした。

娯楽のすくないころだから、他人のうわさが、劇、小説などの役目をはたしている。山内一豊夫妻のはなしというのが、当時はおろか、こんにちまで人に知られ、戦前は小学校の国定教科書にまで載った、というこの插話の根づよき生命は、右の理由によるものだ。

千代は、馬などよりも、その「うわさ」を黄金十枚で買ったといっていい。馬は死ぬ。うわさは死なないのである。

伊右衛門は、家中で名士になった。

伊右衛門を、一躍天下の名士とさせた信長の馬揃え（観兵式）が京でおこなわれたのは、天正九年二月二十八日であった。

この史上有名な催しは、時の帝正親町天皇が、右大臣信長にむかい、

「武家には馬揃えというものがあるときくが見たいものだ」

といわれたのがきっかけというが、そうではなかろう。信長独自の企画のはずである。あるいは、故実にくわしい明智光秀あたりの献策かもしれない。信長というひとは、光秀の戦国武将に

はめずらしい博学とこういう企画力をひどく買っていたのである。

とにかく、明治以前における空前絶後の大観兵式であった。

信長はまだ天下の中原をおさえたのみであるにせよ、官位は鎌倉幕府の創設者右大将源頼朝を越える大臣にまでのぼっている。

——もはや、天下は織田家のものぞ。

という被征服大名への示威と、その日天下最大の軍容を誇示するのには、天皇臨御の馬揃えほど効果のあるものはなかった。

信長は翌年に本能寺で殺されているから、この観兵式はかれの生涯における得意の絶頂であったに違いない。

——馬揃えの用意をせよ。

と全軍に布告されたのは、その一月余り前の正月二十三日である。

「千代、あの馬を買ってよかった。馬揃えがあるぞ」

と、伊右衛門は、おどりあがるようにして千代にいった。

「まあ、なんと果報な」

ことか。馬揃えなどは、めったにあるものではない。御大将の信長でさえ、やったことも見たこともないのである。

「いやまったく、われら夫婦は果報者じゃ。これまで乗っていたあの古傘のようにあばらの浮き出た痩せ馬でわしが参加するとすれば、天下の物笑いになったところだ」



「こういうまわりあわせになるのも、あなた様が御運のつよいおうまれだからでございます」

「千代、そなたはいつもそれをいう」

「ほんと」

千代が、結婚以来ずっと伊右衛門に植えつけている信仰である。千代の考えるところ、どうせ人生は禍福いりまじりて縄のごとくなわれたものだ。自分は不運だとも思えるし、運がつよい、とも思える。いっそどちらも正しくどちらも誤りとすれば、

——運がつよい。

と思いこむほうが、あかるくこの世が渡れるのではないか。明るい人間に不運は訪れにくいものだと千代は思っている。

偶然そのころ、安土の城中で信長が、御伽衆の夕庵法印老人とこの話をしていた。

「黄金十枚で購めたと？」

信長はおどろいた。

「いやいやそういうことよりも、その山内伊右衛門とやら、ようやった。もし伊右衛門が買わなければ、その奥州のばくろうは、諸国へ行って織田家の侍の不甲斐なさを吹聴しまわったことであろう。功は、戦場の槍先だけのものではない」

信長も、正直なところ山内伊右衛門という存在は、すっかり忘れてしまっている。

「それほどの男か」

ともいい、

「その馬が見られるとは、馬揃えの日が楽しみなことよ」
ともいった。
馬揃えの当日がきた。
いやもう、京は割れるような騒ぎで、近国から見物に来る者だけで十万の数をかぞえたであろう。
その観兵式場は、内裏の東に、北より南へかけて八丁の大広場である。この大広場の端と端には長さ八尺の柱を何本もたて、これを毛氈で包みこんで美々しくみせ、柱と柱の間にはサクをゆいまわして、境界とした。
天子が公卿、殿上人をひきいて観覧なさる桟敷は、内裏の東の御門の築地の外に急工事で造営された。
仮り御殿である。
とはいえ、屋根は檜の板でふき、欄干、階段には金銀をちりばめ、決して粗末な建物ではない。
当日、辰ノ刻（午前八時）天子が仮り御殿に出御されるや、はるか馬場のむこうで馬揃えの開始をつげる大太鼓がトウトウと鳴りひびいた。
信長の諸大名のうち、第一陣の出場は、丹羽長秀である。
小鹿毛の逸物に打ちまたがり、馬印を金色さん然とかがやかせつつ、並足でトットットッと出てきた。これに、摂津衆、若州衆、山城衆など小大名がつづいてゆく。



第二陣の将は、明智日向守光秀。糟毛のみごとな馬に乗り、大和衆などの小大名をひきいてゆく。
第三陣は村井作右衛門。これで先駆がおわり、織田家の家門がつづく。織田三位中将、北畠中将、織田上野介、神戸三七。それらがすぎると、ふたたび諸大名になる。
山内伊右衛門は、羽柴秀吉がすぎて行った十騎あとに、ゆらりと山鳥芦毛の例の逸物を打たせて出てきた。その馬のみごとさに、公卿の桟敷からさえ感嘆の声でどよめいたほどであった。
「おお、あれか、馬で知れるわ」
信長は、ひざをたたいた。
「伊右衛門の山鳥芦毛の前には、諸大名どもの馬さえずんと見劣りしてみえる」
伊右衛門は、戛々と打たせてゆく。乗りざまもいつもとちがってみごとなものだ。馬がよいと、つい乗る姿勢さえしゃんとしてくるものらしい。
（千代、見ろ。そなたの馬だ）
伊右衛門の眼の前に、浅みどりの春の朝の空がひろがっている。
戛々とゆく。
信長は、上機嫌だった。
「いや、今日はよき侍をみつけた。あの馬代に二百石を加増してやれい」
やがて、信長自身の乗馬群が、御厩別当青地与右衛門の指揮で、水干、白袴、素足に草履といった白丁姿のおおぜいのお厩中間に曳かれながら出てきた。

まず、黒漆に金蒔絵をすった美麗な馬びしゃく三千個が通過してゆき、つづいてこれまた工芸の粋をつくした草桶などを持つ人数が徒歩でゆき、順次、鬼芦毛、この一頭のための御道具として、水桶、ひしゃく、鞍におく唐織物、やはり鞍におくアオリ（泥よけ）などの馬具をもつ者がつづく。

信長の馬は、このほか、小鹿毛、大芦毛、遠江鹿毛、小雲雀、河原毛など六頭で、これはむろん群を圧している。

が、この六頭をのぞけば、大名でも何でもない伊右衛門の持ち馬がおそらく最高であろうというのが、当日の評判であった。


文春文庫

功名が辻（一）

定価はカバーに表示してあります

1976年3月25日　第1刷
2001年6月15日　第53刷

著者　司馬遼太郎
発行者　白川浩司
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp
文春ウェブ文庫　http://www.bunshunplaza.com

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本
Printed in Japan
ISBN4-16-710517-9